立教大学図書館蔵絵入り資料解題（前篇）

絵巻の会

一　凡例

○主に立教大学所蔵の絵巻、画帖、掛幅について、閲覧の便宜のためにその特徴をまとめたもので、Ⅰ 書誌、Ⅱ 概要、Ⅲ 特色、Ⅳ 諸本、Ⅴ 翻刻、Ⅵ 参考文献の6項目を立項した。

○作品名や引用本文などは、読解の便を図るため、適宜句読点を補い、現行字体に改めるなどした。

○時代区分については特に表記の統一ははからなかった。ただし、年代の表記については次のように統一した。

例　寛政七年（一七九五）

　　宝暦年間（一七五一～一七六三）

○標題について、立教大学所蔵資料については所蔵者整理書名（OPAC検索書名）を、個人蔵の資料については一般的に用いられている呼称を記した。

○Ⅰ　書誌の項では、以下のように細目を設けた。

【作品名】【請求記号】【形態・数量】【外題】【内題】【奥書・識語】【表紙・横寸法】【見返し】【料紙】【寸法】【用字】【絵】【備考】

○Ⅱ　概要では、作品の全体像がつかめるよう、立教本を中心にした梗概、解説などを記した。伝本系統が複数ある場合、立教本に関連する情報にとどめたものもある。

○Ⅲ　特色では、諸本との比較から、立教本が持つ挿絵・本文上の特徴、問題点などについて記した。

○Ⅴ　翻刻は掲載しなかった作品もある。

翻刻凡例

・旧字・異体字は現行の字体に改めた

・原則として、表記、改行は底本に従い翻刻した。

・本文に誤脱などがあり不審な箇所には、「ママ」と振った。

該当絵巻のみに適用される特殊な凡例については個別に付した。

・詞書がないものは「なし」、詞書はあるが翻刻を掲載しなかった場合は「不掲載」と記した。

○Ⅵ　参考文献は、立教本の特色を考える上で特に重要と考えられる先行研究のみを取り上げた。

○改行は　／　、割注は〈　〉で示した。

○画像の権利は立教大学図書館にあり、無断引用、転載を固く禁ずる。資料の閲覧、翻刻を快く許可していただきました、立教大学図書館に深謝申し上げます。

○絵巻の会は、立教大学旧小峯研究室、鈴木研究室、小嶋研究室からなる。メンバーは以下の通り。石田礼子（本学修了生）、泉屋咲月（本学院生）、大石将也（本学修了生）、大久保あづみ（本学修了生）、大澤奈穂（本学修了生）、大竹明香（本学院生）、大貫真実（本学院生）、金英順（本学兼任講師）、粂汐里（総合研究大学院大学院生）、小泉奈生子（本学修了生）、小峯和明（本学名誉教授）、塩見香奈（本学院生）、塩川和広（本学院生）、鈴木彰（本学教授）、出口久徳（立教新座中学高等学校・本学兼任講師）、長谷川奈央（本学院生）、宮腰直人（山形大学准教授）、目黒将史（本学兼任講師）、安原眞琴（本学兼任講師）、吉橋さやか（本学兼任講師）。

二　収録作品一覧

作品名は立教大学図書館の所蔵者整理書名（OPAC検索書名）による。括弧は登録番号をさす。

【前篇】

1　奈良絵本竹取物語絵巻（52124379~81）
2　［竹取物語］（52097199）
3　［奈良絵本：断簡：竹取物語］（52127913）
4　長恨歌絵巻（52124878）
5　後三年之戦圖幷文（52225101）
6　男衾三郎絵詞（52143441）
7　ふえのまき（52279619）
8　桃太郎絵巻（52057876）
9　福富草紙（52153718）
10　福富草子絵巻（52108110~1）
11　［未詳奈良絵巻］（52085578）
12　行長筆能恵絵巻物（52159373）
13　こゝろ双紙　全（52173893）
14　百鬼夜行絵巻（52085579）
15　年中行事絵巻　巻一（52106827）
16　扇の草紙屏風（52123539）

17　扇の草子断簡／［尾張大納言画］（52195267）

【後篇】次号掲載予定

18　野花實録　大江山物語（52085580~4）
19　［大江山繪巻］（52102091）
20　酒呑童子（52252121~2）
21　［酒呑童子絵巻：粉本］（52102090）
22　道成寺縁起絵巻（52152034）
23　道成寺絵巻（52099158）
24　『安珍清姫絵巻』（52097148）
25　安珍清姫絵入縁記（52097505）
26　釈迦の本地（52230055~6）
27　釋迦八相記（52271383~6）
28　無二講之記（52221820）
29　無二講之記（52221821）
30　職人盡之繪（52220021）
31　蝦夷地図説（52208041）
32　須弥山（52220020）
33　七福神：画（52220022）

三　資料解題

1・奈良絵本竹取物語絵巻

I　書誌

【作品名】　竹取物語絵巻
【請求記号】　NDC：913.31／TA 66
【形態・数量】　絵巻・三軸
【外題】　なし
【内題】　なし
【奥書・識語】　なし
【表紙・横寸法】　原表紙、深緑地、瑞祥紋・
上巻、中巻　二十七・二糎
下巻　二十七・四糎
【見返し】　金泥、布目（原表紙）
【料紙】　斐紙、詞書に秋の七草などの下絵あり
【寸法】　上巻　縦三十二・九×全長一一八九・〇糎
中巻　縦三十二・九×全長一一〇八・〇糎
下巻　縦三十二・九×全長一〇二二・二糎
【用字】　漢字平仮名混じり
【絵】　濃彩全十八図（上巻・六図、中巻・六図、下巻・六図）
【備考】　箱あり。内箱（漆・箱書「竹取物語」）、外箱（木）

Ⅱ　概要

（上巻）かぐや姫誕生、石作の皇子と仏の御石の鉢、くらもちの皇子と蓬莱の玉の枝、阿部の右大臣と火鼠の皮衣の場面。

（中巻）阿部の右大臣の火鼠の皮衣の続きから、大伴の大納言と龍の頸の玉、石上の中納言と燕の子安貝の場面。

（下巻）御門とかぐや姫の交流から、かぐや姫の昇天、不死の薬の場面。

Ⅲ　特色

全三巻。一巻ごとに六図ずつ配置され、計十八図を有し、江戸中期ごろの作と考えられる。

『竹取物語絵巻』は、現在確認できるものでは一巻本、二巻本、三巻本の三種類がある。

一巻本は京都大学蔵本のみであるが、ペン書きの外題が誤記されたもので、絵は『竹取物語』ではないとの曽根誠一による指摘がある。

二巻本は、宮内庁書陵部本、ＣＢＬ本の二点に、未確認のくもん子ども研究所本、吉田幸一氏所蔵本を併せた計四本である。ＣＢＬ本は、詞書を有した絵巻であるが、宮内庁書陵部本は絵のみである。おそらくは別に「竹取物語」本文の冊子または巻子があり、一人がこれを読み、その他が聞きながら絵巻を見る、という鑑賞の仕方をしていたのではないだろうか。

三巻本は立教所蔵本を含め、今回リストに上がっているものの半数以上にあたる。諏訪市博物館蔵本と立教本の比較が、宮腰直人、目黒将史、青木慎一による先行研究でなされている。また、立教本・ＣＢＬ所蔵本・國學院大學蔵本の三本の挿絵が、情景選択や構図などにおいて近似していることが小嶋菜温子によって言及されている。この発表をもとに、立教本と國學院大學蔵本（武田祐吉博士旧蔵）の詞書の比較がなされ、両者が非常に近しい関係であることが青木慎一によって指摘された。

そのほかに、全三軸で、二軸は絵画のみ、もう一軸が詞書という形態のものが小峯和明によって紹介されている。二巻本の宮内庁書陵部本との関係があると考えられるのではないか。

『竹取物語絵巻』の研究は、徳田進の論考によって基本的な問題が概観でき、近年も新出の伝本の紹介が相次いでいる。しかし、それらは個別のテキストの読解に終始しており、系統の分類や諸本掌握までには至っていないため、『竹取物語絵巻』諸本における立教本の位置づけを行うことが難しい。現在確認できる『竹取物語絵巻』を、軸数という形態のみで分類すると、二軸仕立てのものと、三軸仕立てのものに大別でき、立教本は後者にあたる。これらとは別に、冊子本などの『竹取物語』も数多く残っており、「竹取絵」として全体的な視野での考察が必要である。

立教本では下巻第六図のかぐや姫昇天後の場面に、帝に不死の薬と文が送られる図を採用している。立教本と同じ三巻仕立ての諏訪

市博物館本では、この最後の場面は絵画化されていない。また、立教大学蔵『竹取物語屏風』では、富士山を背景にかぐや姫とおぼしき天女が描かれている。管見の及ぶ範囲だが、物語終盤の絵画化は、かぐや姫の昇天と富士山と、帝への不死薬伝達という三つの要素の組み合わせや選択からなるようである。本場面は諸本を掌握する上で手掛かりとなり、立教本の特徴を知る上でも重要なポイントとなるであろう。

Ⅳ　諸本

絵入り写本（冊子本）

東洋文庫岩崎文庫（三冊）

東北大学狩野文庫（三冊、東北大学狩野文庫マイクロフィルム）

神宮文庫（三冊、国文M）

天理図書館（三冊）

九州大学図書館支子文庫（二冊、江戸中期、九州大学図書館HP、国文M）

中京大学図書館（一冊、「中京大学附属図書館蔵国書善本解題」）

龍谷大学図書館中川文庫（二冊、龍谷大学善本叢書『奈良絵本』上）

龍谷大学図書館（三冊完本、龍谷大学善本叢書『奈良絵本』上）

メトロポリタン美術館（三冊、「『竹取物語』絵本―メトロポリタン美術館蔵を中心にして―」）

ニューヨークパブリックライブラリースペンサーコレクション（三冊）

ニューヨークパブリックライブラリースペンサーコレクション（三冊）

中野幸一（三冊、九曜文庫奈良絵本　甲本〈延宝頃〉）

中野幸一（二冊、九曜文庫奈良絵本　乙本〈元禄頃〉）

臼杵市図書館（三冊、江戸初期、国文M）

井田等（三冊）

フェリス女学院大学（三冊、「新出資料フェリス女子大学「竹取物語」紹介」

宮本長興本（国文M、徳田進『竹取物語絵巻の系譜的研究』）

（巻子本）

宮内庁書陵部（二軸、十七世紀後半頃写、絵のみ、樺島忠夫本文解説『竹取物語絵巻　本物の絵巻を現代語訳で読む』、題「竹取翁幷かぐや姫巻物」）

国会図書館（三軸、国立国会図書館デジタル化資料、題箋「竹とり物語　上（中下）」偈）

諏訪市博物館（三軸、高島藩主諏訪家伝来、諏訪市立博物館編『竹取物語』、箱書「竹とり物語　三巻」題箋「竹取物語　上（中下）」）

京都大学（一軸、国文研古典籍目録に記載あり。未確認）

九州大学国文学研究室（三軸、近世中期写、九州大学附属図書

館、日本古典籍画像データベース、題箋「竹とり物語　上（中下）」
東京大学国文研究室（三軸、慶安三年（奥書）写）」
慶應大学斯道文庫（三軸）
早稲田大学（寛政十二年以前書、徳田進『竹取物語絵巻の系譜的研究』、題「竹取物語図」（古典籍目録記載　未確認）
穂久邇文庫（三軸、国文研古典籍目録に記載あり。未確認）
逸翁美術館（三軸、国文M　未確認）
CBL（二軸、近世初期写、『チェスター・ビーティー・ライブラリー所蔵「竹取物語絵巻」』外題、内題なし）
CBL（三軸　未確認）
CBL（三軸　未確認）
くもん子ども研究所（二軸　未確認）
小学館（三軸、徳田進『竹取物語絵巻の系譜的研究』、題箋「竹とり物語上（中下）」
泉谷博古館（三軸　未確認）
吉田幸一（二軸　未確認）
吉田幸一（三軸、中世紀末期写、『図説　日本の古典』五「竹取物語・伊勢物語」、現存する最古の作品か。題箋「竹取物語　上（中下）」）
ニューヨーク　クリスティーズ　オークション（三軸、近世中期写、未確認。絵一軸、詞書一軸。小峯氏紹介）
立教大学図書館（三軸）
國學院大學（ハイド旧蔵、三軸、針本政之「『竹取物語』の本文」）
國學院大學（武田祐吉旧蔵、江戸時代前期（寛文・延宝期写、針本政之「『竹取物語』の本文」國學院デジタルライブラリー、箱書に「竹取物語三巻　詞書青蓮院宮尊鎮親王御筆　絵　狩野永徳法印筆」）
國學院大學（小型本、三軸、三軸、針本政之「『竹取物語』の本文」、小型）
九曜文庫本絵巻（寛文延宝頃写、『九曜文庫蔵奈良絵本・絵巻集成竹取物語絵巻』

その他

（画帖）

チェスター・ビーティー・ライブラリー（写本、折本一帖、近世中期写、詞書なし、巻尾に「光芳之印」（朱方陰刻印）、国文学研究資料館・チェスター・ビーティー・ライブラリィ編『チェスター・ビーティー・ライブラリィ絵巻絵本改題目録』勉誠出版、二〇〇二年）
小学館（徳田進『竹取物語絵巻の系譜的研究―橘守部作竹取絵巻絵の展開―』）

（貼交屏風）

海の見える杜美術館『奈良絵貼交屏風』

Ⅴ　翻刻

不掲載。参考文献、宮腰・目黒・青木〇七論文参照。

Ⅵ　参考文献

【図録・新出資料紹介論文】

長谷川端「中京大学附属図書館蔵国書善本解題」（『中京大学図書館学紀要』、一九八〇年）〈冊子・中京図書館蔵本〉

中野幸一編『奈良絵本　絵巻集』一（早稲田大学出版、一九八七年）〈冊子・中野幸一蔵本二種〉

龍谷大学善本叢書『奈良絵本』上（思文閣出版、二〇〇二年）〈冊子・龍谷大学蔵本二種〉

国文学研究資料館・チェスター・ビーティー・ライブラリィ編『チェスター・ビーティー・ライブラリィ絵巻絵本改題目録』（勉誠出版、二〇〇二年）

諏訪市立博物館編『竹取物語絵巻』（諏訪市博物館、二〇〇三年）〈諏訪市博物館本〉〈絵巻・諏訪市博物館本〉

樺島忠夫本文解説『竹取物語絵巻　本物の絵巻を現代語で読む』（勉誠出版、二〇〇三年）〈絵巻・宮内庁本〉

三田村雅子・新生優希「新出資料フェリス女子大学「竹取物語」紹介」（『フェリス女子学院大学文学部』第41号　二〇〇六年三月）

中野幸一・横溝博共編『九曜文庫蔵　奈良絵本・絵巻集成　竹取物語絵巻』（勉誠出版、二〇〇七年）

小嶋菜温子・渡辺雅子編『甦る絵巻絵本　チェスター・ビーティー・ライブラリー所蔵「竹取物語絵巻」』（勉誠出版、二〇〇八年）

石川透『入門　奈良絵本・絵本』（思文閣出版、二〇一〇年）

安藤徹・外山敦子共訳注『かぐや姫と絵巻の世界　一冊で読む竹取物語訳注付』（武蔵野書院、二〇一二年）

【研究】

中野剛直『竹取物語の研究』（塙書房、一九六五年）

片桐洋一他編『竹取物語・伊勢物語』（図説日本の古典5、集英社、一九七八年）

徳田進『竹取物語絵巻の系譜的研究―橘守部作竹取物語絵巻絵の展開―』（桜楓社、一九七八年）

徳田進「竹取物語絵巻の系譜的研究補遺―増補資料並びに守部本の周辺」（『群馬女子短期大学紀要』9、一九八二年九月）

小峯和明「在米絵巻訪書おぼえがき」『立教大学大学院日本文学論叢』2号、二〇〇二年九月）

久保木寿子「絵本・絵巻と物語表現―『かぐやひめ』の背景―」（「白梅学園短期大学紀要」40、二〇〇四年九月）

宮腰直人・目黒将史「資料紹介―立教大学蔵『竹取物語』貼交屏風」（「立教大学大学院日本文学論叢」6、二〇〇六年八月）

宮腰直人・目黒将史・青木慎一「立教大学蔵『竹取物語絵巻』解題と翻刻」（『立教大学大学院日本文学論叢』7、二〇〇七年八月）

中島和歌子「中学校国語教科書『竹取物語』の挿絵をめぐる問題点

と可能性『竹取物語絵巻』昇天図の解釈と分類」（『札幌国語研究』12、二〇〇七年八月）
針本正行「チェスター・ビーティー・ライブラリィ（ＣＢＬ）蔵『竹取物語』書誌・解題・翻刻」（針本正行研究代表『物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究　國學院大學所蔵本を中心として』二〇〇八年）
青木慎一「研究ノート『竹取物語絵巻』の本文をめぐって―立教本・國學院本の比較から」（針本正行研究代表『物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究　國學院大學所蔵本を中心として』二〇〇八年）
小嶋菜温子　奈良絵本・絵巻国際会議ダブリン大会（於：ＣＢＬ　二〇〇八年三月二十二・二十三日）
小嶋菜温子　科学研究費補助金基盤研究（Ｂ）「物語絵巻の本文と其の経巣に関する総合的研究―國學院大學所蔵本を中心として―」講演・研究発表会「物語絵巻の世界―國學院大學所蔵本・ＣＢＬ所蔵本を中心として―」（於：國學院大學　二〇〇九年九月十八日）
渡辺雅子「『竹取物語』絵本―メトロポリタン美術館蔵を中心にして―」（『中古文学』86、二〇一〇年十二月）
針本正行「國學院大学所蔵の絵入り物語」（『中古文学』86、二〇一〇年十二月）
小嶋菜温子「「竹取物語絵」にみる異界と現世―ＣＢＬ（チェスター・ビーティー・ライブラリィ）本・立教本「不死薬の献上」図をめぐって―」（『王朝文学と物語絵』、平安文学と隣接諸学10、竹林舎、二〇一〇年）
曽根誠一「『竹取物語』絵の配列と多義性　逸翁美術館本と諏訪市博物館本の比較を通して」（『花園大学日本文学論究』4、二〇一一年十二月）
曽根誠一「元禄五年絵入版本『竹取物語』第一図「かぐや姫の養育」を読む」（『花園大学文学部研究紀要』45、二〇一二年三月）
曽根誠一「『竹取物語』奈良絵本・絵巻の本文考：正保三年刊整版本の独自異文を視点とした粗描」（『花園大学文学部研究紀要』45、二〇一三年三月）

（担当・泉屋咲月・大久保あづみ・大竹明香・塩見香奈）

2・［竹取物語］

Ⅰ　書誌

【作品名】　竹取物語貼交屏風

【請求記号】　NDC：913.31／TA66

【形態・数量】　屏風

【外題】　なし

【内題】　なし

【奥書・識語】　なし

【表紙・横寸法】　なし

【見返し】　なし

【料紙】　押紙、金散す

【寸法】　縦一七三・五×横一八九糎

【用字】　絵のみ

【絵】　濃彩　全十面、縦三十糎、横二十一・三から二十二・五糎

【備考】　屏風裏左肩にラベル。

Ⅱ　概要

『竹取物語』より、大伴の大納言からかぐや姫の昇天までを描く。

Ⅲ　特色

本作は、江戸時代に絵入り写本・絵巻の形態で制作された竹取物語絵の一伝本と考えられる。詞書は無く、元絵入り写本の挿絵と思しき一〇図を一曲の屏風に張り付けてあり、このうち見開きと思われる場面が二組ある。特徴は、屏風に貼られた挿絵の中で、『竹取物語』で必ずと言っていいほど絵画化される、翁がかぐや姫を発見する冒頭や前半部を欠いている点である。この点から現存するものでは完全ではないと考えられる。

全十図、八場面からなる本屏風の場面は以下の通り。

①大伴の大納言と龍の頸の玉、②石上の中納言と燕の子安貝、③石上の中納言の落下、④御門の勅使の訪問、⑤御門とかぐや姫の対面、⑥月を眺め嘆くかぐや姫、⑦⑧天からの迎えを迎えうつ一同、⑨⑩かぐや姫の昇天

宮腰直人、目黒将史の資料紹介によれば、絵入り写本の『竹取物語』は例外もあるものの、上中下三巻（三冊）の形態をとることが多い。それを考慮すれば、本屏風の挿絵はほぼ中巻及び下巻に相当する部分であると考えられる。

絵巻や絵入り写本以外の形態で描かれた『竹取物語』は、物語の知名度とは裏腹に作例が乏しいようで、管見の及ぶ範囲では、本作と同様に屏風の形態をとるものが一例（海の見える杜美術館蔵『奈良絵貼交屏風』）、画帖が二例（チェスター・ビーティー・ライブラリー蔵本、小学館蔵本）あるのみである。『竹取物語』の受容の中で、本屏風の位置づけを把握するためには、〈竹取物語絵〉として、絵巻や絵入り写本などの各メディアの挿絵を総合的に研究する必要がある。

なお、チェスター・ビーティー・ライブラリー蔵本の画帖は、磯部祥子による詳しい解題がある（国文学研究資料館・チェスター・ビーティー・ライブラリィ編『チェスター・ビーティー・ライブラリィ絵巻絵本解題目録』勉誠出版、二〇〇二年）。これによると、「先述のように、本画帖は隣接する画面の連続性が強い。一連の話を描く画面では建物などもほぼ同じ幅で描かれており、最終図では五雲だけではなく第二九図（前葉）の宮中の建物も連続的に描かれている。富士山も裾野の左端が途中で切れており不自然な図様といえる。本画帖の成立過程で何らかの手が加えられている可能性も推測されるのではないか」との指摘がなされている。

Ⅳ　諸本

1・竹取物語絵巻を参照。

Ⅴ　翻刻

なし。

Ⅵ　参考文献

1・竹取物語絵巻を参照。

（担当・泉屋咲月・大久保あづみ・大竹明香・塩見香奈）

3・［奈良絵本：断簡：竹取物語］

Ⅰ　書誌

【作品名】　絵巻断簡（作品未詳）

【請求記号】　NDC：913.31／N51

【形態・数量】　断簡・一枚

【外題】　なし（表紙破損）

【内題】　なし

【奥書・識語】　なし

【表紙・横寸法】　破損

【見返し・横寸法】　破損

【料紙】　斐紙

【寸法】　縦三十三・五×横四十七・八糎

【用字】　不明

【絵】　濃彩　一図

【備考】　断簡（もと絵巻）。

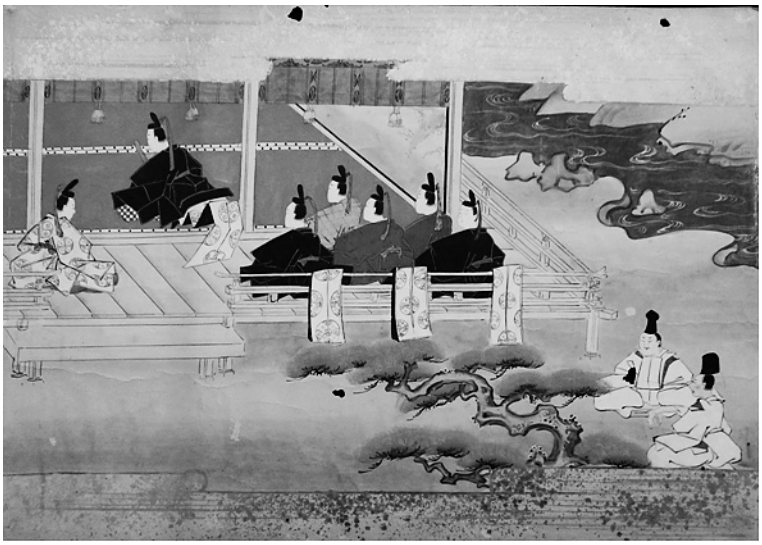
Ⅱ　概要

かぐや姫のことを知った帝は、翁のもとに使いを送る。

立教本『竹取物語絵巻』（1・竹取物語絵巻）や、国立国会図書館本、諏訪市博物館本などに完全に一致する絵はない。

Ⅲ　特色

もと絵巻と思われる断簡である。現存一紙のみ確認できる。場面は、帝の使者が翁の邸宅を訪れる場面か。『竹取物語』に分類されているが、この絵画のみでは判別が難しい。



Ⅳ　諸本

なし。

Ⅴ　翻刻

なし。

Ⅵ　参考文献

諏訪市博物館編『竹取物語絵巻』（諏訪市博物館、二〇〇三年）

（担当・目黒将史）

4・長恨歌絵巻

Ⅰ　書誌

【作品名】　長恨歌絵巻

【請求記号】　NDC：721.4／KA66

【形態・数量】　絵巻・一軸

【外題】　題簽のみ（文字なし）

【内題】　なし

【奥書・識語】　なし

【表紙・横寸法】　薄茶地、獅子・鳳凰・草花、三十二・一糎

【見返し】　金泥、砂子・松・竹・鶴・亀・牡丹・霞

【料紙】　斐紙、詞書料紙に下絵有り（松、鶴、草花）

【寸法】　縦三十五・二×全長一二一九・五糎

【用字】　漢字平仮名混じり

【絵】　濃彩　全五図

【備考】　下巻のみ。箱あり、側面に貼紙あり、「狩野松栄筆玄宗帝楊太真巻物」。極「巻物／玄宗皇帝／楊太真／右／狩野松栄正筆／癸卯秋／古昔庵好斎」。鑑定書「右拝見いたし候処／真蹟相異無候也／昭和四年十二月五日／八十翁／人泉雄」

Ⅱ　概要

安禄山の乱が収束し、玄宗皇帝は都へと帰るが、最愛の妃、楊貴妃を失って嘆き暮らしていた。深く悲しんでいる玄宗の下に、都に遊学に来ていたという道士がやってきて、楊貴妃の魂魄を探し出そうと申し出る。玄宗は道士に頼み、楊貴妃の魂魄を探させた。道士は天に昇り、地にもぐり、あらゆる場所を探したが、楊貴妃の魂魄は見つからなかった。そんなとき、海上に仙人の住む山があると聞き、たどり着いてみると、美しい宮殿があり、そこには美しい仙女が多くいた。その中に楊貴妃がおり、道士は玄宗の使いとして面会した。道士は楊貴妃から思い出の品を証拠として預り、玄宗と楊貴妃のみが知る語らいの内容を聞いて、地上の玄宗の下に報告に帰ってゆく。

Ⅲ　特色

『長恨歌絵巻』は、唐の詩人白居易（七七二～八四六）が、唐の玄宗皇帝（六八五～七六二）と楊貴妃（七一九～七五六）の悲恋を歌った漢詩『長恨歌』の詩句・注釈を絵巻化したものである。立教本は下巻のみの端本で、もとは三軸あったと考えられる。詞書は『やうきひ物語』（万治・寛文頃）によっており（ただし、一部の詩句・注釈が抜けている所がある）、絵も一部はこれに類似するため、万治・寛文以降の成立と考えられる。立教本は極・鑑定書に「狩野松栄筆」とあるが、狩野松栄は狩野元信の三男で狩野永徳の父親であり、生没年は永正十六年～文禄一年（一五一九～一五九二）であるため、この鑑定が正しいとは言い難い。

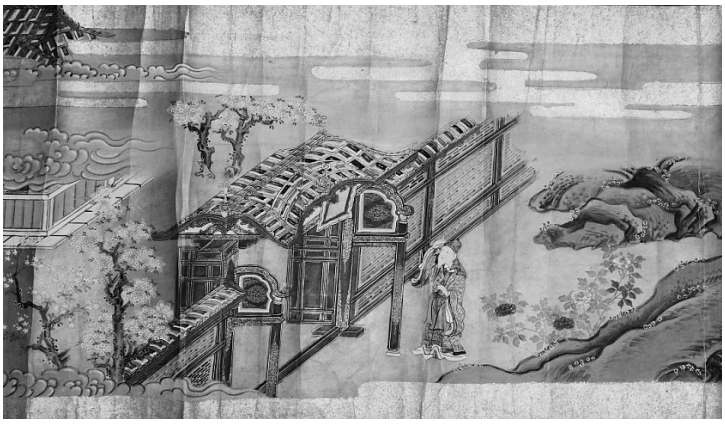
現存する『長恨歌絵巻』で確認できるものは、すべて江戸時代の

ものである。有名なのは狩野山雪『長恨歌画巻』（チェスター・ビーティ・ライブラリー蔵。以下ＣＢＬ本とする。）で、詞書はないが『長恨歌』の詩句に忠実に描いた絵巻とされている。立教本はＣＢＬ本とは異なり、『長恨歌』の詩句と注釈を詞書に持ちそれに基づいて描かれたものである。つまり『長恨歌』の詩句を一句ずつ挙げ、その句に注釈を付け、絵を入れる、という形態である。

この系統の絵巻は、立教本のほかに大谷女子大学『長恨歌』（以下、大谷本）、国文学研究資料館『長恨歌絵巻』、中野幸一旧蔵『長恨歌』と『長恨哥』（以下、前者を中野Ａ本、後者を中野Ｂ本とする。）がある。しかし、同形態でも詞書は異なり、立教本、大谷本、国文研本は『やうきひ物語』（万治・寛文頃、浅井了意筆とされる。平仮名抄）と同様の詞書を持つが、中野Ａ本はライデン民族博物館蔵『長恨歌』（横本）と同様の詞書、中野Ｂ本は古活字版系（片仮名抄）と同様の詞書を持つ。

ただし、立教本は『やうきひ物語』と比べると四～五句分の詩句と抄が抜けている所が二箇所あり、かつ、その箇所は絵には描かれていないため、抄出とも考えられる。

立教本の絵は、『やうきひ物語』と構図が似ているものが多い（第一、二、五図）。立教本と同じく『やうきひ物語』系である大谷本、国文研本も『やうきひ物語』や立教本と同構図のものが多いが、完全には一致しない。それぞれ、他の絵巻に見は見られない絵が描かれている。『やうきひ物語』と構図が異なる立教本第三図は、詞書が同系ではない中野Ｂ本第四図と非常によく似ている。前述のとおり中野Ｂ本の詞書は『やうきひ物語』系統ではないが、立教本と構図が類似するのが興味深い。更に中野Ｂ本第六図は『やうきひ物語』第四図と同構図で、立教本第五図と類似する。立教本第四図は中野Ｂ本にも類似の絵はなく、立教本独自のものである。



立教本第三図

立教本第五図

以上のように、詞書が同系統でも絵がすべて同じとは限らず、それぞれが独自の絵を持っていたり、詞書の系統を越えて絵が類似していたりと、それぞれの絵巻が非常に興味深い関係にあるといえる。また、立教本独自の特徴として、絵は五図とも長さ約九〇糎あり、長大である。このためか、物語の進行と直接関係のない周辺の人物たち（玄宗の周りに控える官吏や、楊貴妃の周りの女仙など）が多く描かれているほか、牡丹や桜の花が多く描かれるのも特徴的である。

Ⅳ　諸本

①絵巻

立教大学『長恨歌絵巻』

チェスター・ビーティー・ライブラリー『長恨歌画巻』（二軸『甦る絵巻・絵本2チェスター・ビーティー・ライブラリィ所蔵狩野山雪画　長恨歌画巻』）

大谷女子大学『長恨哥』（三軸、大谷大ＤＢ）

旧中野幸一『長恨歌』（三軸『奈良絵本絵巻集９　長恨歌・武家範昌・藤袋の草子』）

旧中野幸一『長恨哥』（三軸『奈良絵本絵巻集９　長恨歌・武家範昌・藤袋の草子』）

国文学研究資料館『長恨哥之抄絵入』（三巻、吉田幸一旧蔵、国文研ＤＢ）

新善興寺本『長恨歌』（三巻）

日本大学学術情報センター蔵『長恨歌』（三巻）

②絵入り本

龍谷大学『ちやうこんか』（三冊、寛文・延宝（一六六一～一六八〇）頃、龍谷大ＤＢ）

ライデン民族博物館蔵『長恨歌』（三冊、江戸初期写）

③絵入り版本

万治・寛文頃（一六五八～一六七二）版『やうきひ物語』（三冊）

延宝五年（一六七七）版『長恨歌抄』（五冊、・西郊易亭主人跋）

元禄二年（一六八九）版『長恨歌新抄』（二冊）

V　翻刻

夕殿に蛍とんて思ひ悄然たり
夕くれかたに宮殿のはしちかく出御なりて
いかにも物かなしくさひしきおりふしほた
るのひら〳〵とうちつれてとふを御らんして
もこのむしたにもひとりはとはすうちつ
れてとふにわか身はひとり身になりける
事よとせうせんとしてかなしひ給ふなり
せうせんとはうれふるかたち也
　孤燈かかけつくしていまた眠る事あたはす
ことうはひとりのともし火とよむきひ
にはなれ給ひてのちは御とのゐを申す
ものもなしたゝひとり燈をかかけつくし
てすこしのあひたも御しつまり給ふ事もなし
と也それをいまたねふることあたはすといへり

　遅ゝたる鐘漏はしめて長き夜
ちゝとはをそしと云字を重ねたる也鐘漏とは時の
かね大この事也初て長夜とはそのかみきひに添
給ふ時は夜の短きことを苦み給しに今は引かへ
てことあたらしくよの長ことを初てしろしめし
給ふと也鐘は時のかね漏は漏刻とて一日一夜
を百刻につもりて水のとく〳〵ともり下
たるつもりによりて十二時をしるもの也一時
〳〵に鐘をもらし太こをうつにその一時の間
の明かぬるをいかに久しきものとかはしるとか
こち給ひ夏の夜のねぬるよあけぬといひし
人をうらやみ給ふ心也
　耿ゝたる星河あけなんと欲する天
耿とは少し明らか成てい也星河とは天の川の
事也明なんと欲する天とは天の川うしとら
の方に東の方あかくなりて夜か明る也されは
あまの川かうしとらの方になれはあらうれし
やとおほしめすにいまた明はなれもせすねや
のひまさへつれなしと御心いられし給ひて
扨も明やらぬ空かなと待かね給ふてい也
　絵（第一図）
　臨邛の道士鴻都の客

りんけうは蜀のくにのこほりの名也道士とは
仙人のみちをえたるなり鴻都の客とはかうは
大といふ義なり客とは旅人なりおりふし臨
邛の道士楊通幽といふものかみやこへのほり
てゐたる事也

能精神をもつて魂魄をいたす

せい神とはたとへはこゝろをまことにして仏
神にきせいなとをするやうなる事也せひ
にきひのこんはくをあらはし見せ給へとい
のるなりかやうにすれはこんはくのあらは
れ出るをこなひをこの道士かしれるとなり
こんは陽の玉しゐ也天にかへる魄は陰の玉し
ゐ也地にかへるこんはくすてに天地にかへる
これを死すといふなりこんはくをいたすとは
天地にかへりたるこんはくを又一所にあつめ
かへしてあらはす事也

君王展ゝの思ひをかんするかために

君王は玄宗の事也てん〳〵のおもひといふは
兎ありしものをとかくありしものをなと思ひ
いたし〳〵てきひの事をしはらくも御わすれ
なくなけき給ふありさまをみたてまつりては
さて〳〵いたはしき御事かなとかんし思ひた
てまつりさらはそれかしきひのこんはくの有
ところをたつねてまいらせむと申也

遂に方士をしていんきんにもとめしむ

はうしとはたうしの事なりこの方士か
それかしこんはくのありところをたつね
まいらせんと申をよろこひおほしめして
さらはたつねてまいらせよとおほせあり
けるをもとめしむといふ也方士の方の字は
仙人の方術をしるゆへにはうしといふ仙人
の道をまなひしれるゆへに
又道士とも云也士とは
男といふこころに
おなし

絵（第二図）

風を排ひらき気に馭てはしりて電のことし

風をゝしひらきとは風にのりてたゝよはぬ事也気
にのりてとは物の気にのる也雲は山川の気也と云
り雲にのり風を分てこくうをはしる事稲ひかり
の一所にたまらぬかことく早しと云心也

天に升り地に入て求之事あまねし

もとより方士か得たる所の通力なれは雲をわけ
風をはらつて天にのほりちをうかち水をくゝりて

地に入残る所なく□侍るをこれをもとむる事
あまねしと云也
上は碧落をきはめ下は黄泉両所茫々として皆みえす
へきらくは天上をいふ黄泉は地の下を云上は四
王忉利の空のうへ下は金輪のそこまてもたつ
ぬる也両所とは天地也茫々ははるかにひろく
見ゆるてい也しんへんきとくの道士なれは
いたらぬところもなくきはめたつぬれ共きひ
のこんはくはみえさる也
忽にきく海上に仙山有ことを山は虚無
へうはうのあひたにあり
仙山とは仙人の住山也虚無とはその山こくうの間
にあるかことく目にはみえなから手に取かたき体也
へうはうの間とはうき雲のへう〳〵とそひえ
たるやうにみゆる也大なる水の面にあふらをう
かへたるやうなるを云方士すてに天地の間をあ
まねく尋しかともこんはくをみす此まゝむなしく
帰るへき事も残おほし扨いつくをか尋んと思ふ
所にある人申けるは大海の中に仙人の住山有
人のゆきゝ絶たる所也海中なれ共波もさはかし
からす風もしつか也こくうのうちにたな引そひえて
雲霧のことくありとはみえて手にはとりかたし
とをしへ申侍る則かしこにおもむき見れは
こと葉にたかはぬと也
楼殿玲瓏として五雲おこる
楼はろうかく也殿は宮殿也玲瓏は玉にてかさり立
たるてい也五雲は五色の雲也をしへにまかせて
行てみれは山の上には楼殿玉をかさりて殿の上には
五雲たな引侍ると也
絵（第三図）
其中に綽約として仙子多し中に一人あり
玉真と字す
綽約とはいかにもゆう〳〵とつまやかに女房の礼義
とゝのをりたるを云楼殿の中をみればいかにも
うつくしき仙女おほくあるを仙子おほしといふ
その楼殿のうちに玉真門と云門あり太真院と
云額をかけたり此玉真はきひの名也玄宗の女
官にしてめしつかひ給ひし時の名也
雪のはたへ花のかたち参差として是也
此太真院のうちに一人おはします仙女をみれは白
きはたへ雪のことくうるはしき事花のことく
うす紅のかほはせ也入ましへたるかたちを参差と
云也是也とはきひならては又たれにてあるへき
といへる心なり

金闕の西のひさしに玉のとほそを叩く
金闕とはさきに云かことく闕は門の傍也黄金をちり
はめて鳥けた物草花なんと色ゝかさり立たる所を
云也西のかたのひさしにゆきて玉のとほ
そをたゝきてあんないする也
　転小玉をして双成に報せしむ
小玉とはきひのめしつかはるゝ小女房也日本にて
こたちに源氏に書たるたくひ也又双成といふも
女房たちの名也きひの御身ちかくめしつかはるゝ
に小玉その双成にかやうの御使有と申給へと云
ことをさうせいにほうせしむといふ也
　聞道漢家天子の使なりと
聞ならくとは玄宗よりの御使也と聞給ふ也折ふし
きひはひるねをしておはしけるかほのかに漢家天
子の御つかひ也と申を聞て俄にめを覚し給へると也
　九花帳の裏夢魂おとろく
九花の帳とは花の紋をぬひ物にしたる几帳九重はかり
かけまはしたる中にひるねをしておはせしにかくと
申也さて夢魂おとろくとは漢家のみかとよりの
御使と聞て夢の玉しゐ驚きさめたりと云り
　衣を攬とり枕をゝして起きてはいくわいす
ひるねの時引かけて着給へる衣をとりのけ枕を
をしやりておきあかり給ふ也徘徊とはそこもとを
あるきめくりていまた立出さるてい也
　絵（第四図）
　情を含み眸をこらして君王に謝す一たひ別
れて音容ふたつなから眇茫たり
なさけをふくみまなしりをこらすとはきひの
うつくしきまなしりをもつて方士をみらるゝ
うちにかきりなきなさけをふくみてこの間
恋しくなつかしかりしいろ〳〵をかたり給ふなり
君王に謝すとは方士に君よりこれまての御た
つねはかたしけなしと礼義をなすこと也一たひ
わかれてとは馬嵬かつゝみにてむなしくなりし
よりこのかたはをとつれもなくあひたてまつる
事もなしとなり音容は音はをとつれなり容は
拝容とてたいめんする事なりふたつなからへう
はうたりとはをとつれもたいめんもふたつな
からむなしきとなりへうはうはむなしきといふ
こゝろなり
　照陽殿のうちおんあい絶蓬莱の中
　日月長し
せうやう殿は花清宮のみなみにある御殿なり
こゝにてつね〳〵君とあそはれしなりおん

あいたふとはさしもわれを恋のいつくしみお
ほしめしけるも今は絶はてたるとなり今蓬
萊宮のうちにひとりのみあれはむかし春の
日秋の夜もみしかきもくるしみたりしにこゝに
あれは中〳〵月日もなかうしていはんかたなし
となりこれにつきて蓬萊方丈瀛州といふ
この山は仙人のすむところにて山のうちには
不老不死のくすりありといふこの山大海の中
になりこれ日本をさすと也日本にするかの
富士をはりのあつた紀伊のくま野なり秦の
始皇のとき徐福といふたうしかふしのくすり
をもとめにきしうのくま野にきたれりと
なり又玄宗のとき方士楊通幽かきひをた
つねて尾州の熱田にきたれりと也たう
の玄宗のときあまりしつかに天下おさまり
けれはみかと内々この日ほんをうちとらんと
うかゝひ給ふをあつたの明神きひとなり
て世をみたし日本をすくひたすけ給ふと云
事侍る也

頭を回らして人裏の所をくたしのそめは
長安をみす塵霧をみる

しんくわんは人かいの事なり君の御事のあまり
に恋しけれはもしおもかけをもみたてま
つる事もやとおもひ人けん世かいのところ
をくたしみれはちやうあんのみやこはみえもせ
すたゝ塵霧とてちりほこりにのみへたてら
れて侍るとなり

唯旧物をもつて深情をあらはす

方士かさらはかへりて君にこのよしを申す
へしそのしるしをたまはれと申けれはき
ひの旧物とてむかし手なれしものをとり
いたし深情とはふかきなさけをあらはし
てそれをしるしにとてさしいたさるゝ也

鈿合金釵寄もつてさる釵は一股とゝめ
合は一扇釵は黄金をつんさき合は鈿を
わかつたゝ心をして金鈿のかたきに似
せしむ

鈿合金釵はみなかんさしの名なれとも今そ
のかたちをわけてかき侍り鈿合とは戸ひら
なとをふたつあはせてみるやうなるもの也
金釵は股ありてつのなとのあるやうなるも
のなりみなこれかしらのかさりものなり寄
持てさるとはこのやうなるものをは我
これまてもちてきたれりとはうしにかた

らるゝなり此いろ〳〵のかんさしをしるしのため
に給はんとて深情のふかきなさけをあら
はすとなり釵は一股とは股のあるものをはかた
〳〵のまたを引わけてとゝめ合は一扇とは
戸ひらなとのやうにあるものをは又かた〳〵引
わけてとゝめ釵は黄金にてつくりたるも
のなれは二またなるを引わけてかた〳〵を
くり給ふほとに黄金をつんさきといふなり
合は鈿をわかつとはこれもわけてふたつ
とせし事也貴妃と玄宗との御ちきり
のこゝろさしのかたき事は此黄金のことく
なりとしらしめんかためなりといへりこれを
金鈿のかたきにせしむといふ也

絵（第五図）

天上人間会相見る

もはや今生の契はむなしくなれり天上人間の
うち何れの生也共うけ侍らは重ねて一所も生
れあひて夫婦とならんといふ心也

別れに臨みて殷勤に重ねて詞を寄

かんさしを方士に給はりて御いとま申けるか何
とやらんものゝたらはぬやうにみえけれはきひ
方士をしはらくとゝめられて念比に御ことつてを
いたし給ふと也

詞の中に誓ひあり両心のみ知れり

此かんさしは世にあまたある物なれは定て帝まこと、
も覚しめすましとて重ねて方士をよひかへして
御契の深きちかひあり是は玄宗と貴妃と両
心とてふたりのこゝろにのみしりて人いまた知
さる事ありとなり

七月七日長生殿夜半に人なうして私語せし時

かのちかひたりしことの葉はいつの夜の事そといふに
天宝十四年七月七日の夜半はかりの事也此夜は
けんきう織女の銀河をわたりて契深き御事
昔よりこのかた今にかはらぬためしを御うらやましく
おほしめし玄宗皇帝楊貴妃の肩によりかゝり給て
天上人間の事は申に及はす非情草木鳥けた
ものに成とも契はかはらす世々生々ねかはくは夫婦と
ならんとちかことし給ふそのこと葉に

天にあらはねかはくは比翼の鳥と作地にあら
はねかはくは連理の枝とならん

ひよくの鳥はかた羽かひの鳥なりめとり雄ふた
つあひならひてとふ也連理のえたとはふたつ
のえたかひとつにとちつきてはなれぬもの也鳥
とならはひよくの鳥のことくあひはなれす木と

ならはれんりのえたのことくわかれすしてつねに
ひとつ所にありて立のき侍らしとのちかことを
たて給ふ此ことは其ときあたりに人もなし夜半
はかりのことなれはしつまりてきくものもなし
又二たひこと葉にいたさねは世にしる物はあるへ
からす只君とわれとの両心にのみこもりてあり
とかたられたる也

天なかく地久しきは時ありてつくるとも
天地ほとになかく久しきものはなけれともこ
れはまたたとひつきはつる事ありともと
いふなり

此恨は綿々としてたゆる期なからん
めん〳〵とはなかくつゝきたるこゝろ也されは
このかなしみは生々世々を経るともつねにふう
婦とむまれあひてたゆるときあるへからすと
なりこのかんさしを君にみせたてまつりこの
ちかひを御わすれなく世々生々御ちきりの
くちせさるやうに申給へといへるなりこのことを
かたりつたへんためによひかへし侍るとかた
らるゝなり貴妃とけんそうの御ちきりのふかき
事かくのことしさて長恨歌とはいかなる
ゆへに名つけたるそなれはこのうらみはめん〳〵
としてたゆる期あることなからんといへるこの
巻のをはりの一句をもつてなりされはめん
〳〵としてとはめん〳〵はなかき義也このゆへに
なかきうらみのうたとかきて長恨歌とは名つけ
られ侍りしかるに玄宗皇帝は天宝十五年
に安禄山にをそはれて蜀のくにゝおち給ひ
その明るとし二たひ宮こにかへり給ふ爰に玄宗
第三皇子粛宗皇帝位につき給ふあんけい
しよといふもの禄山をころして天下をとらんと
す史思明といふものあんけいしよをころして
又むほんをおこしけるを史朝義といふもの史
思明をころすこれより天下おさまり四かいた
いらかにして粛宗より太宗皇帝に天下を
ゆつらせ給へはいよ〳〵国とみゆたかにして唐の
世なかくおさまりけるまつりことこそありかた
けれ

Ⅵ　参考文献

川口久雄『長恨歌絵巻』（大修館書店、一九八二年）
麻原美子「我が国の「長恨歌」享受―「長恨歌」絵と「長恨歌」物語をめぐって―」（川口久雄『古典の変容と新生』明治書院、一九八四年）

小林健二「『やうきひ物語』と『長恨歌絵巻』―江戸時代前期における絵巻製作の一様相―」（『大谷女子大学国文学会『大谷女子大学国文』16、一九八六年三月）
榊原悟「長恨歌絵のこと」（平山郁夫・小林忠『秘蔵日本美術大観五チェスター・ビーティ・ライブラリー』講談社、一九九三年）
山崎誠「長恨歌抄と長恨歌絵巻…漢籍注釈」（三谷邦明、小峯和明『中世の知と学〈注釈〉を読む』森話社、一九九七年）
榊原悟「長恨歌絵について」（『増補改装　源氏物語の鑑賞と基礎知識　桐壺』一九九八年）
石川透「異本『長恨歌抄』の存在―附解題・翻刻」（『江戸川女子短期大学紀要』16、二〇〇一年三月）
村木桂子「「長恨歌絵」の変容―奈良絵系《長恨歌絵巻》を手がかりに―」（『美学芸術学』25、二〇〇九年）

（担当・石田礼子）

5・後三年之戦圖并文

Ⅰ　書誌

【作品名】　後三年合戦絵巻
【請求記号】　NDC：721.2／G69
【形態・数量】　絵巻・一軸
【外題】　後三年之戦図并文（直書）
【内題】　なし
【奥書・識語】　なし
【表紙・横寸法】　薄茶地・無紋・薄茶、三十一・五糎（後表紙）
【見返し】　薄茶地金散らす・無紋・薄茶
【料紙】　楮紙
【寸法】　縦四十三・一糎×全長一三二八・七糎
【用字】　漢字平仮名混じり
【絵】　淡彩　全五図
【備考】　上中巻欠。補修あり。

Ⅱ　概要

『後三年合戦絵巻』は、永保三年（一〇八三）に始まる奥州清原氏の内乱を源義家が鎮めた、いわゆる後三年合戦を描いた絵巻である。金沢柵に籠もった清原家衡、武衡との戦いは長引き、義家は苦戦を強いられるが、兵糧攻めにより戦況が一変する。義家軍は金沢柵を攻め、城内の男たちは殺され、女たちは生け捕られる。城内は

見るも無惨な様子である。

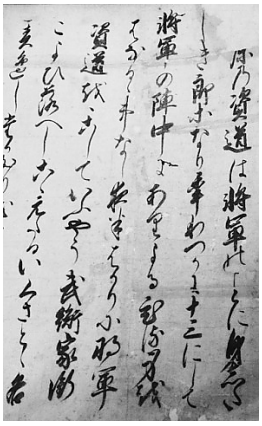
武衡は斬首、義家に詞戦いを挑んだ千任は、舌を抜かれ、木に吊され、足下に武衡の首が置かれる。身をやつし逃げた家衡も、県小次郎次任に射殺され、義家のもとに差し出される。

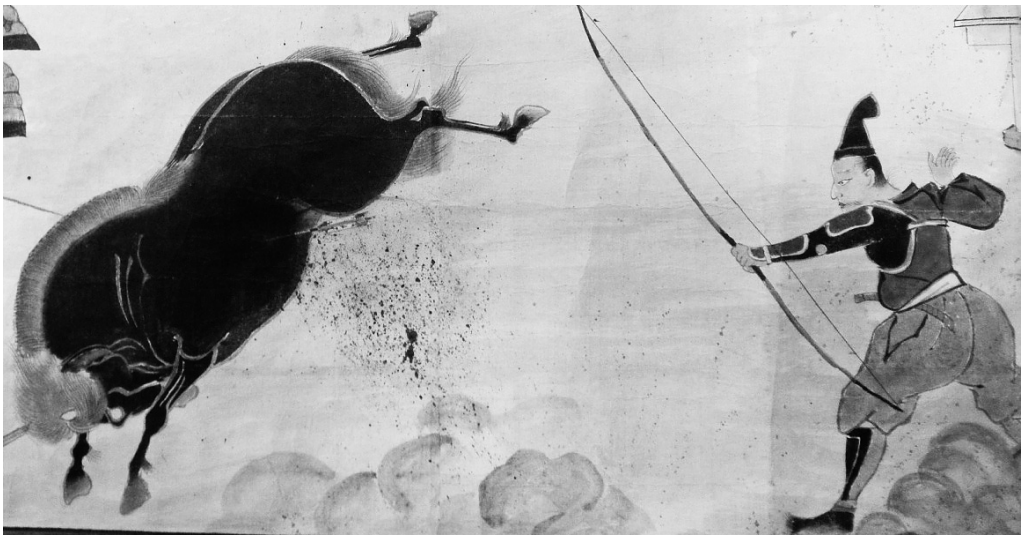
義家は官符を望むが願いは届かず、首を捨て、空しく京へと帰っていった。

Ⅲ　特色

『後三年合戦絵巻』は、『吉記』承安四年（一一七四）三月十七日条により、静賢が後白河院の命を受けて絵巻を制作、進上したことが知られる。現存する最も古い絵巻は東京国立博物館蔵の『後三年合戦絵詞』である（以下、東博本）。東博本は全六巻中後半三巻のみが現存しており、序文には、玄恵が貞和三年（一三四七）に起草したことが述べられている。しかし、序文の偽書性を指摘する考えも多く（笠栄治二〇〇〇、小木曽千代子二〇〇八、野中哲照二〇一四）、その内容は疑問視されている。

立教本は、この東博本系統の模写本である。下巻のみ現存している。立教本からは忠実に祖本を模写しようとする姿勢がうかがわれ、第一場面詞書の用字や文字の配列も一致している。ただし、立教本の詞書は下巻の五場面のうち、後半三場面の詞書は欠落している。絵画は五場面すべて揃っている（ただし、最後の場面が若干欠ける）が、後半三場面の絵画の継ぎ目が不自然であり、この間にもとは詞書があったことが想起される。





『後三年合戦絵巻』の模写本は多いが、楊暁捷は、模写本によって絵巻の表現に違いがあることを指摘しており、模写を通した作品享受がなされてきたことが明らかしている。『後三年合戦絵巻』の作品享受を考える上でも、立教本は重要な作品であると言えよう。

『後三年合戦絵巻』の見どころは、やはり生々しい合戦描写である。詞書を忠実に絵画化した合戦場面は時に目を覆うものがあり、凄惨な合戦の様子を物語っている。立教本もこの合戦描写には力を入れており、特に血飛沫の表現は特筆される。家衡の愛馬花柑子が射られる場面では、実際に目の前で射られているかのような迫力がある。

また、千任が舌を抜かれ、木に吊される場面も戦場の残酷さを物語っており、この絵巻の特色の一つといえる。

Ⅳ　諸本

後三年合戦絵詞（絵巻）

東京国立博物館『後三年合戦絵詞』（三軸、貞和本、『日本絵巻大成』十五）

秋田県立博物館『後三年合戦絵詞』（三軸、文政六年（一八二三）書写）

学習院大学『八幡太郎絵詞』

学習院大学『後三年絵巻物』

京都大学（一軸、嘉永六年（一八五三）、呉景文書写）

国立国会図書館（四軸、前九年絵と合）

桜山文庫『後三年絵巻』

静嘉堂文庫（二軸、巻一欠）

大英博物館蔵（三軸）

大東急文庫『後三年絵詞』

東京国立博物館（四軸、狩野晏川・高島千載書写）

東京国立博物館（六軸）

東北大学『模本後三年軍記』

東北大学狩野文庫『後三年合戦絵詞』（二軸）

東洋文庫岩崎文庫『八幡太郎草紙』（三軸）

穂久邇文庫『後三年合戦絵巻』（一軸）

立教大学『後三年之戦図并文』（一軸）

早稲田大学『後三年合戦絵詞』（三軸）

早稲田大学『後三年合戦之絵』（一軸、下巻のみ存、松岡清助、文政四年（一八二一）書写、早大ＤＢ）

早稲田大学『後三年絵巻』（一軸、上巻のみ存、文政六年（一八二三）書写、小嶋一鳳旧蔵、早大ＤＢ）

奥州後三年記（詞書のみ）

岡山大学池田家文庫『後三年役巻物』（六冊）

九州大学（一冊、寛政十二年（一八〇〇）、松岡辰方書写）

宮内庁書陵部『後三年画巻物序』（序のみ）

宮内庁書陵部『後三年合戦画紀事』（一冊、国文Ｍ）

島原図書館（寛永三年書写、一冊）

神宮文庫『後三年之役絵巻』（三冊）

神宮文庫（一冊）

多和文庫『後三年詞書』（一冊）

東北大学狩野文庫（前九年合戦之事と合）

東北大学狩野文庫（陸奥話記と合）

東洋文庫岩崎文庫（一冊、大田覃書写）

福井久蔵『後三年合戦巻物詞書』（一冊）

早稲田大学『後三年合戦絵巻物詞書』（一冊、藤基時、元禄十四年（一七〇一）書写、早大ＤＢ）

早稲田大学『奥州後三年記』（一冊、寛政二年（一七九〇）書写、上野理旧蔵、早大ＤＢ）

Ⅴ　翻刻

不掲載。

Ⅵ　参考文献

宮次男「後三年合戦絵巻をめぐる二、三の問題　上、下」（『美術研究』251、254、一九六七年三月、十一月）

笠栄治「後三年記の研究上」（『長崎大学教養部紀要』9、一九六八年十二月）

笠栄治「「後三年合戦絵詞」とその伝承」（『語文研究』31、九州大学国語国文学会、一九七一年十月）

庄司浩「貞和本「後三年合戦絵巻」の錯簡」（『国華』986、一九七六年一月）

小林賢章「『貞和本後三年合戦絵詞』の詞章」（『帝塚山短期大学紀要人文・社会科学編』16、一九七九年三月）

近藤好和「小代宗妙伊重置文と静賢本後三年合戦絵巻の伝来」（『國學院雑誌』86―9、一九八五年九月）

鷹巣純「絵巻物から屏風絵へ―後三年合戦絵巻にみる合戦絵の変貌―」（『びぞん』87、一九九三年九月）

笠栄治「『奥州後三年記』の成立」（『軍記文学の始発―初期軍記』軍記文学研究叢書2、二〇〇〇年）

小川恵子「「後三年合戦絵巻」の研究―描かれた源義家と武士観」（『恵泉アカデミア』6、二〇〇一年十二月）

小木曽千代子『玄恵法印研究―事績と伝承―』（新典社、二〇〇八年）

樋口知志『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』（高志書院、二〇一一年）

野中哲照「中世の黎明と〈後三年〉トラウマ」（『軍記と語り物』47、二〇一一年三月）

高岸輝「「後三年合戦絵巻」の絵画をめぐる諸問題」（右同）

楊暁捷「絵巻の模写から何を読み取れるか―『後三年合戦絵詞』模写群を手掛かりに」（『立教大学日本文学』111、二〇一四年一月）

野中哲照「東博本『後三年合戦絵詞』の制作時期―序文の二層性を糸口として」（『鹿児島国際大学国際文化学部論集』15―2、二〇一四年九月）

野中哲照『後三年記の成立』（汲古書院、二〇一四年）

（担当・目黒将史）

6・大須磨三郎物語残欠

Ⅰ　書誌

【作品名】　男衾三郎絵詞

【請求記号】　NDC：721.2／O 79

【形態・数量】　絵巻・一軸

【外題】　大須磨三郎物語（無地・三種の方印有り）

【内題】　大須磨三郎物語残欠

【奥書・識語】　右此大須磨三郎絵巻物は／芸州侯之所蔵にして画は／土佐筆〈法眼永真極有之〉詞書は二條家／為氏卿筆〈畠山牛庵極有之〉也／寛政元年己酉六月写之　板谷慶舟／天保十五甲辰年九月写／村山敬（花押）

【表紙・横寸法】　無紋、黄土色、二十・四糎（原表紙）

【見返し】　無紋、白地

【料紙】　楮紙

【寸法】　縦三十六・〇×全長一三〇六・八糎

【用字】　漢字平仮名混じり

【絵】　淡彩　全五図

【備考】　内題の下に「安芸侯御蔵／画土佐筆〈法眼永真極有之〉／詞為氏二条卿筆〈畠山牛庵極有之〉」とある。

Ⅱ　概要

武蔵の大介の子に吉見二郎と男衾三郎という兄弟がいた。吉見は色好みで、都の上臈を妻とし観音に申し子を授かって慈悲と名付けた。慈悲はあらゆる大名、小名から求婚されるが、上野国の難波権守の息子、難波の太郎と三年後に結婚する約束を結ぶ。一方、男衾は武家に風雅は無用と武芸を奨励し、関東一の醜女を娶り妻に似た三男二女をもうけた。

兄弟が大番役で上京の折、吉見は二村山で盗賊に遭い矢を受ける。吉見は男衾に奮戦した家来の正広と家綱に褒章を与えること、妻と慈悲に所領の一部と家屋敷を譲ることを遺言して死ぬ。家綱は吉見の首を持ち帰る途中、駿河の浄見関で観音が吉見を補陀落山に迎えた夢を見る。そのころ慈悲は不思議な夢をみて母に相談すると、母はそれが吉見に不幸があったことを示すのではないかと不安になる。そこに家綱が吉見の首と形見の品を持ち帰り、母娘は嘆き悲しむ。

大番役の勤めを終えた男衾は、帰郷するや吉見の遺言を守らずに家屋敷を自分たちの物とし、母娘を粗末な家に追い出す。慈悲の婚約者である難波が母娘を引き取ろうと手紙を遣わすと、それを受け取った男衾の妻は、二人は死んだのでわが娘を与えようと返事を出す。それを読んだ難波は二人のために後世を弔う修行の旅に出てしまう。男衾の妻は慈悲を妬んで母娘を使用人とし、名前も変えさせた。しかし新任の武蔵守が慈悲を見初めたので馬の水飼いに格下げし、また改名させた。再び武蔵守を招き、娘をすすめる男衾の妻だったが、武蔵守はその醜さに絶句し、返答もせず帰ったのであった。

（以下、欠）

Ⅲ　特色

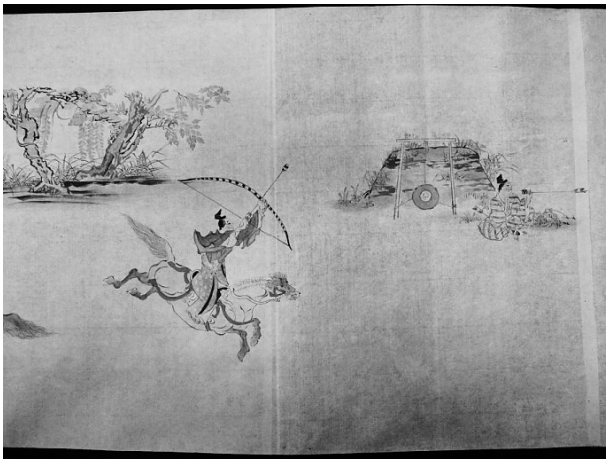
『男衾三郎絵詞』は鎌倉末期に成立したとみられる、浅野家伝来の東京国立博物館本（以下、東博本）を最古本とし、これ以外の系統の伝本を持たない。この東博本は上下二巻から成っていたと思われるが、現在下巻がなく、上巻も完本ではない。構成は全六段で、詞書と絵が交互に展開される。立教本も東博本系統の伝本のひとつである。中でも大きな特徴は場面の欠落、及び奥書である。

場面の欠落部分は、東博本の第四段にあたる、家綱が観音の夢告を見る場面の詞書及びその絵である。また、東博本第二段の冒頭部分の男の絵が二人欠落している（図1）。本絵巻に破損跡や不自然な継ぎがみられないため、模写したもの自体に欠落があった可能性が高い。

立教本の奥書（図2）にある、天保十五年に本絵巻を書写したという村山敬は何者なのか不詳である。だが、板谷慶舟が寛政元年に写した絵巻が書写元になったと読み取れる。板谷慶舟は住吉派の門人で、幕府の御用絵師となった人物である。そのため、御用絵師がこうした絵巻を写していた、写せる環境にあったと考えられる。

国立国会図書館本（以下国会本）にも同じ奥書が認められる（「右此〜為氏御筆〈畠山牛庵極有之〉也」まで一致）。国会本はこの奥書、及び詞書本文の字詰が立教本と一致する。そのため二者は近しい書写関係にあったものと推察される。ただし、立教本にある寛政元年に板谷慶舟が書写した旨の奥書が国会本には無いこと、国会本には観音の夢告部分があること、また登場人物の着物の柄なども若干違うことなどから、両者は直接の書写関係にはないと考えられる。一方、多和文庫本も似た内容の奥書を持つ（「右大須磨三郎絵草子／松平安芸守殿所蔵也／詞書二条為氏卿〈牛庵極〉／絵土佐隆相とても廣之鑑定」）。本文の字詰も立教本・国会本と一致している。ただし多和文庫本にも観音の夢告場面があるため、こちらも立教本と直接の書写関係にはないと思われる。

図1



このように書写元の本を二条為氏筆、土佐画とする奥書、書き込みがある諸本が多いことがわかる。その中でこの絵と詞の鑑定を行ったとされるのは畠山牛庵（桂花）、法眼永真（狩野安信）である。牛庵は書画鑑定家として、永真は古画鑑定家として知られており、活動時期も一致する。彼らの活動した近世初期以降に『男衾三郎絵詞』が活発に書写されていったことが伺われる。立教本もその流れを汲むものとして大いに参考に値すると思われる。

図2

Ⅳ　諸本

絵巻

東京国立博物館『男衾三郎絵巻』（一軸、『日本絵巻大成』十二）

東京国立博物館（一幅、断簡、絵のみ、『美術研究』二二二）

国立国会図書館『男衾三郎絵詞』（一軸、国会ＤＬ）

多和文庫『大須磨三郎繪草子』（一軸、慶應三年（一八六七）書写、国文Ｍ）

宮内庁書陵部『大須磨三郎絵巻』（一軸、『和漢国書分類目録：宮内庁書陵部』）

神宮徴古館（一軸、『徴古館陳列品目録』、焼失か）

立教大学（一軸）

巻子（詞書のみ）

尊経閣文庫『男衾三郎絵詞』（一軸、国文紙焼）

冊子（詞書のみ）

内閣文庫『大須麻の三郎絵巻物』（一冊、『賜蘆拾葉　八十五』、国文Ｍ）

宮内庁書陵部（一冊、『故實雑考』、『和漢国書分類目録：宮内庁書陵部』）

富山市図書館山田孝雄文庫『大須磨三郎繪巻ほか』（一冊、『山田孝雄文庫目録』）

V　翻刻

昔東海道のすゑに武蔵の大介といふ大名あり
其子に吉見二郎をふすまの三郎とてゆゝしき
二人の兵ありけり常に聖賢の教をまもり侍ければ
よの兵よりも花族栄耀世にいみしくそ聞えける
吉見の二郎は色をこのみたる男にてみやつかへしける
ある上臈女房を迎てたくひなくかしつきたてまつり
田舎の習はひきかへていゑゐすまひよりはしめて侍女
房にいたるまてことひわをひき月花に心をすまかし
てあらくらし給ふほとになへてならすうつくしき姫きみ
一人いてき玉へり観音に申たりしかはやかて慈悲と
いはむとてさそなつけ給けるおとなしくなり玉ふまたり
いとゝなまめき給へり八ヶ国の中に聞及てこゝろを
かけぬ大名小名そなかりける其中に上野国難波の
権守か子息難波の太郎をむこになさんとて難波より
吉見へふみをつかはしけれはこれをはきらふへきに
あらすとて陰陽に吉日をみせられけれは占申るやう
今三年と申八月十一日いぬの時よりこのかた吉日見えす
候といふにこの様を返事したりけれは権守いつ
までも約束変改あるましくはとそ悦ひける
（第一図）
をふすまの三郎あにゝは一様かはりたり弓矢とるものゝ
家よく作てはなにかはせん庭草ひくな俄事のあらん時乗
飼にせんするそ馬庭のすゑになまくひたやすな切掛よ
此門外とをらん乞食修行者めらはやうある物そひきめかふら
にてかけたて〳〵おもの射にせよ若者共政すみ武勇の家
にむまれたれは其道をたしなむへし月花にこゝろを
すまして哥をよみ管弦を習ては何のせんかあらん軍の
陣に向て筆をひき笛をふくへきかこの家の中にあらん
ものともは女めらへにいたるまてならふへくはこのみたし
なめ荒馬にたかへ馳引して大矢つよ弓このむへし惣
しては兵のみめよき妻もちたよるは命もろき相そ
八ヶ国の内にすくれたらんみめわるかなとねかひて久目田
の四郎の女を迎て夫妻とそたのまれけるたけは七尺はかり
かみはちゝみあかりてもとゐのきわにわたかまる顔には鼻よりほか
又みゆるものなしへ文字口なるくちつきよりいひいたすことは
ことにはか〳〵しき事はなかりけり男子三人女子二人
いてき給へり
（第二図）
かくて八月下旬の比吉見二郎兄弟大番つとめにとて
京上せられけりみつの道の山賊とも七百人遠江のたか
し山にて寄合つたからとらむとそ侍うけたる大勢は宿て
の煩なるへしとてをふすまの三郎は一日さきたちてのほらる
山賊ともゝ聞おそれてそとをしたてまつる後陣にさか

りて吉見二郎一千余騎にてのほり給ふ吉見のめの
とこうとう太夫正廣といふもの三百余騎先陣の兵士に
うちのほり昔よりこの山は聞ゆる所そとて各物具そ
したりける盗人たかし山の木のもとかやのもとにみち〳〵
たり一のたうけなるせちの木の中によりくろかはおとしの
甲のひつしはかりなるにあかおとしのかふとをきて山鳥の
おのませはきしたる矢ぬりこめの弓にさしくはせて五十はかり
なる男のさしあらはれてすこしも恐たるけしきなくて
いふやうをとにもきかせ給ふらむこれも海道にはたかし
ふたむら北陸道には野をみあらちの山に名をあけたる
盗人の張本尾張国にきこえ候へんまいしやうしと
申ものきみの御宝を給はり候はゝやとてこれに候といひも
はてさせて吉見郎等荒権守家綱といふものつよくひき
とりくはうれほしかり申たからとらせんとてみなつ矢に
へんはいしやうしくひほねゐさせてたふれにけり
ゆふれしやうしにはおとりたり其子二村太郎おやをうた
れてやすからす宝をとりてもなにかはせむとてひきとり
〳〵もなつやに吉見御曹司よろひのひきあわせ射ぬれ
て馬よりさかさまにおち給へはうとう太夫かたにひきかけ
たてまつりて坂のしもへそくたりける荒権守是を見て
二村太郎に打合て生取にしてくひをきりなきなたのさき
にそつらぬきたりほめぬものこそなかりけれ山賊共も五百人
はみなうたれぬ吉見の侍郎等も二百余人はうたれにけり先陣
にのほをふすま三郎のもとへ早馬たてたりけれはこの事
聞ていそきうちかへる吉見二郎悦て遺言をそせられける
三十六所の所知をは三郎殿にたてまつる其中一所と吉見の
家には女房とひめとにたひ給へ正廣家綱には中田下郷
をたふへし各〻これをたしかにきけ姫はしみはなち給ふ
なよこれそこの世におもひをく事とてつゐにはかなく
なり給ひぬ

（第三図）

武蔵の吉見にはかゝる事とも知給はす夜もすからくま
なき月をなかめて女房たちおはしけるに姫君のたまふやう
すきぬる夜の夢に家綱かきたりつるか左の手にたかをすへ
て右の手にかふとをもちてありつるか鷹はそりて西のかたへ
とひゆきかふとはつちにおちつなとのたまへは母うへ聞給て
弓とりはたかとみゆるは魂にてあんなりかふとみゆるは頸にて
あるなるものを何事のあるへきやらむとむねうちさはき
給ふほとに暁かたに家綱きたりて涙をなかしつゝこれ
御覧候へ御館の御ありさまよとてくひとかたみとをゐんに
さしをきて庭にたうふれぬふす女房おさなき人〻なみたに
くれてかなしみ給ふ事かきりなし家綱ありつるありさま
浄見か関の事を申にそすこしなくさみ給ひける

（第四図）

をふすまの三郎京よりくたりつゝいつしかあにの
遺言をたかふるのみこそむさんなれ吉見のたちには
我妻子をかしつきすゑて慈悲母ともにこの家をは
いて給へ所知も家も院より給はりたる物なれはおや
と夫にわかれたる人はかゝる祝の所には居さんなる
そとて門外なるしつのふせやにをしこめたてまつ
るのみそなさけなかりける一人の女房をたにも
つけさりけることそかなしけれ難波の権守伝聞て
ふみをつかはすやう故吉見殿の御教養これへいらせ給
ひて訪まいらせ給へ女房姫君の御迎にまいるへし
とかきてつかはすに使の案内をしらてうるはしく吉
見の館へもてゆきたりけれはをふすまの女房これを
みて三郎殿これみ給へみなしこの慈悲をこはんより
は我女をこへかしわらはかはからひにして難波太郎を聟
にとらむといひてふみかき難波へつかはす慈悲は母
もろともにおもひにしつみてはかなくなりぬいつれもおな
し女房なれはこれのひめをまいらせむとかきたるに
難波権守これを見ておもひのほかの事かなとて
えむよりしもへそなけすつるされはしに給ひにける
よとて難波太郎二人の女房のためにとて堂をつ
くりそとはをたてゝあまりこゝろのやるかたなさにふち
をいかたにかけ山〃寺〃修行して姫君の後世をそ

訪けるをふすまの三郎は家綱正廣か所領中田下郷
めしあけてあもひあたる事そなかりける女房又のたまひ
けるは聞玉へよ難波の太郎こそわ殿のむこにならし
とて世をすて国〃をめくりて乞食はすなれもし慈
悲はしやぬすみとらんすらむ内によひて目をはなさす
はしたものにつかはゝやとてわつかなるこそてひとつ
きせつゝかみをせなか中よりきりすてゝからかみといふ
名をつけてそつかはれける吉見二郎草のかけにても
いかにほいなくおもはるらんかゝるほとに武蔵国の先司は
かはりて当国司の代となる京まてきこえたる吉見二郎
か家みむとて吉見の館へそ入給ふ三郎さま〳〵もて
なしたてまつるにはしたものゝなかにこのからかみ侍り
けるを国司わりなく心つきにおもひなり給ぬしのふ
おもひいろにいてゝをふすまの三郎にわりなく所望
ありけるを女房ねたむこゝろありけれはさらにゆるし
たてまつらす武蔵守かへり給りて後女房三郎にのたまふ
かたかみめあれていたてをきたらはなをもよしなき
事いてきなんすさまをかへて水しにつかはせ給へとてひ
とつの小袖をもぬなとりて信濃のてうたい馬のあさ
きぬといふものゝあさましけなるをきせてたてまつりて
みとりのかんさしをもとゐきはよりきりすてゝからかみと
いふ名をよにこゝろうしとおもひしにあまさへねのひと

よへてとをさふらひのむまやの水をそくませたてまつる
つ、井の水を二十五引疋の馬によるひるくめはかへ
てのやうなる手もつるへのなはにきれそんしてあけの
いとをひきたるやうなりくむ水もすはういろにそ見へたり
ける母うへかなしみなくさめてよるの水をはくみ給へとも
いまたならはぬ事なれはたとへやるへきかたもなしたけなる
かみをかきたしてきぬの袖をちかへかたにかけ給りてくみ
給ふ水におつるなみたもあらそひていと、たもとそ
しほれける十六七まてみやこにかしつかれ給へりし時は
ゆめにもか、るありさまあるへしとこそ見へさりしかかくて
をふすまの女房三郎に申合て国司のかたへ案内
まうさせける心は御目にか、りし女みせたてまつりて
仰にしたこふへしと申たりけれはいそき又いり給へり
をふすまのむすめ十九になるをなのめならすとりつら
ひていらしたてまつる母にに給ひたるかたちなれは
かほはよこさまにてしかもなかひろなりめにはかなまりを
えりすへたるやうにてまゆはぬきつくろひたる炎（ほのを）なを
かきまゆなるまふしたかくてさしかたなりひたひのかみ
ち、みあかりてしなもなしひとへに鬼にそにたりける
これもおやのめにはよくやみゆらん国司こ、ろもとなく
おもへるに一日のすかたにはひきかへて心うし只一目
そ見玉へるそのゝちひとことは物をたにのたまはすうち
うつふしてそおはしける色〻しな〳〵のひきいてもの
たてまつりてこの女房をはいかにも御心にまかせ
たてまつるへしといひけれともとかくの返事もなくて
いて給へりいと、ねのひそしのはれ給ふ宿所にかへり
ておもひあまりに
ふたはよりみとりかはらておひたらむ
ねのひのまつのすゑそゆかしき
をとにきくなりかねの井のそこまても
われわなしむるひとをたつねむ
（第五図）

Ⅵ　参考文献

梅津次郎「男衾三郎絵詞」（『美術研究』38、一九三五年二月）
山田孝雄「男衾三郎絵巻」（山田孝雄『典籍雑攷』寶文館、一九五六年）
田村悦子「図版解説　男衾三郎絵詞断簡」（『美術研究』222、一九六二年五月）
石黒吉次郎「武家物語の生成」（『専修文学論集』39、一九八七年三月）
小嶋菜温子「男衾三郎絵詞」（三谷栄一編『体系物語文学史』4、一九八九年）
千野香織「嘲笑する絵画―「男衾三郎絵巻」にみるジェンダーと

クラス―」（伊東聖子・阿部泰郎・河野信子編『おんなとおとこの誕生　古代から中世へ』藤原書店、一九九六年）
黒田日出男「描かれた風俗―『男衾三郎絵詞』を中心に―」（『風俗史学』29、二〇〇五年一月）
岡部恵理子「「男衾三郎絵巻」再考―望ましき当主像をめぐって―」（『哲学会誌』36、二〇一二年五月）

（担当・大澤奈穂）

7・ふえのまき

Ⅰ　書誌

【作品名】　笛の巻絵巻
【請求記号】　NDC：768.49／F 53
【形態・数量】　絵巻・一軸
【外題】　笛野巻（緑色紋）
【内題】　ふえの巻
【奥書・識語】　なし
【表紙・横寸法】　紺地、金糸雲、松紋、十五・七糎（後表紙）
【見返し】　無地、銀箔
【料紙】　楮紙
【寸法】　縦十七・四×全長五一九・一糎
【用字】　漢字平仮名混じり
【絵】　濃彩　全五図
【備考】　見返しに貼紙「祇薗梶女筆〈牛若笛巻〉」「むかし京都（とう）ぎおんニ／かじ女といふうたよみ有／其女の書（しょ）なり」

Ⅱ　概要

牛若は、鞍馬寺の東光坊にて学問を始めていたが、母の常盤御前は「牛若のもてあそびとするのには楽器が一番よいだろう」と思い、淀の津の弥陀次郎から笛を一管買い取り、牛若に与える。牛若は笛を極めるが、「この笛に備わっている徳について知っていなければ、

何の意味もない」と思い、弥陀次郎を呼び出して笛の由来を語らせる。

弘法大師は入唐して、青龍寺の恵果和尚を師として真言の秘密を極めた後、天竺霊鷲山の大聖文殊を拝もうと志す。大沢の野、般若台、玉泉寺、流沙河を通り、葱嶺山に至る。葱嶺山の麓には石橋という一本の橋がかかっているが、橋の上は狭いために大変渡りにくい。弘法大師も身震いするが、法力を使って渡りきる。葱嶺山では文殊の化身である童子が現れ、弘法大師と問答、法力比べを行うが、どちらも弘法大師が勝利する。すると童子は文殊の姿を現し、その場はそのまま霊山浄土となり、文殊は弘法大師に向かって説法を行う。

葱嶺山から日本へ帰る途中、葱嶺山の麓の滝の岸にあった竹を切って流す。※唐まで戻り、明州から日本へ戻る船に乗る際、五鈷、独鈷、三鈷を虚空に投げると、紫雲がこれらを捲き、五鈷は越後の国上の寺、独鈷は東寺の塔、三鈷は高野山の峰にとどまった。弘法大師の乗った船が筑前の箱崎を目前にしたところで、波風が立ち、船が吹き戻されたので、龍神に順風を吹かせるように祈請すると、童子が現れ「名残を惜しんだ唐や高麗の神仏が波風を起こして船を吹き戻すのであり、龍神のせいではない」と告げて消えてしまった。（※からここまでの記述、立教本にはなし）。そこで「日本についたら、金剛峰寺に高麗、唐土の神仏を勧請する」と祈請したところ、追い風が吹き、日本に帰国できた。

弘法大師が都に上る途中、両親の墓参りのために故郷の讃岐国屏風ヶ浦に立ち寄ったところ、浜辺にて天竺流沙河で流した竹を拾う。弘法はこれを三管の笛に彫り、大水龍、小水龍、青葉の笛とした。この三管の笛は内裏に大切に籠められたが、狭衣の中将が吉野山で吹くと、天人がこれを聞き、五衰の苦を逃れて菩薩となることができた。その後、中将は淀の津に住まい、弥陀次郎の祖父である弥陀太郎に笛を譲った。笛は弥陀次郎まで三代の間相伝され、吹くことはなかったが、持っているだけで災難は来ることはなく、これは仏神の加護が得られたためであると語る。

この笛の威徳の物語を、牛若は三度語らせて、草紙に書き留めた。

Ⅲ　特色

『笛の巻』は幸若舞曲に収められている作品のひとつであり、牛若が常盤御前に連れられて鞍馬にのぼるまでを描いた『常盤問答』に続く作品である。

牛若が常盤御前に買い与えられた笛の由来を尋ねるために、元の持ち主だった淀の津の弥陀次郎を呼び、語らせるという形で物語は進む。牛若が笛を吹く冒頭部分は物語の枠にすぎず、笛の由来譚としては、弥陀次郎が語る弘法大師伝が中心となる。笛の威徳の物語を三度語らせ書き留めるという話末は、お伽草子の祝言物にも通じる特徴を有していると言える。

本話の弘法大師伝の出典については、『平家物語』『高野大師行状図画』や謡曲〈石橋〉との関連がすでに指摘されており、様々な弘

法大師伝を集めているようである。

立教本は天地十七糎程の小絵である。挿絵の彩色は濃彩が施され、霞や雲、第三図と第五図に描かれる童子の衣裳には、金銀等の極彩色が使用された豪華なものとなっており、典型的な奈良絵本の特徴を有している。表紙の挿絵には、金糸による雲や松が描かれ、見返しには銀箔が散らしてあり、題簽にも緑色の紋様が描かれていることからも、かなり豪華な装丁であると言える。

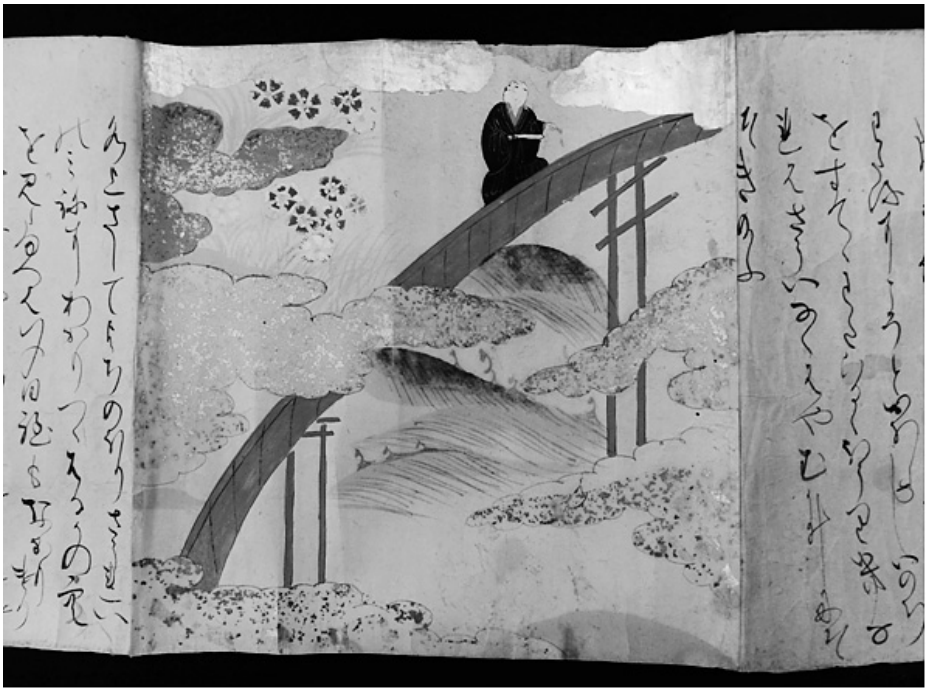
立教本の構成について、脱文箇所以外の本文の内容、挿絵の数や構成が、寛永整版の刊本と一致する。挿絵の挿入箇所も一致するが、刊本に存在する第四図と第五図の間の本文が立教本では欠落しているため、この二図は連続して配置されている。奈良絵本的特徴を有する立教本と、刊本の前後関係に注意する必要があろう。各紙の料紙の長さは以下の通り。本文の書かれた料紙の長さは二十七糎前後から五十糎までと幅があるが、絵が描かれた料紙は十六糎から十九糎であり、ほぼ同じ大きさである。

第一紙（本文）：四十一・〇糎
第二紙（絵1）：十九・四糎
第三紙（本文）：五十・二糎
第四紙（本文）：二十七・六糎
第五紙（絵2）：十六・五糎
第六紙（本文）：五十・七糎
第七紙（本文）：五十・四糎
第八紙（本文）：二十・四糎
第九紙（絵3）：十九・六糎
第十紙（本文）：二十七・八糎
第十一紙（本文）：四十五・五糎
第十二紙（絵4）：十九・四糎
第十三紙（絵5）：十九・二糎
第十四紙（本文）：四十八・〇糎
第十五紙（本文）：四十一・八糎
第十六紙（白紙）：二十一・六糎

なお見返しに、本書は祇園梶女の書であるとする貼紙が二枚ある。梶女は京都八坂神社近くに存在した茶店の娘で、歌集『梶の葉』を執筆したとされているが、梶女による自筆本は管見の限り確認できておらず、立教本との関連や貼紙の真偽も不明である。ただ、立教本の筆跡が女性によるものであると認識されている点は、今後の検討の重要な視点になるだろう。

第一図

第二図



第三図

第三図部分拡大図（童子）

第四図

第五図

第五図部分拡大図（童子）

天理図書館『笛巻』（『舞の本四五番』の内、文禄二年（一五九四）写、『天理図書館善本叢書和書之部　舞の本　文禄本』）
天理図書館（断簡一葉、『舞の本　大頭本』）
東北大学狩野文庫『ふえのまき』（一冊（『未来記』『つるきさんたん』との合写）

刊本

東京大学霞亭文庫『笛のまき』（一冊）
国会図書館『笛の巻』（一冊、寛永年間（一六二四～一六四五））
岡山大学池田家文庫『ふえの巻』（一冊、寛文元年（一六六一）刊）
東洋文庫『笛の巻』（一冊（叢書の内）慶長十二年（一六〇七）、国文研紙焼き写真）

Ⅳ　諸本

絵巻

チェスター・ビーティー・ライブラリィ『笛の巻』（一軸、『未来記』『剣さんたん』と合写）

写本

防府毛利報公会博物館『笛巻』（一冊、元和四年（一六一八）写）
内閣文庫『牛若笛の巻物語』（一冊、『古典文庫舞の本』）

Ⅴ　翻刻

ふえのまき

さるあいたうしわか殿くらまの
てらとうくわうはうにて
かくもんきはめたまふ
筆をとつてのひつほうに
きよりんこさう水露のてん
くしいうしの筆のあとふん
しよの数をのこさすならひそ

きはめたまひけるときはこゝろ
におほしめすそれちこのもて
あそひになに〳〵と申共くわけん
に過たる事はなしそのなかに
とつてもふえはいちの名物なれ
はよからんふゑをもとめくらまへ
のほせうしわかにとらせはやと
覚しめしみやこまちかきよ
とのつのみた次良かもとより
もふえを一くわんかひ取てくらま
えのほせ玉ふうしわかなのめに
おほしめし二月中はの比よりも
ふきはしめさせたまひつゝその
としの神無月すへはのころに成
けれは百二十てうしのかくをはふき
こそきはめけれうし若心におほ
しめすそれ人の持たからのいとく
をきかねは何ならす此ふえゆらい
をきかはやとおほしめしよとの
つのみたち良をそしめされける
〈絵1〉
みたち良うけ玉くらまてらとうくわう
ほうに参うしわか殿ゝまします
底上にかしこまる牛若殿は御覧し
てよとのつのみた次良とはなんぢ
か事かさん候と申此ふえはかん
ちくかもとちくかきかまほしやと仰
けりみたち良うけ玉てさん候此ふえ
と申はさぬきのくにひやうふのうら
にてほうき五年にうまれ玉ふ
こうはう大しにんとうしせいりうし
にましますけいくわくわしやうをし
とたのみしんこんのひみつをきは
めたまひれにつとうついてにてん
ちくりやうしゆせんにおはします大
ひしりもんしゆをおかまはやと
覚しめしし〳〵とあるゑんしま
をわけこしたまひけるほとにかう
しうといふ国に十の道わかてり
其中にとつてもかうなんといへ
る道こそせきけんの南なれ此道
にさしかゝりたいたくの野辺ゆ
き過てはんにやたいをそおかま
れけるかのはんにやだいと申は

なんがくたいしひさしくをこ
ない玉ふ御てら成今日本にうま
れてはまやとのわうししやうとく
たゐし共申也しゆしやうさいと
のしひふかしなむかくたいしとふし
おかみ又五ん りをゆき過てき
よくせんしとて御てら有かの
てらと申はなんかく一のでし
ちき上人の御てら成かの天く
にかよひ御のりをとかせたまふ
なりあなたへも五千さとこなたへ
も五千里一まんさとの道なる
を夜日七日に行かよひ御のり
をときたまふ成かるかゆへに御しやく
にもけいやうわうふくとしやう
はんりとときたまふかゝるえん
たうをわけこしたまひける
ほとにたうてんちくのさかひなる
りうさ河につきたまふかの川の
ひろき事は三百二十よ町なり
なみはんてんにさかのほりいさこ
をあらひなかせりりうさの河

と書てはいさこなかるゝ河とよむ
さうれい山のふもとに一のはしわた
るいしはしとこれをいふしやつ（欠）
うとかきてはいしのはしと
よむいわれにはりをつらねて
はしけたはしらにはめなうをつ
くりつけはしのうへせはくして
しやくにもたらすとをくして
それる事はにじのなせるかこと
くなりみるにきもきえひさふるい
あしすさましく身のけたちわたる
へきやうさらになしさりともこれ
をわたらすは白雲まんりをへた
たりて何としてかは参へき
わたるにこそとおほしめしいのち
をすてゝわたらるゝほうりきな
れはさういなくはやむかゐにそ
つき玉ふ

〈絵2〉

水上さしてよちのほりさうれい
のみねにあかりつゝはるかの空
を見たまへは夕日程もなかりけり

てにとるはかりちかくしてかすみ
はたにのそこにありらいでん雲を
ひゝかし風せううんをはらふきんは
くはことにちちんたりこゝにはつ
せんとうしゆきあひたまひいつく
よりいつかたへとをる物そととひ
たまひこうほう聞召れてこれは
しちいきのこうはうなるかてんぢく
りやうしゆせんにおはします大ひ
しりもんしゆをおかまんためこ
れまて参て候とうしきこしめ
しこれよりりやうせんしやうと
へははくうんまんりをへたゝ
りて何としてかは参るへき
もとれとの御ちやう也こうはう
きこしめさのてまんさとのみち
も一あしの下よりつゝく事
なれはこゝろ長くあゆまはなと
か参らて候へきとうしきこし
めしおろかなりなんちはけしに
たとへたるそくさんこくの小そうか
とうどをこゆるたにもありか

たき事なるにましててんちく
あゆみすきりうさむしやうとへ参ら
む事なか〳〵思ひもよらぬ事也
たゝもとれとの御ちやうなりこう
はうきこしめさのて国は小くにな
れともしちいきと名つけて日
をかたとれる国成天ちく其名
たかきと申せ共月うぢくにとな
つけて月をかたとる国也たう
とひろしと申せ共しんたんこくと
と名付けてほしをかたとるくに
なり国は大小にはよるへからすたゝ
ちゑこそほんにてあるへけれどう
じきこしめしおもしろしこう
はうちゑくらへには参らんさて
こうはいは日本よりこれまて
たつねきたれるはぐちのそう
にあらすやもんしゆもこゝろの
うちにありりやうじゆせんも
心に有むねのほとりにもちなから
ゑん嶋をたつぬるはぐちのそう
にあらすやかうはうきこしめし

おもしろしあのどうじ法には
ちりのふたつあり心の内のもん
しゆはそうのもんしゆこれなり
りやうしゆせんのもんしゆはへ
ちのもんしゆこれ也へちときらへ
はそうもなしそうときらへは
へつもなししりそうへつの
不二なるをちしやとは申候そ
どうじきこしめしことはの
しよけんむやくなりめいよを
けんしてきとくをみせよもちゐん
きとくはなにをあらはさむかみも
なく筆もなくすみもなくして
たゝ今もしをひとつ書てたへ
かうはうきこしめしかかむする
事はやすけれとどうじの
きとくをまつみせよいて〳〵さら
はかゝむとてはしる雲にむかつ
てあひらうんけんとゆひをふる
あらしにくもはやけれ共ぼんじ
はちんともみたれすあさ〳〵と
こそ見えにけれこうはう

御覧してしゆせうなりあのとう
しさらはかくとのたまひなかる
る水のおもてにりうといへる
文字をかくさしもに水は
はやけれ共もんじはちつと
もみたれすおひをむすへること
くにあさ〳〵とこそ見えにけ
れとうじ御覧してあの字に
てんをうつてこそりうとはよ
まれ候へこうほう聞召うたん
す事は安けれともりうと
ならんかいぶせさに扨こそてんは
りやくしたれなにほとの事の
有へきそたゝうちたまへこうはう
さらはうつとのたまひててんを
うちたまひいまたそのてもひか
ぬまにいかつちなつて雨くたり
大水出きたり水はなをみたま
えはもゝいろの大りやうかしら高
くさしあけ水におをたゝひて
大木小木のえたくたきいわを
なかしてくたすをと地しんのゆ

るくかことしすはや見よとうし
にけたまへとありしかはとうし
ちつともさはかすこくうにあ
かり雲をふんてさらぬていに御
たちある

〈絵3〉

いたはしやこうはうにけたまへとあり
しかはこうはうちつ共さはかす
はんしやくのゐんをむすんて
河のおもてになけたまふ二十よ
てうにそひへたる大ばんしやく
となりしかは其うへにとひあかり
とつこをにきりこうはうしはらく
ねんしゆしたまへりとうし
御覧じしゆせうなりとよこう
ほうわれを誰とかおもふらん
りやうしゆせんのもんしゆ也いて
本たいをあらはさんうてんわう
はなきかし、いてこよとあり
しかはをつとこたへてほとも
なく金のはうくわんをいた、きせ
きいにけんをはきしにはらつ
てんのくらををき御まへにひつた
つるとうしすなはちもんしゆに也
五色の光りをはなちつ、しし
にめさのてかさあれはところは
やかてじやうど、成りやうさん
じやうとこれなり
そも〳〵しゆと申はじやうるり
しやうとのそのなかに八大ほさつ
のそう一なりきやうしやをむか
へとりてはこくらくにをくら
る、有時はりやうさんじやうと
にてほう花のすいさうをとき
又有ときはしやくめつ道はにし
て三世しよほうのしつきをたて
し、の上にしてはまたしやくそんの
左のわきにたち玉ふか、るあり
かたき大ひしりもんしゆをまのあ
たりにおかみたまふかうはう大し
の御こ(ママ)ろさこそうれしくおほ
すらんもんしゆかさねて仰
けるはまつせの衆生のまよ
ひにはうさうむさうこれおほ

し有相といへる心は万の
ものをありと見るこれは
うそうのまよひにてちこくへ
おつるはしめなり又むさうとい
へる心はよろつのものをなしと
見るこれむさうのまよひにて
地こくへおつるはしめ也一ねん
ふしやうなるをこそもんしゆの
ちゑと申てそつこんのほとけ
に成も（△補入注意）の そ此みちをまほりはや
下かうせよとの御ちやうなり
こうはうよく〳〵ちやうもん有
てあらしゆせうや候さらは御いと
ま申とて其よりももとり
たまふさうれいの山のふもとに
ひとつのりうをつるかのたき
のさうかんに三本の竹有
こうはうけんをぬきもつて
〈絵4〉
〈絵5〉
かきけすやうにうせにけり
こうはうきこしめし其きにて
御さあらは先日本へつけてたへ
我日本につくならはたうとの
てらをまなひきんかうふしとがく
をうつてかうらいたうとの神仏を
くわんせう申あれにて御めにかゝり
なんときせい申させたまひけれは
かち取共かこれを見てあそこな
ほうしは何をいふてさゝやくそ
しなふす物かめに見えてひとり
事をするやとてわらふものも
有にけり誰も命はをしゐと
てなけく物も有にけりたいしの
きせいまことにてをひてそふき
にけるとかや過にしくわんむてんおふ
の御時三十七にてにつとうまし〳〵
て扨また四十七にてさかのていの
御時に御きちやうとこそきこえけ
れされ共人はなとやらんしらさり
けるそふしきなるつくしのはか
たにあかりふちをひ取てかた
にかけみやこへ上りたまひしか
きうりをしのき有によりさぬ

きの国ひやうふのうらにたちより
父母のみはかをふしおかみある
いそへをとをらるゝよりたけひ
とつ有あやしく覚しめしとり
あけ御覧しありけれは天ちく
りうさ川にてきりなかしたる
竹をみつにきさみたまひて
おひのあしにゆひつけみやこへ
のほりたまひしか三ふしの竹か
よに入は五音のこゑを出す五音
のこゑと申はきうしやうかくちう
これなり三くわんのふえにえり
たまふおほすいれうこすいれうあ
をはのふえと申すあをはの
ふえと申はたけはしほにかれ
たれとあをははふしに一つあり
御さるとくに名つけたりこすいれ
うと申はしゆしやくゐんのをに
か取よな〳〵これをふきしかは天人
これをとらんとてはころもをもつ
てなてゝは天にあかりなてゝはてん(衍字か)
に　あかりかるかゆへに名つけてひと
えかくしとこれをいふ此三くわん
のふえをは天下のてうほうなり
とて大りにこめたまひしをさ
ころもの中将吉野山にて花見
のけうの有し時此ふえを申う
けふきてあそはせたまひし
にまんじゆらくをふきしかは
天人これをちやうもんし五すい
のくをのかれてほさつと成て
あそふ其後に中将よとのつの
すまひするちうしやうとしをいて後
みたち良かおほちのみた太良かこれ
をもつわれ〳〵まて三代成ふく事
はなけれ共此ふえをもちぬれは
さいなんさらにきたらすほとけ神の
かこにあつかるてうほうして候を
いかなる人か申けんかみさままても
聞召めしをかせたまへはちから
をよひ候はす若君とこそ申
けれうしわかきこしめしおも
しろしみたち良いわゐに三とかたれ
とてをし返しかたらせなをもあ

かすやおほしけんさうしにとゝめ玉い
てふえのまきと申てくらまてらに
ありとかや其後にみた次良なん
りう五つ給はりいゑちへとてそかへりける

Ⅵ　参考文献

吾郷寅之進・福田晃・岩瀬博・真鍋昌弘『幸若舞曲研究』（三弥井書店、一九七九年）
チェスター・ビーティー・ライブラリィ、国文学研究資料館編『チェスター・ビーティー・ライブラリィ　絵巻絵本解題目録』（勉誠出版、二〇〇二年）
山本智教・真鍋俊照監修、執筆『地蔵院蔵　高野大師行状図画』（大法輪閣、一九九〇年）

（担当・大石将也）

8・桃太郎絵巻

Ⅰ　書誌

【作品名】　桃太郎絵巻
【請求記号】　NDC：721／MO28
【形態・数量】　絵巻・一軸
【外題】　なし
【内題】　なし
【奥書・識語】　右英一蝶図／寛政乙卯秋／龍雲斎写
【表紙・横寸法】　紺地、無紋、二十三・二糎（後表紙）
【見返し】　素地
【料紙】　楮紙
【寸法】　縦二十四・八×全長一二八〇・九糎
【用字】　絵のみ
【絵】　淡彩　全十六図
【備考】　詞書なし。ただし桃太郎の笠の色名のみ書き入れあり。

Ⅱ　概要

子どものいない老夫婦。老爺は山へ柴刈りに、老婆は川へ洗濯に向かう。老婆は川で桃を拾い、それを食すと若返った。（ここまで立教本になし）老婆が持ち帰った桃を食べると老爺も若返り、二人の間に子どもが生まれる。成長した桃太郎は怪力ぶりを発揮し、鬼退治に向かうことになる。太刀と黍団子を授かった桃太郎は、犬・

猿・雉を連れて鬼ヶ島を攻め、打出の小槌・隠れ蓑・隠れ笠を得て凱旋する。

Ⅲ　特色

確認できる桃太郎作品としては元禄前に赤本『桃太郎話』、享保頃に赤本『桃太郎昔話』があり、現存する『桃太郎絵巻』伝本から一世紀弱ほど遡る。滑川道夫は『桃太郎像の変容』において、絵巻物の発生が草双紙よりも早いことから、赤本に先行する絵巻物の存在を指摘しているが、現存の絵巻、あるいはその祖本と目される散逸絵巻も前掲の赤本よりも先行するものではなく、小峯和明・太田昌子の指摘するように、赤本や歌舞伎・浄瑠璃などの芸能の影響を受けて成立したものが『桃太郎絵巻』諸作品と考えられる。さらに太田は版本と絵巻、そして芸能をつなぐ存在として英一蝶があったと推測している。

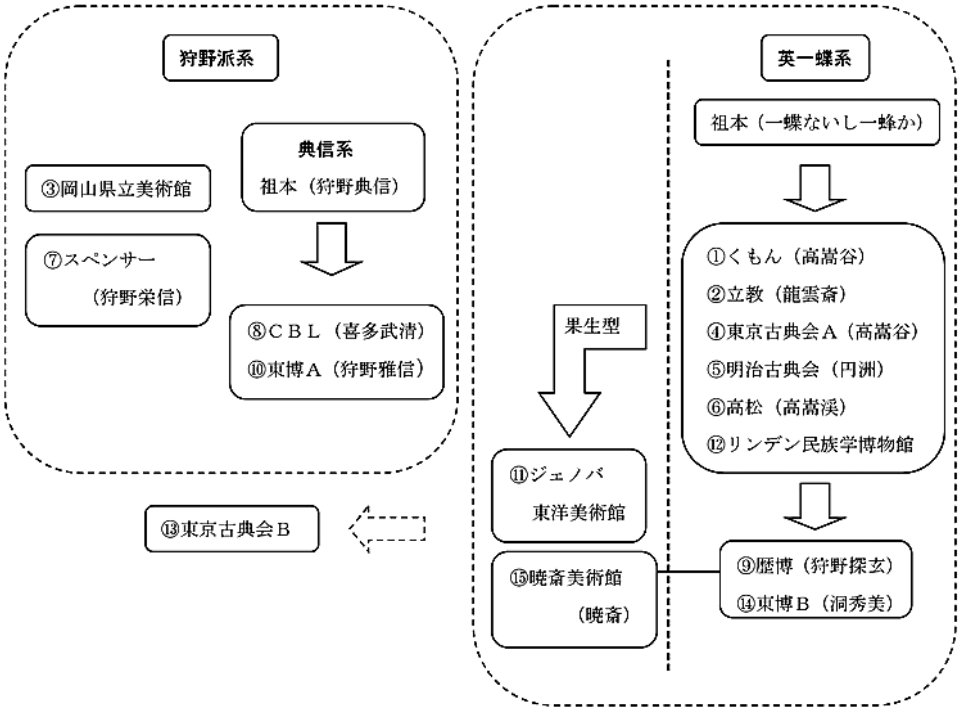
後掲の諸本リストのうち、立教本を含む①②④⑤⑥⑨⑪⑫⑭⑮は同じ系統に属する、いわば「英一蝶系」というべき作品群である。⑥については未見のため断定できないが、①④を描いた絵師である高嵩谷の子である高嵩渓の作であるから、おそらくは同系であろう。これらの作品はほぼ同内容で、親子か兄弟にあたる関係にあると言える。一蝶系の桃太郎の特徴は、胴丸風の鎧の上に黒の旅装束と袖無しを着た「武者修行の若者風（太田）」の姿で、太田によって赤本や役者絵、浄瑠璃のイメージなどとの関わりが指摘されている。さらに鬼退治が進むにつれて目つきや姿が「見え」を切るかのように表されている。また、怪力発揮の場面での見物人のように庶民が描かれているのも特徴である。一蝶系の伝本は『桃太郎絵巻』の中でも数が多く、⑭⑮のように明治期の絵巻にもその影響が見える。ただし⑭東博Ｂ本は桃太郎の装束が水玉模様となるなど（この特徴は⑨歴博本にも見られる）変化が見え、⑮暁斎美術館本は鬼ヶ島に向かう場面や合戦場面に⑭東博Ｂ本とのつながりが見えるが、回春型ではなく果生型である点や、犬猿雉の仲間になる順番など他諸本と異なる。なお果生型の桃太郎は⑪ジェノバ東洋美術館本にも見える。

「英一蝶系」に次いで古いと見られる系統が⑧⑩「狩野典信系」で、公達風の桃太郎が描かれる。⑩の款記の写しに「白玉法眼典信」とあり、狩野典信の作を祖本に持つとすれば、宝暦十三年～安永九年（一七六三～八〇）までの成立であり、「英一蝶系」よりもやや遅いものの、ほぼ同時代に作られたものと考えられる。太田によれば、当世風俗を描いた「一蝶系」と比べて、「典信系」桃太郎は「古風」な風俗表現を特徴とし、また鬼との合戦が、海上合戦である点が他諸本と異なる。

さらに「典信系」と同様に古風な風俗表現を特徴としつつ、鎧に陣羽織を羽織る桃太郎が描かれるのが⑦スペンサー本である。同じく狩野派とされる③岡山県立美術館本は十八世紀の成立とされるが、鉢巻きや陣羽織などは⑦スペンサー本と共通するものの、「典信系」「栄信系」とも異なる図像である。

参考資料

諸本関連図



⑬『新桃太郎絵巻』は果生型で、旅立ちの場面で既に犬を従えている点で他諸本と一線を画すが、合戦場面での逆立ちをする猿の姿は、「英一蝶系」と重なっている。

これらをふまえて、おおよその諸本の関係を示したのが上段の「諸本関連図」である。

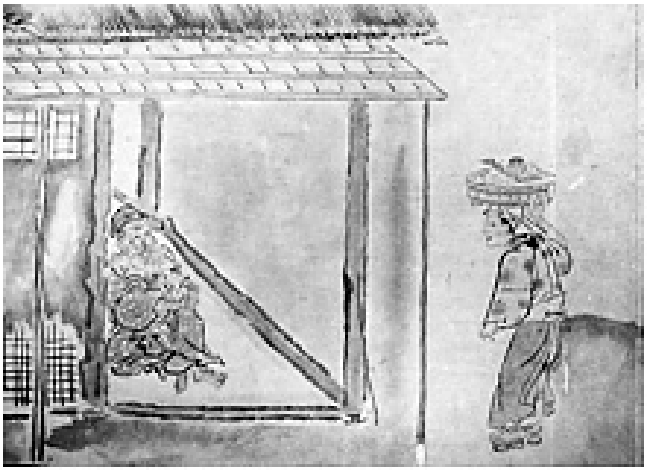


図１　第一図（桃を持ち帰る若返った嫗）

翻って立教本の表現に注目すると、第一図（図1）には洗濯物を入れた桶の上に桃を載せた若い女性と翁が描かれており、嫗が若返る場面がこれより以前にあったことが想像される。同系諸本には柴刈り、洗濯の場面が配置される。

第二図には団子を作る場面が描かれる。スペンサー本では類似の場面が鬼ヶ島への出立の直前に配置されるが、立教本は父母の装束が出立の場面とは異なる。太田は回春の場面と指摘している。

第三・四図は桃太郎の怪童ぶり（図2）を示し、小峯、太田が指摘するように、放髪で両肌を脱いだ姿からは、金平浄瑠璃の金時のイメージがうかがえる。また怪力の目撃者として、猟師、群衆が描かれるのも特徴で、語りの伝播が示唆されている。

第八～十図には猿、犬、雉子が供となり、仲間となった動物は擬

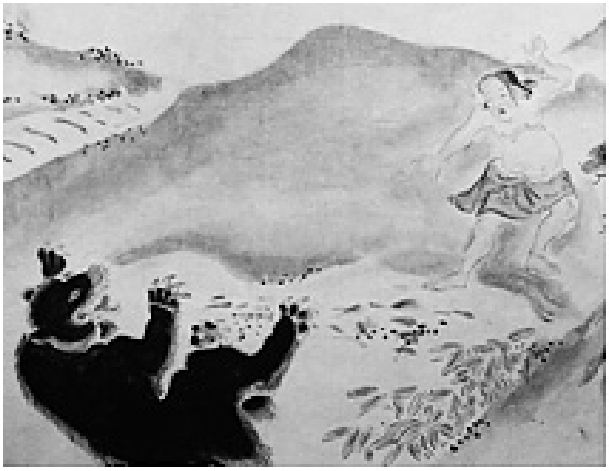


図2　第三図（桃太郎の怪童ぶり）

図3　第八図（猿犬の擬人化）

人化されて描かれる（図3）。擬人化図像の描かれ方は猿と犬、雉子で異なり、猿が動物そのままの姿に着物を着るのに対して、犬、雉子は人間と同じ手足を持つ。これは他の異類物においても見られる特徴で、大英博物館蔵『猿の草子』や国会図書館蔵『藤袋の草子』など、猿は着物や道具を持つ様子だけで擬人化されたものと見なされる。また猿のみ話末まで裸足で描かれる。

図4　第十二図（桃太郎の門破り）

第十二図（図4）は、お伽草子『酒呑童子』、『朝比奈』や地獄破りなどに見える門破りの一場面であるが、英一蝶系の「見え」を切

図5　第十五図（ひれ伏す鬼王）

るかのような桃太郎の仕草・表情は、歌舞伎の荒事の型を取り込んだものと太田は指摘する。

第十五図（図5）の鬼王の降参の場面では、平身低頭して打出の小槌と隠れ蓑笠を差し出す鬼王の後ろに、鬼女二人と姫君と思しき女性の姿が描かれる。鬼王の被る冠と刀の柄には、蛇を模したと見られる意匠が施され、小峯は鬼王と龍王、ひいては鬼ヶ島と龍宮城とのイメージのつながりを指摘している。また眷属を後ろにひれ伏す鬼王の姿は、地獄破りの後にひれ伏す閻魔王の姿とも通ずる。鬼と三種の宝物のつながりは馬場淳子などの指摘がある。古くは知恩院本『和漢朗詠注上』や半井本『保元物語』下「為朝鬼島ニ渡ル事並最後ノ事」などに両者のつながりが見え、お伽草子『一寸法師』にも鬼が捨て去っていった宝物として描かれている。狂言「隠れ笠」「宝の槌」は為朝の鬼島伝説と結びつけて、鬼島から持ち帰られた三種の宝物をめぐる内容である。

第十六図には徒歩にて帰還する桃太郎一行が描かれる。スペンサー本に見られるような、多くの鬼を従えて、さまざまな財宝を持っての凱旋ではなく、両親との再会や宝物を献上する場面も描かれない。

ところで、立教本が「英一蝶系」作品群の中で重要な点は、その奥書にある。『本朝画人伝』に『宝暦江戸百化物』所引として、英一蝶が西本願寺法主に献上する『桃太郎一代記』の巻物を描き、褒美の蕎麦を胸につかえさせた、というエピソードが載る。しかし『宝暦江戸百化物』は原典不詳ということで、従来は信憑性を疑われていた。宝暦年間に刊行された『当代江戸百化物』において、後日談も含めて同じエピソードが一蝶の弟子である英一蜂の伝として載っており、一蝶に仮託されて伝わったとも考えられる。しかし、立教本の奥書には、龍雲斎なる人物が寛政七年（一七九五）に一蝶の絵巻を写したとあって、「英一蝶系」の祖本が一蝶の作であることを裏付けている。

龍雲斎という人物に関しては未詳であるが、『古画備考』巻四十五に「宮殿筆者　寛政二年八月　禁裡御殿廻御画様筆者姓名」として狩野典信などとともに載る佐野龍雲が太田により指摘されている。また、龍雲斎の名を持つ浮世絵師として、天明～寛政（一七八一～一八〇一）にかけて作画をしたとされる遠山政武の存在もある（『原色浮世絵大百科』第二巻）。いずれも立教本が書写されたとされる寛政七年には活動していたと見られ、断定しがたい。

Ⅳ　諸本

くもん子ども研究所『桃太郎絵巻』（一軸、天明期（一七七八～八八）、紙本淡彩、全十六図、奥書「高嵩谷画」）（①）

立教大学図書館『桃太郎絵巻』（一軸、寛政七年秋（一七九五）、紙本淡彩、全十六図、奥書「龍雲斎写英一蝶図」）（②）

岡山県立美術館『桃太郎絵巻』（二軸、十八世紀頃、紙本淡彩、狩

野派）③

所蔵不明（東京古典会A）『桃太郎絵巻』（一軸、寛政十三年（一八〇一）、屠龍翁高嵩谷筆、二〇一一年十一月東京古典会に展示）④

所蔵不明（明治古典会）『新桃太郎絵詞』（二軸、文化四年（一八〇七）、紙本淡彩、上巻十図・下巻九図、下巻奥書「右画円洲並岡持賛円得写之」、二〇〇一年七月明治古典会に展示）⑤

高松市歴史資料館『桃太郎絵巻』（一軸、文化十一年（一八一四）、紙本淡彩、高嵩渓画）⑥

スペンサー・コレクション（伝旧徳川）『桃太郎絵巻』（二軸、文化十三～文政十一（一八一六～二八）、紙本淡彩、詞書あり、奥書「伊川院法印藤原栄信筆」、朱文印「玄賞斎」）⑦

チェスター・ビーティ・ライブラリー『武清筆絵巻』（一軸、文化文政期（一八〇四～三〇）、紙本淡彩、全十図（冒頭欠）、外題「武清筆絵巻」、奥書「武清筆」、朱文方印「可庵」）⑧

国立歴史民俗博物館『桃太郎画伝絵巻』（三軸、文政（一八一八～一八三一）頃、狩野探玄筆、紙本淡彩、歴博DB）⑨

東京国立博物館A『桃太郎画巻』（一軸、天保八年二月　日（一八三七）、紙本淡彩、全十図（合戦場面欠）、外題「桃太郎絵巻　栄川画」、款記（写し）「白玉法眼典信（花押）」、奥書「天保八年二月　日／雅信」）⑩

ジェノバ東洋美術館『桃太郎絵巻』（一軸、元治元年（一八六四）、樋口探月、紙本淡彩、詞書あり、奥書「元治元甲子年　六月中旬探月堂源守保画」、朱文印「探月」、朱文方印「淵□（氵＋実）」）⑪

リンデン民族学博物館『桃太郎絵巻』（二軸、一九C）⑫

所蔵不明（東京古典会B）『新桃太郎絵巻』（一軸、江戸後期写、二〇一一年十一月東京古典会に展示）⑬

東京国立博物館B『桃太郎ものかたり絵巻』（一軸、明治、紙本着色、奥書「洞秀美之図」、東博DB）⑭

河鍋暁斎記念美術館『桃太郎絵巻』（一軸、紙本着色）⑮

V　翻刻

なし。

VI　参考文献

滑川道夫『桃太郎像の変容』（東京書籍、一九八一年）

小峯和明「資料紹介　立教大学図書館蔵『桃太郎絵巻』」（『立教大学大学院　日本文学論叢』創刊号、二〇〇一年三月）

太田昌子「江戸の桃太郎イメージ」（『文化史の構想』吉川弘文館、二〇〇三年）

馬場淳子「鬼と隠れ蓑」（『立教大学大学院日本文学論叢』3、二〇〇三年六月）

（担当・塩川和広）

9・福富草紙

Ⅰ　書誌

【作品名】　福富草紙（一巻本）

【請求記号】　NDC：721.2／F84

【形態・数量】　絵巻・一軸

【外題】　福富草紙（白地の題箋に外題と同筆で「写」の墨書きあり）

【内題】　なし

【奥書・識語】　なし

【表紙・横寸法】　薄茶地、無紋、三十一・五糎（原表紙か）

【見返し】　無紋、金箔散らし

【料紙】　楮紙

【寸法】　縦四十一・〇×全長一〇六〇・五糎

【用字】　漢字平仮名混じり

【絵】　淡彩（一部未着色）　全十四図

【備考】　料紙に薄様の裏打ちあり。第一紙に、小堀鞆音の朱印あり（「鞆」）。木箱入り（題箋などなし）。

Ⅱ　概要

人は分不相応の果報を羨んではいけない。昔、福富の織部という金持ちがいたが、生まれつき放屁の芸が得意で、芸を披露しては褒美をいただき、どんどん繁栄していった。

その隣に乏少の藤太という貧しい爺がおり、口が大きくて人から鬼うばと呼ばれる年上の女を妻としていた。鬼うばは藤太に、隣の福富に弟子入りして放屁の芸を習うよう提案し、それが嫌なら離縁してくれと言い放つ。そこで乏少の藤太は福富に弟子入りを申し入れた。

福富は藤太に屁芸を伝授するふりをして、嘘の方法を細々と教え、福富が失敗するよう仕向ける。それを知らない藤太は、今出川の中将の屋敷で放屁芸をしようと力むが、腹の具合が悪くなり、庭一面に下痢便を撒き散らしてしまった。

藤太は中将邸の家来に散々懲らしめられて帰ると、事の顛末に落胆した妻の鬼うばは、夫に恥をかかせた福富を呪う。そして神詣でから帰る福富を待ち伏せし、つかみかかった。

Ⅲ　特色

本絵巻は、『福富長者物語』（日本古典文学大系三十八『御伽草子』所収）で知られる、一巻本系統の伝本である。絵は重要文化財の春浦院本（『日本絵巻大成』二十五所収）に代表される二巻本系統のものをそのまま用い、詞書は二巻本のような画中詞中心のものではなく、地の文中心の物語本文となる。主人公の名前も成功者＝「福富織部」、失敗者＝「乏少の藤太」と二巻本と異なるのが一巻本系統の特徴であるが、その中でも立教本のみの特徴として、以下のことがあげられる。①失敗者の名が、「福富織部」ではなく「福富式部」となっ

ている。②冒頭に「人は身に応ぜぬ果報をうらやむまじきことになん侍る」で始まる詞書がない。③藤太の妻の鬼うばの年齢に関する記述がない。④下痢に悩む藤太の腰を鬼うばが踏む場面では、孫が笑いながら涎や尿を流しかけるという内容の本文がない。⑤最後の場面が途切れており、弓を持った侍従、もう一人の人物、犬一匹が脱落している。⑥立教本最大の特徴は、下痢が治まらない藤太が盤にもたれている場面の絵で、藤太の尻が着物で隠されている点である(図参照)。一巻本の中でも同様に尻を隠す描き方をしているのは、常福寺本、兵庫県立歴史博物館本、中野幸一本であり、脱糞表現とそのタブーの意識が垣間見られる描写として、非常に興味深い。

Ⅳ　諸本

《絵巻》

出光美術館（絵巻一軸。影印、翻刻『出光美術館蔵品図録　やまと絵』（出光美術館、一九八六年））

常福寺（絵巻一軸。影印『常福寺蔵「福富長者物語」』（北方心泉顕彰会、二〇〇六年））

兵庫県立歴史博物館（絵巻一軸。反町茂雄旧蔵（末尾「月明荘」印）。影印、解題、翻刻、橋村愛子「兵庫県立歴史博物館所蔵の一巻本「福富草子」」（兵庫県立歴史博物館紀要『塵界』十七、二〇〇六年））

赤木文庫旧蔵（絵巻一軸。翻刻『室町時代物語大成』十一、現在所在不明）

白百合女子大学（絵巻一軸。蔵書印「籐浪氏蔵」（第一紙）。白百合DB）

大東急記念文庫A本（絵巻一軸。寛延三年（一七五〇）写。翻刻『室町時代物語集』五、『御伽草子』（日本古典文学大系三十八））

大東急記念文庫B本（絵巻一軸）

松本寧至（海福院本。絵巻一軸。文政四年（一八二一）写）

大阪市立美術館（絵巻一軸。文政九年（一八二六）写）

中野幸一（絵巻一軸。天保三年（一八三二）写。影印、中野幸一編『奈良絵本絵巻集』別巻三（早稲田大学出版部、一九八九年））

東洋文庫岩崎文庫（絵巻一軸）

立教大学（絵巻一軸）

《詞書のみの冊子本》

宮内庁書陵部蔵『片玉集』四十五所収本（他六作品と合一冊。津村淙庵写。国文M）

Ⅴ　翻刻

不掲載。参考文献、吉橋一〇論文参照。

Ⅵ　参考文献

室木弥太郎「絵巻「福富長者物語」（常福寺蔵）―翻刻と解題―」（密田良二教授退官記念事業会編『密田教授退官記念論集』密田良二教授退官記念事業会、一九六九年）

美濃部重克「御伽草子「福富長者物語」本文の成立――物語と絵と文章と――」（『中世伝承文学の諸相』和泉書院、一九八八年）

橋村愛子「兵庫県立歴史博物館の一巻本「福富草子」」（兵庫県立歴史博物館紀要『塵界』17、二〇〇六年二月）

吉橋さやか「立教大学図書館所蔵一巻本『福富草子』について」（『立教大学大学院日本文学論叢』10、二〇一〇年八月）

（担当・吉橋さやか）

10・福富草子絵巻

Ⅰ　書誌

【作品名】　福富草紙（二巻本）

【請求記号】　NDC：721.2／F84

【形態・数量】　絵巻・二軸

【外題】　福富之巻（青地の題箋あり。破損あり。題名と同筆で右下に「二巻」の墨書きあり）

【内題】　なし

【奥書・識語】　なし

【表紙・横寸法】　浅葱色地、金の卍繋ぎ、上巻二十七・九糎、下巻四十三・五糎（原表紙か）

【見返し】　無紋、金箔散らし

【料紙】　楮紙

【寸法】　上巻　縦三十六・〇×全長七三七・四糎
下巻　縦三十六・〇×全長九七三・六糎

【用字】　漢字平仮名混じり

【絵】　淡彩　全二十五図（上巻・十図、下巻・十五図）

【備考】　見返しに「旧由学館御所蔵之内御払ニ付相求置候もの也　明治六年三月　古田氏」とあり。画面内に色指定の書き込みあり。木箱入り。

Ⅱ　概要

貧乏を嘆いて暮らしていた秀武夫婦。妻のすすめで秀武は七日間、神詣でをする。するとある暁ごろ、秀武は「小さな蜜柑ほどの大きさの鉄の鈴をいただく」という夢を見る。その夢を解いてもらうと、「思いもよらない声が身から出てきて、それによって恵みを受ける」とのこと。その夢解きの通り、すぐに秀武の身から「綾つつ錦つつ黄金さらさら」という声がおならとなって出てくる。秀武はこの放屁芸をあちこちで披露してたくさんの褒美をもらい、金持ちになった。（以上、上巻）

一方隣に住む福富夫婦は、秀武夫婦の成功をうらやましく思っており、秀武に弟子入りして屁芸を習おうとする。しかし秀武は福富に嘘の方法を伝授し、福富が下痢をするよう仕向ける。何も知らない福富は、さっそく中将の邸に赴き、放屁の芸を披露しようと力むが、秀武の目論見通り、下痢便をまき散らすという失態を演じてしまう。散々懲らしめられた福富は、血まみれ・糞まみれになって家路につくが、妻はその散々な顛末に落胆し、夫に嘘を教えて騙した秀武を呪う。路上で福富の妻が秀武に食ってかかるところで物語は終わる。（以上、下巻）

Ⅲ　特色

本絵巻は、春浦院本に代表される二巻本系統の伝本で、連続して描かれる絵の中に、登場人物のセリフの画中詞が付され、物語が展開している。二巻本は早くから錯簡が生じたため、諸本によって場面の配列に違いがあるが、立教本の配列は、松本寧至本や学習院本と共通している。

ただし立教本のみに見られる特徴として、上巻と下巻の区切り方の違いが挙げられる。他の諸本では、幸を手に入れた秀武たちが社へお礼参りに行く場面で上巻が終えられているが、立教本では、この一つ前の場面である、放屁芸を披露して手に入れた褒美を、家人と喜ぶ場面で上巻が閉じられている。そしてお礼参りの場面は下巻の冒頭に配置しているのが特徴である。

立教本がそのように作られたのはなぜか。複数の巻子によって成る作品は、常に揃いで所蔵されるとは限らず、散逸・分蔵される可能性を有する運命にある。上・下の二巻から成る『福富草紙』も例外ではない。さらに『福富草紙』のもう一方の系統である一巻本は、二巻本の下巻と同じ絵が用いられているので、絵画によって、一巻本なのか或いは二巻本の下巻なのかを区別することは難しい。立教本はそうした場合に備え、他の二巻本下巻や一巻本との混同を防ぐため、上巻の巻末場面を下巻冒頭に据えるという、独自の措置を施したのではないかと考えられる。

Ⅳ　諸本

《絵巻》

宮内庁書陵部A本（後崇光院筆『粉河寺縁起』紙背、冒頭部詞書。

翻刻、石塚一雄「後崇光院筆物語説話断簡について」（『書陵部紀要』十七、一九六五年）、影印『新修日本絵巻物全集』十八）
妙心寺春浦院（絵巻二軸。翻刻『室町時代物語集』五、『室町時代物語大成』十一（角川書店、一九八三年）、影印、翻刻『新修日本絵巻物全集』十八、『日本絵巻大成』二十五。翻刻、小山聡子・五月女肇志・原由来恵「『福富草紙』（上巻）注釈」（『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』三十七、二〇〇七年）、小山聡子・五月女肇志・原由来恵「『福富草紙』（下巻）注釈」（『古代中世文学論考』十九　新典社、二〇〇七年））
クリーブランド美術館（絵巻一軸。下巻のみ。影印『新修日本絵巻物全集』十八、『日本絵巻大成』二十五）
松本寧至（絵巻二軸、安永五年（一七七五）年写）
学習院大学（折本二冊、天明六年（一七八六）写、絵巻を折り本にしたもの）
宮内庁書陵部（絵巻上下合一軸、寛政十年（一七九八）写）
国立国会図書館（絵巻一軸。上巻のみ）
東北大学A本（絵巻一軸。下巻のみ。天保五年（一八三四）写。東北大狩野DB）
東北大学B本（絵巻上下合一軸）
静嘉堂文庫A本（絵巻上下合一軸）
静嘉堂文庫B本（絵巻一軸。上巻のみ。天保六年（一八三五）写）
西尾市岩瀬文庫（絵巻一軸、天保十一年（一八四〇）写。抄出本）
大谷女子大学（絵巻二軸。影印、岩瀬博編『御伽草子絵巻　福富草紙・俵藤太物語』（和泉書院影印叢刊四十一、和泉書院、一九八四年）、翻刻、松浪久子「「福富草紙」攷」（『大阪青山短期大学研究紀要』九、一九八一年））
早稲田大学（絵巻二軸。早大DB、巻頭のみ）
逸翁美術館（絵巻上下合一軸。国文M）
立教大学（絵巻二軸。影印・翻刻、吉橋さやか「資料紹介―立教大学図書館蔵『福富草子絵巻』」（『立教大学大学院日本文学論叢』八、二〇〇八年））
松平公益会（絵巻二軸。国文M）
フランス国立図書館（小絵二軸。影印『HISTOIRE DUN PET La deconfiture de Fukutomi』（Editions Philippe Picquier　二〇〇二年））
兵庫県立歴史博物館（絵巻一軸。下巻のみ）
東京国立博物館（絵巻二軸。東京国立博物館情報アーカイブ、一部のみ）

《詞書のみの冊子本》

宮内庁書陵部B本（上下合一冊、『池底叢書』五十一所収。国文M）
静嘉堂文庫C本（「みやこのてふり」と合一冊、明治二十九年（一八九六）写）
茨城県立歴史館（一冊、詞書のみ。国文M）

Ⅴ　翻刻

不掲載。参考文献、吉橋〇八論文参照。

Ⅵ　参考文献

美濃部重克「御伽草子「福富長者物語」本文の成立―物語と絵と文章と―」（『中世伝承文学の諸相』和泉書院、一九八八年）

吉橋さやか「資料紹介―立教大学図書館蔵『福富草子絵巻』」（『立教大学大学院日本文学論叢』8、二〇〇八年八月）

（担当・吉橋さやか）

11・［未詳奈良絵巻］

Ⅰ　書誌

【作品名】　未詳絵巻

【請求記号】NDC：721.2／TO71

【形態・数量】　絵巻・一軸

【外題】　西行法師絵巻土佐光□（□部分は金箔貼付により判読不能）

【内題】　なし

【奥書・識語】　なし

【表紙・横寸法】　金茶色地、牡丹唐草文、二十三・四糎（後表紙）

【見返し】　無地、砂粉散らし

【料紙】　斐紙

【寸法】　縦三十一・七糎×全長六五二・九糎

【用字】　絵のみ

【絵】　濃彩、全八図

【備考】　二重箱（外側紙製、内側木製）、内側の箱中央に「土佐光茂筆／土佐画西行法師巻」と墨書。内側の箱蓋裏に「大和絵中興の祖と称されし土佐光信の嗣子従四位下刑部大輔に／叙位す光信の後を受けて画技卓越す／北野天神縁起三巻清水寺縁起三巻等数多し本巻も又／光茂筆にして筆力の妙を尽す逸品なり／大正乙卯春　帝国芸術院　草場惟弥八十一歳鑑」と墨書。

Ⅱ　概要

〔第一図〕寺社に参詣する女。

〔第二図〕寺社に祈願する夫婦と家臣ら。女神のような神仏。

〔第三図〕裸で戦う男たち。私闘か。

〔第四図〕賑わう港。男に手を引かれる子供。それを見つめる僧たち。

〔第五図〕男の届けた？文を読む女。涙をぬぐう下女。

〔第六図〕街道をゆく女（背景に冨士山）。

〔第七図〕賑わう街道をゆく女。それを見つめる二人の僧。傍らに稚児。

〔第八図〕説法の場で手を取り合う僧と女。周囲には大勢の人。高座の僧の傍らに、二人の稚児。

Ⅲ　特色

詞書はなく、絵のみの絵巻である。また、外題に「西行法師」とあるが、『西行法師絵巻』の根拠となる手がかりはない。箱蓋裏の墨書をなした草場惟弥なる人物は、日本美術院（帝国芸術院と改名）の名簿には見当たらず、詳細は不明。大正乙卯＝四年（一九一五）に八十一歳とすれば天保五年（一八三四）生まれの人物と考えられる。

便宜上、各図に通し番号を付したが、改装の際に入れ替えられた可能性もあり、順序は本来通りとは限らない。なお、本絵巻はこれまでに、二度売り立てに出されているが（『古典籍下見展観大入札会目録』一九八三年十一月、『思文閣古書資料目録一〇九』一九八四年）、現在と同じ状態であった。

ここでは各図の主題を確認しておこう。

〔第一図〕

中央に寺社の門が描かれ、そこを通過する旅装束の女が描かれている。この女が主人公であろうか。女の目線の先にいる、修行僧二人連れも目を引く。景観から清水寺か。

境内は唐傘の側女に被衣姿の女性、三味線を弾く坊主らでにぎわう。その様子は宮内庁三の丸尚蔵館『をくり』の最終場面や、大阪市立博物館『四天王寺・住吉神社図』の四天王寺境内、某家『洛中洛外図』の東寺などと通じ合うものがあり、近世風俗画との近さを感じさせる。三味線が登場し始めるのは慶長末年～寛永頃とされるため（郡司正勝「三味線の登場」（『かぶき―様式と伝承―』学芸書林、一九六九年）、本絵巻の三味線坊主もまた、近世前期、図様としては岡山美術館『洛中洛外図』（慶長年間）、長円寺蔵『祇園・北野社遊楽図』（元和後半―寛永前半）と近い時代に成立したと考えられる。

〔第二図〕

左手中央に、祈願する夫婦らしき男女が描かれ、本殿より、いま夢告をさずけようと歩み寄る神仏が描かれる。広縁や庭に多くの女房、従者たちが控える様子をみると、夫婦は高貴な身分であろうか。神仏は頭に冠をつけ、つぼみのついた枝を手にしている。子の無い夫婦が申し子をする場面を彷彿とさせる。

〔第三図〕

刀を手に争う男たちが描かれている。特徴的なのは、彼らがみな衣服を身に着けていない点であろう。このような上裸の男たちの決闘といえば、徳川黎明会『邸内遊楽図（相応寺屏風）』（寛永前半期）、某家『洛中洛外図』（一七世紀）、『東山遊楽図』（一七世紀）などにみえる武士・小者たちの喧嘩が想起される。鎌田道隆「かぶき者と

その時代」（京都国立博物館編『洛中洛外図　―都の形象・洛中洛外の世界―』淡交社、一九九七年）では、慶長十一年（一六〇六）京都・北野・賀茂・祇園あたりで起きた婦女への乱暴（『徳川実紀』）と、慶長十四年に京都で起きた荊組と皮袴組（無頼集団）の喧嘩の記事（『当代記』）をあげ、人の集う場でのいさかいが頻発していたことを指摘。近世風俗画はこれを画題としたものだが、本絵巻の図様もまた、これに近い。お家騒動の様子を描いているとも考えられる。

〔第四図〕

画面右側には港の風景が広がり、左側には荷の上げ下ろしにいそしむ人々が描かれる。その中に子どもと、子どもの手を引く侍烏帽子に直垂の男が描かれる。この二人連れから人商人が幼き子どもを人買いに売り渡そうとする場面のように読み取れる。港での身売りといえば、説経『さんせう太夫』、古浄瑠璃『ゆみつぎ』『よしうぢ』などがあり、語り物では常套的なモチーフである。

〔第五図〕

男からの文を読み、涙する女が描かれる。屋敷の広縁は傷んでおり、女が侍女とあばら家に住まう様子が伺える。前場面と関連づけるならば、売られた子供からの文と考えられようか。このモチーフといえばお伽草子『法妙童子』、謡曲『婆相天』がある。

〔第六・七図〕

いずれも女が街道を行く様子が描かれる。第六図中央の、黒い傘をかぶった女が画面右を進行方向に進んでいる。第六図の背景には寺院の屋根の一部が、雲の合間にみえる。第七図をみると、女はにぎわう街道を歩いている。場面の中心は女であると思われるが、第七図左上の稚児と二人の僧も、目をひく。

女の道行きとしては、古浄瑠璃『ともなが』の母が子を捜す話や、『山中常盤』で母が息子を捜して街道を下る話がある。これらはいずれも子を捜すモチーフであるが、逃亡する女のモチーフとしては『師門物語』『明石物語』『ゆみつぎ』もある。

〔第八図〕

画面左に高座で説法をする僧をとりまくように、広縁や庭に人々が詰め掛けている。しかし人々の視線は僧ではなく、中心の女と若き僧の再会に注がれている。おそらく説法の場での再会を絵画化したのだろう。モチーフとしてはお伽草子『こあつもり』『都曽都物語』、古浄瑠璃『ゆみつぎ』などが知られる。いずれも直談など、寺院社会で享受されたテキスト群から派生した作品である。

以上、場面ごとに関わりのある物語、絵画に触れながら述べてきた。絵からは近世風俗画との共通性が見出せ、また語り物に典型的なモチーフ―申し子、お家騒動、幼な子の身売り、女性の流浪、説法の場での再会など―がちりばめられている。作品は特定し難いが、万治年間に流行した謡曲の読み物化（草子化）の中で作られた絵巻である可能性が考えられる。

川崎剛志氏や濱田啓介氏らによって、謡曲に他の物語の要素を加

え、新たな読み物にする書肆の営為が報告されている。読み物化される際には、お家騒動や、身売りなど、語り物に頻出するモチーフを加えることで、原作品とは異なる物語に仕上げてゆく。濱田氏が指摘した謡曲の読み物化された謡曲作品のうち、『桜川物語』（謡曲《桜川》の翻案物）は、本絵巻を考える上で注意すべきであろう。

子の無い夫婦が申し子をして、盛りの花の枝を授かり、懐妊する。男子は桜子と名づけられる。七歳のとき、父が亡くなり、お家騒動の中で母子は流浪する。桜子は母の苦労を思い、自ら身を売り、人商人に売られ、果ては常陸国磯辺寺のぜんとく法印のもとに引き取られる。その後、花見の宴のさなかに国司に見初められ、養子入りする。

出世した桜子はやがて家臣や母と無事に再会、お家再興を果たす。共通するモチーフが散見され、現時点では最も本絵巻と重なる部分の多い作品である。しかしながら、劇的に描かれる説法での再会場面を欠くなど、問題点も残る。本絵巻と特定の作品とを直接結び付けるよりも、むしろ、謡曲の読み物化といった背景をふまえ、その過程で生み出された新出作品と考えるべきか。今後の課題としたい。

Ⅳ　諸本

なし。

Ⅴ　翻刻

なし。

Ⅵ　参考文献

日本美術年鑑編纂部編『日本美術年鑑』第一～三（画報社、一九一一―一九一三年）→大正四年直前の日本美術院の会員（国会ＤＬ）

『日本美術院百年史索引』「正員一覧・同人一覧」→日本美術院創立時の正員および平成十六年三月までに推挙された同人の一覧

川崎剛志「万治頃の小説制作事情―謡曲を題材とする草子群をめぐって―」（『語文』51、一九八八年一〇月）、「万治頃の小説制作事情（続）―『松風村雨』をめぐって―」（『就実国文』11、一九九〇年十一月）

濱田啓介「刊行のための虚構の発生―謡曲を題材とした仮名草子について―」、「刊行のための虚構の発生・補説―謡曲の草子化について」（『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、一九九三年）

尾田房子「『平の桜子』物語の考察――大倭廿四孝の中より―」（『文学論藻』3、一九五四年十一月）

金子武雄「桜川物語の研究」「『さくら川物語』翻刻」（『物語文学の研究―本文と論考―』笠間書院、一九七四年）

橋本直紀「謡曲草子化の一典型」（『国文学（関西大）』58、一九八一年十二月）

橋本直紀「『大倭二十四孝』の単行板―『二の宮花満』について―」（『国文学（関西大）』59、一九八二年十二月）
西村聡「みどり子桜子」「氏子桜子」（『能の主題と役造型』三弥井書店、一九九九年）
石川透「『雪女物語』解題・影印」（『広がる奈良絵本・絵巻』三弥井書店、二〇〇八年）、「『雪女物語・下』翻刻」（『三田国文』48、二〇〇八年十二月）
小林健二「能の絵巻と絵本」「「すみた川のさうし」絵巻を読む」「「三井寺絵巻」考―能の絵巻・絵本の史料性」、（『中世劇文学の研究―能と幸若舞曲』三弥井書店、二〇〇一年）、「大東急記念文庫蔵「楊貴妃絵巻」考」（『かがみ』36、二〇〇三年六月）、「能《大江山》と「大江山絵詞」」（『国文学研究資料館紀要　文学研究篇』35、二〇〇九年二月）、「天狗説話の視覚的展開―『是害房絵』と能《善界》」（平安文学と隣接諸学10『王朝文学と物語絵』、竹林舎、二〇一〇年）、「「百万」絵巻出現の意義―能楽研究の視点から―」（国立能楽堂『百万』図録、二〇一〇年）、「能の絵画的展開―二つの新出資料をめぐって―」（中世文学と隣接諸学7『中世の芸能と文芸』、竹林舎、二〇一二年）、「能から物語草子へ―《玉井》と『かみよ物語』絵巻」（『國學院雑誌』114、二〇一三年十一月）

（担当・粂汐里）

12・行長筆能恵絵巻物

Ⅰ　書誌

【作品名】　能恵法師絵詞
【請求記号】NDC：721.2／TO 71
【形態・数量】　絵巻・一軸
【外題】　行長筆□　能恵絵巻物　住吉絵所（直書）
【内題】　なし
【奥書・識語】　住吉絵所／絵行長筆／詞寂蓮筆／前々より類切有之候／天保十四卯年正月写
【表紙・横寸法】　檜皮色地蔓唐草、三十一・七糎（原装）
【見返し】　素地
【料紙】　楮紙
【寸法】　縦三一・一糎×全長七三五・四糎
【用字】　漢字平仮名混じり
【絵】　淡彩　全七図
【備考】　表紙中央に書かれた外題、下やや右に「内海蔵本」長方印（墨印）

Ⅱ　概要

東大寺僧の能恵得業は大般若経書写供養の半ばで病没する。獄卒が能恵を取り立て閻魔庁へ向かうものの、八幡大菩薩の使者が寄り添い、大願成就のために能恵を現世へ帰らせるよう嘆願する。

Ⅲ　特色

建長二年（一二五〇）ごろ成立した、東大寺僧、能恵法師の蘇生譚を題材とした絵巻。広隆寺所蔵（①）と断簡（②）が現存する。類話である『東大寺雑集録』巻二所引の記事と比較すると、能恵が閻魔王と対面、大般若経供養の大願を望み、無事に蘇生して解脱を得るまでを欠いており、元来はこの内容に相当する詞書があったと考えられる。

能恵の蘇生譚は、『百練抄』嘉応元年（一一六九）四月十八日条をはじめとして、『明月記』寛喜二年（一二三〇）三月六日および六月十日条、『東大寺要録』供養篇、宝治二年（一二四八）三月に簡略な記述がある。まとまった記述としては、先の『東大寺雑集録』巻二のほか、『八幡愚童訓（乙本）』下「佛法事」（永仁六年〈一二九八〉十月―正安三年〈一三〇一〉一月頃）や『八幡御託宣記宗祐筆』裏書があり、この当時、物語は成立していたらしい。

絵画化の時期としては、『高山寺聖教目録』（建長二年〈一二五〇〉頃）に「信実絵義相元暁絵幷能恵得業絵等　納一合／兼康絵本一巻此禅堂院在之」とあることや、『八幡宮寺巡拝記』上（弘長年間〈一二六一―一二六三〉―文永八年〈一二七一〉頃）に「一　能恵得業ト云人、東大寺ノ馬道大般若ノ願ユヘニ、大菩薩ノ武内ヲ御使トシテ、炎王宮ヨリメシ返シ画書事、図ハ世間ニアルカ故ニ略之、云々。」とあり、早くて建長二年ごろに絵巻が流布していたようだ。

現存本の中で最も善本である広隆寺本は冒頭を欠いており、能恵が大般若経書写供養にはげむくだりがない。突如能恵のもとに獄卒たちがやってくる場面より始まる。現存する画中詞から読み取れるのは、獄卒たちが能恵の名を尋ね、取り立てるやりとりである。能恵には八幡大菩薩の使者が付き添い、閻魔王庁までの道のりを進んでいく。能恵の閻魔王までの道程は、絵巻の特性を生かして右から左へ展開する。八幡大菩薩が能恵に大願ある由を奏上し、閻魔王に対面するところで絵巻は終わっている。

絵巻の最大の特徴は絵と詞書きの関係である。詞書は、物語を説明する叙述的本文と、絵の人物のすぐ脇の画中詞とがある。本文と挿絵の単純な繰り返しではなく、人物の発言を画中詞によってあらわすことで、絵の中の人物が躍動するように見せている。この手法は、画中詞のありかたを考える上で、重要な作品であるとの指摘も、すでになされている（若杉準治論）。

画中詞には読者の便を考慮し、通し番号が付されているが、それにより、本文に欠損や錯簡があることが判明している。②の断簡は、その欠損部分にあたる場面であるが、①との関係については明らかにされていない。また、②の発見以後、①②と同時期の古い伝本は見つかっていない。③以下は①②の模写本であり、物語の全貌は不明なままである。

従来は、絵巻の成立背景や絵と詞書きの錯簡をめぐる研究が主であった。しかしながら、ここに紹介する立教本をはじめ、模本の流通もまた、『能恵法師絵詞』の伝来を解明する手がかりとなり得る。

現存する絵巻は①のみだが、先の『高山寺聖教目録』にも「能恵得業絵」とあり、高山寺にも伝わっていたらしい。この二つの絵巻が同一か否かをめぐっては梅津次郎氏の論考がある。梅津氏は、建長二年（一二五〇）の目録に記載のあった「能恵得業絵」が、寛永十年（一六三三）の『高山寺聖教目録』『高山寺笛子入六合目録』になると、姿を消すと指摘した。『華厳縁起絵詞』の添書（所在不明）を引き、「華権縁起絵詞」六巻とともに「能恵得業絵」が伝来していたこと、及び『寺社宝物展閲目録』（寛政四年〈一七九二〉）を参照し、「元和寛政間（一六一五―一八〇〇）には高山寺広隆寺のいずれにも存在しなかったであろうことがほぼ推定されるであろう」と述べている。

このように、かつて高山寺にあった「能恵得業絵」は、寛永十年以降、『寺社宝物展閲目録』（寛政四年〈一七九二〉）も含めて、確認できない状態が続くこととなる。しかし、『寺社宝物展閲目録』（寛政四年〈一七九二〉）の記載事項を再度見直すと、高山寺所蔵の「能恵得業絵」をめぐる新たな流通経路が明らかになる。

『寺社宝物展閲目録』とは、住吉広行（一七五五―一八一一）が、松平定信（一七五九―一八二九）の命で、儒学者柴野栗山（一七三六―一八〇七）とともに、京都・大和・河内の寺社をめぐり、古書・

古画・古物類の宝物調査をした際の記録である。黒川真頼本に拠って凡例をみると、宝物調査にあたり、その場での写し取り（△）や、宝物の取り寄せ（○）が行われた様子が記されている。

「目録仕立凡例

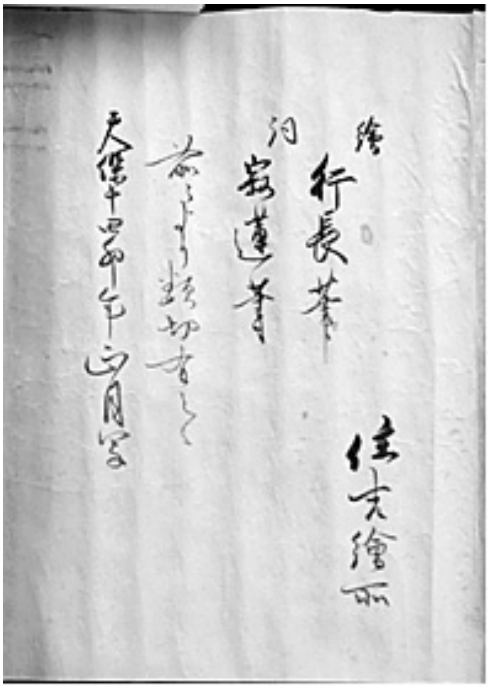
一　此度写取候分者、三角印付置候、但先達而御写有之候品も、格別見事ニ相見候物者、為御見合猶又写取儀も有之候

一　御取寄にも相成可申と奉存候品者、丸印付置申候」

広隆寺の項には「十二月十日　内記一人罷越」とあるのみだが、高山には、「十二月十一日　○義相元暁絵幷能恵得業絵等　納二一合一」とあり、高山寺所蔵の「能恵得業絵」が「御取寄」になり、一度住吉絵所内部で模写されていたことが判明する。つまり寛政四年（一七九二）の時点では、「能恵得業絵」はまだ高山寺にあり、宝物悉皆調査のために持ち出され、何らかの理由で広隆寺の所蔵となったことがわかるのである。

合わせて確認すべきは、④東博本の添状である。添状には、ある年の六月に住吉派の絵師が、平五郎（板橋貫雄）から『能恵法師絵詞』を借り受け、一覧ののち返却した旨が記されている。この時の住吉派の絵師とは時代的に住吉弘貫であろう。弘貫の父は宝物悉皆調査に携わった住吉広行である。「内記」が取り寄せた絵巻とは、高山寺本そのものではなかろうが、模写本の貸し借りは、寛政四年〈一七九二〉の宝物悉皆調査の中で、関連資料として流布している『能恵法師絵詞』を一点一点収集し、確認するために、板橋貫雄から取り寄せたのではないか。

下原美保氏によれば、当時の住吉派では、住吉広行をはじめとして絵師たちによる鑑定事業や模写活動がさかんであった。たとえば、松浦藩第三十四代藩主・静山（一七六〇―一八四一）の求めによる絵画情報の提供が知られている。模写された一本、足利義尚蔵「狐草子絵巻」巻末に「此本図者如慶以来先祖代々宝蔵也　住吉絵所」とみえ、⑥立教本の奥書の記述と合致する。



こうした活動は、住吉派に限らない。③の断簡の模本は、奥書から木挽町狩野家九代当主・狩野晴川養信（寛政八年〈一七九六〉―弘化三年〈一八四六〉）の弟子の亀吉が制作したものであることがわかる。養信とその門人たちによる、平安から鎌倉期の絵巻の膨大

な量の模写本制作は、松原茂氏の論によって報告されており、③はそうした一連の模写活動の中で成立したものであることがわかる。⑤徳江元正本は現物をみていないが、川崎千虎（川崎鞆太郎〈一八三七―一九〇二〉）の名がみえるため、これもまた明治二十九年（一八九六）宮内庁が行った、臨時全国宝物取調事業の大規模な宝物模写、模造事業の中で制作されたものであろう。そのほか、黒川真頼『新訂増補　考古画譜』下巻巻九（明治四十三年〈一九一〇〉）には、西院宗先（江戸後期の書画鑑定家）所蔵の「残欠一巻、長八寸ばかりの小巻、もと太秦一子院の所伝、画行長、詞寂蓮、書画ともに妙なり」や、西村藐庵（天明元年―嘉永六年。江戸の陶工。吉原の名主）所蔵の「日本東大寺華厳宗大法師能恵と巻中にしるせり」があったとみえ、幕末や明治期にかけ、『能恵法師絵詞』は模本によって多様な広がりをみせていたようだ。⑥立教本もまた、寛政四年の宝物調査で「御取寄」となった高山寺本の模写本が住吉絵所で制作され、門人によって継承された一本であろう。

Ⅳ　諸本

原本

①広隆寺　絵巻一軸（残欠）（日本絵巻大成25、新修日本絵巻物全集）

箱表貼付題簽「閻王宮絵伝」と墨書

②旧・谷森真男　断簡（『大師会図録』十六号、梅津論文）

第二段第十二紙に続く部分。現在所在不明。

広隆寺本の模本

③東京国立博物館　断簡　②の模本（日本絵巻大成25）

奥書「文政二年十一月十八日画亀吉摹詞信義摹／右一軸詞書、寂蓮法師等申伝／絵、粟田口法眼筆申伝／竹本屋五兵衛ヨリ来る／詞書寂蓮、養信愚鑒可然歟／絵、粟田口イカカ。不可然。粟田口よりも／古きかたなるへし。ゑはきやう（（興？・京？））にはあらす」＊句読点引用者

養信（おさのぶ）……木挽町狩野家九代当主・狩野晴川養信（寛政八年〈一七九六〉―弘化三年〈一八四六〉）。幕府御用絵師。公務記録に『公用日記』（東京国立博物館蔵五十六冊、国会に三分冊）。

亀吉……養信の弟子。『公用日記』文政五年（一八二二）閏一月二十一日条、天保十二年（一八四一）十二月二十九日条に、江戸城の大広間の修繕や、上野霊屋廟で働く記事。

④東京国立博物館　絵巻一軸？　広隆寺の模本（梅津論文）

奥書1「京室町通中立売本丁経師屋加兵衛仕候宝暦（（カ））十年六月大吉日此重吉辰」

添状「拝見いたし候。如仰、春寒去、兼不申候得共、弥御安勝奉賀候しかば、兼而御咄之能恵画巻被遣、一覧いたし候処、至極のもの、尤前々より類切有之。画、春日行長筆、詞、寂蓮。早々写申度候間、任仰せ、直ニ留置申候。左様御承知可被下候。御風呂敷ハ返上御落手可被下候。用事迄。　以上

むつき未六日
平五郎　　内記　　」＊句読点引用者

奥書2「　太秦広隆寺蔵
天保十四年癸卯春三月
豊嶋将順
着色豊嶋惟親」

京室町通中立売本丁経師屋加兵衛……京都上京区の中立売通にある経師屋？

平五郎……板橋貫雄（文化六年〈一八〇九〉―明治四年〈一八七一〉）。絵師。絵を住吉弘貫に学ぶ。

内記……住吉派の絵師は代々内記を称す。

住吉広行（宝暦五年〈一七五五〉―文化八年〈一八一一〉）
住吉弘貫（寛政五年〈一七九三〉―文久三年〈一八六三〉）

類切……断簡のこと。②の断簡を指すと思われる。

⑤徳江元正（平田文庫）「能恵得業絵」絵巻一軸　川崎千虎模写（二〇〇八年十一月徳江名誉教授所蔵「御伽草子関係典籍展示」）

川崎千虎……川崎鞆太郎（一八三七―一九〇二）。明治二十九年（一八九六）宮内庁による臨時全国宝物取調事業による岡倉天心（一八六三―一九一三）主導の大規模な宝物模写、模造事業。

⑥立教大学図書館　絵巻一軸（国文M）

奥書「住吉絵所／絵行長筆／詞寂蓮筆／前々より類切有之／天保十四年卯年正月写」

V　翻刻

不掲載。『日本絵巻大成』25および、梅津論文に詞書と解説が掲載されている。

VI　参考文献

梅津次郎「能絵法師絵詞について」（『絵巻物叢誌』法蔵館、一九七二年）
近藤喜博「絵巻物研究の新史料」（『国華』699、一九五〇年）、「絵巻に関する資料覚書―能恵法師伝と春日権現記抄―」（『美術史』25、一九五七年）
新城敏男「中世八幡信仰の一考察―八幡愚童訓の成立と性格―」（『日本歴史』321、一九七五年）
金沢弘「『能恵法師絵詞』について」（『日本絵巻大成』25、一九七九年）
神崎充晴「『能恵法師絵詞』の詞書」（『日本絵巻大成』25、一九七五年）
菊竹淳一「能恵法師絵詞」（『新修日本絵巻物全集』30、一九八〇年）
松原茂「奥絵師狩野晴川院―『公用日記』に見るその活動―」（『東京国立博物館紀要』17、一九八二年三月）
池田宏「狩野晴川院『公用日記』にみる諸相」（『東京国立博物館紀

要』28、一九九三年三月）
武田恒夫「第六章第一節　粉本と模写」（『狩野派障壁画の研究―和様化をめぐって』吉川弘文館、二〇〇二年）
恵美千鶴子「扇面法華経冊子模本―岡倉天心・小堀鞆音と帝国博物館の模写事業」（『ミュージアム』621、二〇〇九年八月）
下原美保「松浦静山の絵画考証について―『新蔵書目』における住吉・板谷派の鑑定を中心に―」（『鹿島美術財団年報』22別冊、二〇〇五年十一月）、「近世初期の古典文化復興とやまと絵師の役割について―住吉派を中心に」（『近世やまと絵再考　日・英・米それぞれの視点から』ブリュッケ、二〇一三年）
若杉準治「画中詞のある絵巻の成立と展開」（『王朝文学と物語絵』平安文学と隣接諸学10、竹林舎、二〇一〇年）

（担当・粂汐里）

13・こゝろ双紙　全

Ⅰ　書誌

【作品名】　心の双紙／心の草紙／古々呂の双紙
【請求記号】　NDC：913.57／MA74
【形態・数量】　絵巻・一軸
【外題】　こゝろ双紙　全（無地無紋）
【内題】　なし
【奥書・識語】　享和二年三月　楽翁定信
【表紙・横寸法】　黄地、花紋、二十五・五糎（原表紙）
【見返し】　斐紙、無地無紋、金箔散らし
【料紙】　楮紙
【寸法】　縦三十・〇×全長一一九二・二糎
【用字】　漢字平仮名混じり
【絵】　淡彩　全十一図
【備考】　なし。

Ⅱ　概要

詞書には次に示す四の故事と十の道理を弁えずに行動する者が風刺され、絵と画中詞に人物の心の声が記される。ただし第六図にあたる⑧については、諸本画中詞をもたない。

①管弦の道の深さ浅さも知らずに、我こそと笛を吹き出す男
②人から好かれたいという内心をかき鳴らす、琴を弾く芸能者

③物知りの人をはばかることなく、歌や詩を作って自慢する男
④口先だけ昔を慕う男
⑤自分はたぶらかされないと思いながらも、楊貴妃に心を奪われた玄宗
⑥秦の二世皇帝をたぶらかした趙高
⑦説法をせずに財産のことばかり考えている僧
⑧関を通るために義経を打った弁慶と、忠貞に感じ関を通した関守
⑨医学書の知識を試すことばかり考えている医者
⑩評判ばかりを気にして、治療よりも世渡りに腐心する医者
⑪入道相国の寵愛を失って出家した妓王と、無常を観じて出家した仏御前
⑫自慢話ばかりする茶人と、それぞれの思いでそれを聞く客
⑬身勝手な願いを神にする者
⑭屁理屈をつけて自分を正当化する者

Ⅲ　特色

跋文によれば、享和二年（一八〇二）三月、病臥中の楽翁すなわち松平定信が、狩野惟信の門人、竹沢養渓に風刺画を描かせ、自らが詞書を書いたもの。文政五年（一八二二）序・跋の国会図書館蔵『白河文庫全書分類目録』（『松平定信蔵書目録』）の草子類の項目に、「心の草紙　一冊　老公供」とあるものが本作品にあたるとみられる。竹沢養渓・伊舟父子は『古画備考』に『新考平家物語図巻』を制作したとされ、その指示を行ったのが松平定信とされる。『新考平家物語図巻』は散逸したが、スペンサーコレクションにその下絵七巻が、玉川大学教育博物館に定信が絵師とやりとりをした『平家物語絵巻下絵指図集』が存在する。本作品もこうした関係の中で制作されたものであろう。

松平定光「石門心学と諸侯との交渉―中澤道二を中心として」（『心学』七、雄山閣、一九四二年）によれば、天明から寛政にかけては、田沼意次の政治や天変地異などから社会が疲弊し、日常の規範を明示して安心を得る心学が歓迎され、心学教化の対象が被治者から為政者へと拡張したとする。さらに松平定信の自叙伝である『宇下人言』には天明元年ころより「信友多く交りて、かたみに道を講じたり（略）あるは歌などよみあひ、又は互に善をすすめたり」、また「終日膝を交へて人道政治のことを物語なす」など、諸侯と交わって心身修養を探求する姿が見える。その会合の世話役である本多忠可から松平定信に宛てた書簡（前掲松平定光論文）には、本多忠可が親交のあった中澤道二を定信に引きあわせ、定信が中澤道二を招聘したことが裏書きされている。このような心学への関心が、『心の双紙』に示される社会への風刺へとつながっていることは指摘できよう。

内容については諸本、詞書、絵ともに大きな異同は見られないが、⑦⑨⑩のない国会A本などや、⑭の絵（第十一図）がない国文研本、

話順の異なる越国文庫本もあり、祖本がどのような構成であったか断定しがたい。ただし国会B本・岩瀬文庫本『古々呂草紙』は、水月庵すなわち堀田正敦による跋文を持ち、「同じ年卯月の末つ方、楽翁君御許より、たわぶれこと書きたるとて、一軸を給ひぬ」と、祖本は巻子本であったこと、松平定信の周辺で書写されていったことをうかがわせる。立教本については詞書に大きな異同はないが、多くの諸本が序文とする文が、跋文として記される。絵については、人物描写はやや簡略であるが、部屋の様子も描かれるなど背景まで描き込まれており、国会B本に近しい。

また巻子本を冊子本へ、その冊子本をさらに巻子本に転写する過程で、横長の構図が縦長に改編されたり、それを切り離して横長に描き戻したりなど、構図にやや不自然さが見られる絵巻もある中で、立教本は全十一図がほぼ同寸の料紙に描かれ、構図にも無理がないなど、祖本に近しい伝本であると推測される。

心内描写の絵画化の方法に注目すると、絵画化された「心」は吹き出しの中に描かれ、多く狐、天狗の姿を取っている。また夢や心内表現について、吹き出しは胸から出るように描かれることが多い中で、本作では頭部から出るように描かれているのも特徴的で、「心」の所在がどこにあると捉えるか、意識の変化を見ることができる。

なお、『平家物語』に題材を取ったとみられる妓王と仏御前の場面は、明暦二年（一六五七）版本、延宝五年（一六七七）版本の同場面と構図が近しく、これらを参考にして描かれたと考えられる。

Ⅳ　諸本

絵巻

国立国会図書館A『こころの草紙』（一軸）

国文学研究資料館『楽翁君心草紙』（一軸、国文M）

東洋文庫『こころ双紙』（一軸、外題「こころ双紙」、内題「心双紙」、国文M）

桑名市博物館秋山文庫『古々呂双紙』（一軸、国文M）

神宮文庫『古々呂そうし』（一軸、国文M）

立教大学『心の双紙　全』（一軸）

絵入り写本

国立国会図書館B『古々呂の草紙』（一冊）

岩瀬文庫『古々呂草紙』（一冊）

越国文庫『故々路草紙』（一冊）

茨城県立歴史館『こころの草紙』（一冊、印記「高麗蔵」）

福井県立図書館松平文庫『こころ草紙』（一冊、国文M）

刊本

新潟大学付属図書館佐野文庫『こゝろ草紙』（一冊）

Ⅴ　翻刻（画中詞の翻刻で人名を記した（　）は担当者による）

月さやかなるよる人々打つとひて

酒のみけるか管弦は風流のうつは

ものなりとて其道の深さ浅さをも

しらす吾こそとふえ吹出すもあり琴
なと引き世渡る者只人にこのまれむ
多く賜へてんとの心をかきならすも
ありことのしれる人の前もはゝからすかくは
歌よみたり詩作りたるなとゝ我はかほに
云のゝしるもありまた一きは高き心にて
月は世のかたみなりむかしの人のみし影と
おもへは恋しうこそあなれともの静に
云出したる昔人したふかくはしさの名のみ
にしてなす事みな今の世の拙きに
何をもていにしへ人したふにや

したはるるむかし人
おもふらむも
はつかし

（第一図）画中詞
（僧）えんなる調をたくみに／うたひかきならせと／心のこゑは
たからほしとや／聞こえなむ
（児）□はやゝ／思ぬらん／いをやすく／こそ
（琵琶の男）風流のかたち／なはわらはなん／ゑんはてたらは／
男舞をこそ／まねき侍らめ
（笛の男）折からなれは／秋風楽ふきはてて／□□楽や／吹まし

（第二図）画中詞
（文書く男）みえねはおそるゝ／事もなし／
こよひは文／かいてん月の賦にや／しるらん／賦も
六朝の／風そおもしろ／からん
（月見る男）月とみ初し昔人こそ／こひしけれ今の世に／かゝる
ま（ほ）しき人こそ／ありかたけれ

河におちいるものは少なけれど溝
なとにはあやまりおちいるものそ多き
鴆の毒なとみつからのみて毒にあたる
ものはあらねと多食して食傷霍乱
し又脾胃損して死に至るものそ多
かめるさらは心のやすき所よりそ終に

其害を得はへるものにこそものゝ道
よく弁へし人さえもある者は敵の計
にもおちいらされと女をみてはいとひき、
みならて心ゆるし侍る女も男たふら
かして害せむとおもふこゝろはなけれと
只寵得はへらむ寵奪れしとも心と
して朝な夕な云事なす事此ほか
ならす終に心ゆるし侍るものに心せす
おもふことのおもひ入たれはしらす〳〵して
こころうははれ侍るよしやこは我をたふら
かすとてさとる事もあれとも寵奪れ
しの心よりやさしくもかくなすそなとて
いたくとかめむと心ゆるすそ心うしなふ
初まりなる。鵲も其年の水をしるとて
洪水のあるなしをよくさとり侍るとり
なれは水出んとおもふとしにはひきく
枝に巣くひ侍るいかにとなれは我ほと
水知るものあらしことしの水なけれは高き
枝にすくふとかの国のかふとにもあなれ
されはいかに我をたふらかしてむと思ふに
そいととちかつくるともとをさくるこゝろは
あらしかの玄宗のかしこさも楊氏の

女にいつか心とられて中原の乱るゝも
しらす馬くはいの露の軽かろきも
にこれるこころにはおもくおもひ
けるこそあさまし
けれ

（第三図）画中詞

（楊貴妃）かく劔もて心をさきてみはへらは／寵もとむるの術み
なあたり侍りて／つゐに心をもとられに／けり
狐媚いつか／心に剣は／ありけり

（玄宗）笛竹のよゝなかく／かはらぬうきなや／ののしらむ

秦の趙高二世皇帝の寵を得て
終にみかとのこゝろをまとはしけり
世のみたれ行事も耳にいらす
かしこき人もめにつかす
つゐに
ほろひて
けるとそ

（第四図）画中詞

（胡亥）かく心をわかまゝに／とられてはいかなるへき／心もな
くなけく／こゝろもとられに／けり

（趙高）かく耳目おほはれ／なは我心にもくるしく／おもふへき
か日をおひ／月を追ひいつかその／来りしも／しらす心
の耳目おほへは／はしめ見聞し事もわすれて／年久しく
失明したる者後には／常と心得てくるしからぬ／はから
ひにこそ

只僧てふものは何のわさもなく人に
得て物くひ得てなき家宝も四民の
うちには立ちこえてしかもみな人に得
侍るにこそいと、罪はおもかるへきさるに
今の世道徳有はさら也常さまの
僧はよきをすゝめ悪しきをいましむる
天堂地獄の空ことをたにもいはす宿
業なと、と云事いひて執着心をはらさん
にもあらす只宝得て富きはめよき
衣きにしき身にまとひ輿に乗り先を
はらはせ塵けたて、高ふる事を好み
侍る堂塔の寄進をはかれはその中にての
かしこきなり仏の名となへす、つまくり
たる姿ならぬ心もちて聊も道徳
戒律の沙汰にも及はす衆生済度の
事は露もこゝろに置き侍らさる少なからし
仏てふものみ侍らはいかゝおもふらむその
徒ことはいかて云へき

（第五図）画中詞

（僧①）かの人はいかゝいひて／多くとらん此人には／この説法
してこそ／おほくえ侍らむ世の事にうとき様し□に／う
ときさま、□□□□に／よりてさま〳〵にたふらかし
て／世をわたるこそ俗人も／おとりてあるへけれ

（僧②）かく経は／よめとも／仏の耳には／いりぬらん／もし心
あり／口あらは／いかに物わすれもすか（た）は／貴み
つ、かく□□の／事をいふにや多くの／言を悟る経はひ
とつも／よみ侍らさるにや／といふらんかし

（僧③）かいまみし人のまうてに／けさ来りしこそ忘られね／い
つか又来へきいかに打つけて／いはなん思ひの程〳〵を
／す、にてかそへつ、

頼とも卿志をいやありけむ義経の
勲功をうちすてゝめしとらへむとそ
したまひけるよし経身の置きところ
なく落行たまふ所あたけのの関にて
関守あやしみとかめけるを弁慶
義経に似たるのにくさよと杖もて
うちけるその忠貞に感動
して関守
関をそ通
しける

（第六図）画中詞なし

くすしは人を救ふものにして万こころ
すなおなるへし欲あれは心くらしいかて
病をしりえむ医学にのみふけり
しものは人のしらさる薬などこのみ
用ひかの書を試み侍らむとせちに
おもふもあり名聞をのみもはらとし其
ほと〳〵心にあふやうにもてなし治療は
よそにして世渡る事をせちにするも
ありまたは傷寒に病の薬もて病の
やまひをしゐていやさむとして生死は
いしのしらぬ事と心得侍るもあり又は
脈もしらす論説もしらす病をも
しらてただ知り顔にもてなし名をうりて
わか非しるも無けれは高云して人を
そしりて我をよしとおもへはいつもその
拙をまもりて上達せす病の動く
毎におとろきあはてゝ只偶中の
幸をもとむるそ胆いと小にこころいと
大なるくすしにしてこれも右こしに
のりてたかき門出いる事をのみ
こころとするいかなる
仁術とは

いふへき

（第七図）画中詞

（薬師①）この薬姜束々水製して／すすめたまへ

（薬師②）此やまひいやしたらは賜／いくはくも得侍らむ是まての／治療たかひたれはこそかくは有けれ／いとかしこくわたらせ給へは何となう／心を□したまふ思ひ脾を破るてふ／事にこそ此病のはしめなれ薬調を／し侍らは忽いえたまふへし返す〳〵も／つゝなき医の薬用ひたまひける／こそ勿体なけれ

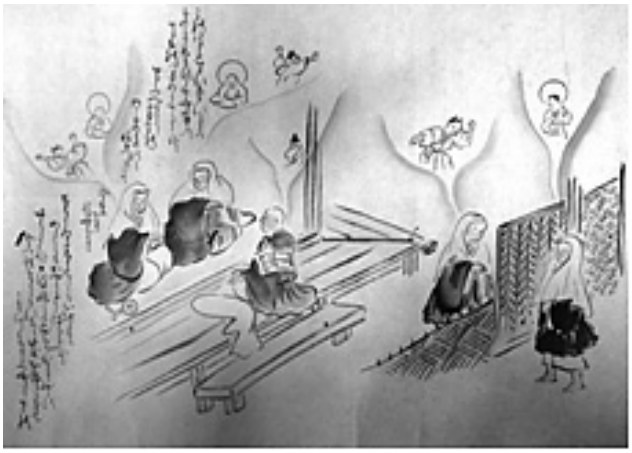
（患者）思なる人のやめるは／心も気も神もみな／ひたすらに／やまひとひとつに／なり侍れは／病の外に□ちに／あらはるゝものなし

（女）此薬調をして名を得財を／得まほしさま〳〵のこといひ／なし侍る／やんことなき人こそ□に／人□なれは終にたふらかされ／たまふみつからの拙きもわらふへき／ほとにおもふを

入道相国仏御前を寵して妓王に
つらくあたりしかは妓王よを恨みつゝ
さかのおく山に引きこもりて尼と
なりけれは妹妓女はゝ刀自もともに
あまとなりける仏は世の常なきを
観してかの館をまきれ出尼と成て
妓王か庵りに来りて其よし語しかは
日ころのうらみつる心もはれて
ともに後世をやらむねかひけるとそ

（第八図）画中詞

（妓王）これほとにおもひ立給ひけるとは／□のよもしらすうき世の中の／さかなれは身のうきとてそ／おもふへきにともすれは／わこせの事のみ恨めしくて／今生をも後世をも／なましゐにしそんしたる心地にて／ありけるかやうにさまをかへて／おはしたれは日頃の恨みは露ちりほとも残らす／今は後生うたかひなし此度本懐を遂ん／こそ何よりも又嬉しけれ



茶たつることはいと尊たうとき道と心得て客まねきつゝ主人いかにもしりかほに出てもてなすこゝろの　にてもあれ此かけものは虚堂の墨跡おほくのこかね出してかひたりこの釜はあし屋にて何千貫の折紙こそあなれ

此茶碗は　出なれとよにあるべしとも覚えすことに我は禅味しれは名たたる宗匠もなとて及はむひさくかくもちて水かくくみて釜へいるるに松風のふきたえてしつかなるごときはこゝろの妙とやいふへきと心におもふ

客もそれ〳〵の心に有けり

（第九図）画中詞

（茶人）かくせし時心に／一物なし茶の／ほいしるものは／たれにか侍らん

（客①）いとたいくつなる物かな神の産の／酒のみへてこは高に／いひのゝしりたれと／茶室に入りてはいかにも口ひらくまし／□□□ものなれは常事／あふ友なれと／いと満意にこそ

（客②）茶といひ□といひねやま／ともいふへしかゝる／ものこ

そえまほしけれ／されとかふへき／財はなし／かへす
〳〵も／うら山／しき
（客の従者）主人こそいとほこれるさまなれ／かくついやしてう
つはものに／しうしなふいかて禅の／本意なるへき
いかて茶の／本意なるへき

神は一すちの誠にしてこはあめ
つち第一となり其まことをもて此人と
なれはひとつの誠感応して神霊
いちしるくてらさせたまふにそありける
さるに神仏はいさめたまふ事もいましめ
たまふこともなけれは愚なる心より何の
恐もなく心のたけいひてとき侍るなり
すかたいと心うけにきてはらひかしこみ
〳〵と口にはいへと心の祈き事いとけし
かる事なむおおかる麦まく者は
雨を願ひ稲かる人の嘆くをもかへりみす
いと愚かに成もて行はこえも用ひす
稲草もとらすあそひくらしてよくみの
るを神の御恵よとねかふたくひそ多
かるいとなけくへき事にそ神には
おもひたまふらむ
神はおもひ給ふ
なり

（第十図）画中詞
（神）此事かなひたらはくもつをせん此事□事／足ならは灯とも
しなんといはん心ある人にたいして／此事かなひ侍らは宝
とらせんとはいかてうちつるに／いふへき何もしらすと思

ひてかくはいふにやさらは又／たうとむ心も俗ならん此鏡
にうつれるをみせま／ほしさそなはちなんかし

（参詣の女）目にまされる者のなくさにさま〳〵とにくみ／いひ
なしつらくあたり侍るを様もわかかたを／あたとお
もひ給ひてにくきひとを憐れみ給ふ／いとくやし只
此上は神の御力もて我に／まされる人をはみなとり
ころし給へ／かしあなかしこ〳〵

（幣持つ男）はらひことたからそふことなし内外／清浄とはいへ
とさま〳〵の□ひを／おもひつつけてとりけたもの
に／をとりし心もちて／あら高く言ことは／長久安
全とそ云

（扇持つ男）おろかなるものゝ満足と／おもふ時はいかなる時に
か／あらむかく欺にそみとられて／ことはりしらぬ
は／心のめしゐたるにそ／あんなれ
常に酒のめはたらす常に宝費をは／宝ともし年月か
くあゆみをはらひ侍るに／いかにして貧しくはし給
ふにや／はやく富をえさせて満足のおもひを／みせ
たまへかし

かゝる事はなさしと捨てかたくくり
かへしおもへは猶すてかたし多くの人
かゝる事なすは我とてもたゝに一たひのみ
し侍ることあへてとかむへきにもあらしと
おもへと又何となう心くるしいや〳〵かゝる

事はしはへるましかそいろの庭のをしへも
耳にとまり侍るものをとおもひかへすもあり
とにかくおもひ捨かたく一馳の道とやらむ
いふ事もあなれ古のかしこき人もこの人
にはかゝるつたなきありけりかのひとには
かうやうなるあしき事も有りけり其賢き
人にさへ有りけるものを余りに心つよく
慎み守らは病をやえ侍らん思にふかうの
としなり多きこそ悪しけれたたに
一たひの事いかてあしからむと
ことはりつけてわか心斯き
はへるも
有けり

（第十一図）画中詞

（男①）古のかしこきたとひ事のあしき／事ありとていかてそれ
をもて／学むへき王城をこそ学ふへけれ／いとゝ疵にな
らんねさめにも只心地／よからむ事そ

（男②）おもひ残るもくるし／又なきもくるし／いかかはせん

（男③）ことはり付て良心に／かちたる時は聊心地／よけれと
こゝろくるしき／事こそおほけれ

色うるはしく形みやひに衣あさやか
なれははちてふ心は誰かあらむかの
一指のゝひさるさへとをつ国のくすし
たのみ侍るは一指の人にことなるを歎く
にそ有けるこゝろもしあらはいて
たらはかくあらむかくるゝはあらはるゝ

よりもいちしるしきものなれとをろかなる
心からしらて過侍るにこそあなれ
楽翁日ころ我うへ人のうへにもこの心
あらはれ出たらはとやあらむ彼こころ
あらはれ出たらはかくやあらむと清閑の
一楽におもひめくらしけるかことし
春の末つかた時疫行はれて翁も疫に
そみけるにそかたはらに居ける養渓に
筆取らせて清閑のたはむれに心の
あらはるゝさまを画かせ自らもかき
してこころ双紙となむ

名つけはへりぬ

享和二年三月　楽翁定信

Ⅵ　参考文献

松平定光「石門心学と諸侯との交渉―中澤道二を中心として」（『心学』7、一九四二年）
『日本随筆大成』1―7（吉川弘文館、一九九三年）

（担当・塩川和広）

14・百鬼夜行絵巻

Ⅰ　書誌

【作品名】　百鬼夜行絵巻
【請求記号】　NDC：721／H 99
【形態・数量】　絵巻・一軸
【外題】　なし（題箋のみ）
【内題】　なし
【奥書・識語】　なし
【表紙・横寸法】　紺地、鱗文様、二十九・五糎（原表紙）
【見返し】　金泥・無紋
【料紙】　斐紙
【寸法】　縦三十八・七×全長八七〇・五糎
【用字】　絵のみ
【絵】　濃彩
【備考】　詞書なし。

Ⅱ　概要

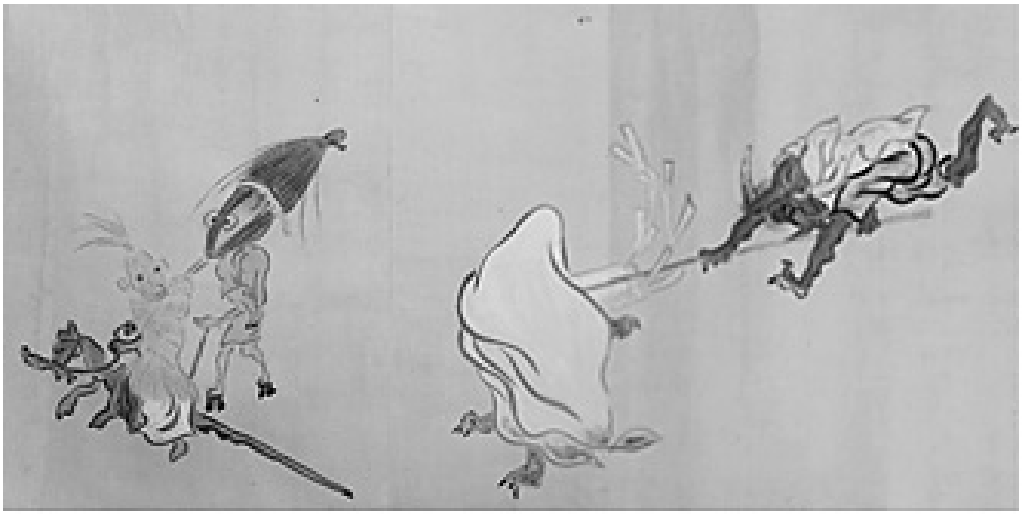
道具が妖怪化し、行列をなす。真珠庵本同様に青鬼が走り出す場面から始まるが、その後には靴の沓、払子、小袿が続き、配置には異同が大きい。大きな火の玉（夜明けの太陽、あるいは、陀羅尼の火焔）が現れ、妖怪たちが逃げまどう場面で閉じられる。

Ⅲ　特色

『百鬼夜行絵巻』の伝本は多数ある。小松和彦氏による基準（『百鬼夜行絵巻の謎』二〇〇八年）に従えば、立教本は真珠庵本系統に分類できる。立教本に登場する妖怪の種類は、現存最古の伝本である真珠庵本と同様。ただし、順序は大きく異なっており、①青鬼→②仏具→③女房→④楽器→⑤大幣の妖怪、白布、傘、草履→⑥赤鬼→⑦唐櫃→⑧台所道具→⑨黒布、紺布→⑩赤い妖怪とそれを退治しようとする妖怪たち→⑪小鈴を持った妖怪、釜、針鼠→⑫葛籠→⑬逃げ惑う妖怪、の順番で妖怪が描かれている。

立教本では妖怪の登場順序に独自の連想が見られる。例として、真珠庵本で、扇、如意、大布被り、紺布被り、傘、草履の順で描かれる部分を見てみたい。この順序で描かれることによって真珠庵本は、「扇と如意が大布被りを踏みつけようと追いかける、逃げる大布被りの前に立ちはだかる紺布被りは大布被りを威嚇するかのようなポーズを取る。そうした大騒ぎを何事かと振り返って見る傘と草履」という筋書きになっている。真珠庵本系統の他伝本でも、概ね真珠庵本と同じ順序で描いて、「大布被り達の大騒ぎと、それを見る草履達」の筋書きを引き継いでいる。ところが立教本では、妖怪の登場順は、扇、如意、その後に空を仰ぐ青鬼などの妖怪が続き、離れたところに傘と草履が登場する。それから唐櫃に足をかける赤鬼などの妖怪が続いて、また離れて大布被りと紺布被りが登場する。真珠庵本と同じ筋書きを立教本に見出すことはできないが、代わりに新たな物語が生まれている。立教本で傘と草履が振り返る視線の先には、大幣を振る妖怪が白布被りを打つ様子が描かれている。真珠庵本ではこの二体の妖怪は、隣り合ってはいるが、接してはいない。つまり、「白布被りたちの騒ぎを振り返って見る草履たち」は、立教本に独自の筋書きなのだと言えよう。

他にも、真珠庵本では銅拍子は、鉦、鎮子、経文といった仏具の一群を先導するように描かれているが、立教本では離れている。鰐口の妖怪を鳥兜の前に配したのは、地を這う鰐口と空を行く鳥兜の、対比のおもしろさを狙ったものだろうか。立教本をつぶさに検討することで、さらに独自の連想や工夫を読み取ることができよう。



絵巻の寸法は比較的大型で、色彩は鮮やか。妖怪の服装の色模様が細かいことが特徴的で、例えば空を仰ぐ青鬼は、唐草模様の着物を着ていることが確認できる。

Ⅳ　諸本

※国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館・国際日本文化研究センター編『百鬼夜行の世界　人間文化研究機構連携展示』（角川学芸出版、二〇〇九年）を「人文研」と略記した。

Ⅰ類（単独模本）

A型①真珠庵系統（詞書なし）

大徳寺真珠庵『百鬼夜行絵巻』（一軸、室町時代、『日本絵巻大成』）

伊藤光徳『百鬼夜行絵巻』（一軸、江戸時代前期、小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』）

国立国会図書館『百鬼夜行絵巻』（一軸、江戸時代中期、人文研）

京都府立総合資料館『百鬼夜行図』（一軸、江戸時代後期、総合資料館ＤＢ）

国際日本文化研究センター『百鬼夜行絵巻』（一軸、江戸時代、日文研ＤＢ）

国立歴史民俗博物館『百鬼夜行絵巻』（一軸、江戸時代、人文研）

早稲田大学『百鬼夜行』（一軸、早大古典籍総合ＤＢ）

国際日本文化研究センター『百鬼夜行之図』（一軸、日文研ＤＢ）

大阪市立美術館『百鬼夜行絵巻』（一軸）

立教大学『百鬼夜行絵巻』（一軸）
小峯和明『百鬼夜行絵巻』（一軸）
湯本豪一『百鬼夜行絵巻』
高台寺『百鬼夜行図』
群馬大学『百鬼夜行絵巻』（粉本、新田文庫）
不明『百鬼夜行絵巻』（伝土佐経隆筆、『怪談名作集』巻末付録）
アイルランド・チェスタービーティー図書館『百鬼夜行絵巻』（一軸）
フランス・ギメ美術館『百鬼夜行絵巻』（英一蝶筆）
ポーランド・日本美術技術センターマンガ館『百鬼夜行』
財団法人大倉集古館『百鬼夜行図』（六曲一双、江戸時代後期、人文研）
アメリカ・ボストン美術館『百鬼夜行図』（掛軸、狩野探水筆）
A型②真珠庵本系統（詞書あり）
A型③真珠庵本系統（化物尽しの図柄混入）
B型　日文研本系統
C型　京都市芸大本系統
D型　兵庫県歴博本系統
Ⅱ類（Ⅰ類系の二本以上の折衷形の模本）
BC型（日文研本＋京都市立芸大本＋α）
AB型（真珠庵本＋日文研本）系統
AC型（真珠庵本＋京都市芸大本）系統
AD型（真珠庵本＋兵庫県立歴史博物館本）系統

Ⅴ　翻刻

なし。

Ⅵ　参考文献

小峯和明「百鬼夜行の声―スペンサー本『百鬼夜行絵巻』から」（『説話の声』新曜社、二〇〇〇年）
湯本豪一『百鬼夜行絵巻　妖怪たちが騒ぎだす』（小学館、二〇〇五年）
田中貴子ほか『図説百鬼夜行絵巻をよむ』新装版（河出書房新社、二〇〇七年）
小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』（集英社新書ヴィジュアル版、集英社、二〇〇八年）
国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館・国際日本文化研究センター編『百鬼夜行の世界　人間文化研究機構連携展示』（角川学芸出版、二〇〇九年）
小松和彦監修「妖怪絵巻」（『別冊太陽日本のこころ』平凡社、二〇一〇年）

（担当・長谷川奈央）

15・年中行事絵巻　巻一

Ⅰ　書誌

【作品名】　年中行事絵巻
【請求記号】　NDC：721／N64
【形態・数量】　絵巻・一軸
【外題】　なし
【内題】　なし
【奥書・識語】　なし
【表紙・横寸法】　淡緑地、唐草花紋、二十三・六糎
【見返し】　なし
【料紙】　楮紙
【寸法】　縦四十四・五×全長一四五二・八糎
【用字】　絵のみ
【絵】　淡彩（一部白描）　全二十二図
【備考】　詞書なし。箱あり、箱題簽「年中行事絵巻　一巻」。

Ⅱ　概要

年の始めに天皇が太上天皇・皇太后の宮に行幸して拝賀する「朝勤行幸」の儀式を描く。紫宸殿より出御した天皇行幸の行列は承明門、建礼門を通って宮城東の待賢門の前の大宮大路を進む。大宮大路では先頭の騎馬の列は乱れ、行列を見物するために集まった牛車が暴走し、人々が逃げ惑う。行幸の行列は大勢の見物人の中、八条坊門のあたりで東に曲がって上皇の御所法住寺殿に到着し、天皇は上皇を拝された後、舞楽を御覧になる。

Ⅲ　特色

後白河院の下命によって作られた『年中行事絵巻』の原本は、近世初期ごろ焼失してしまい、現存する伝本は「住吉本」系統と「鷹司本」系統とに分けられる模本群である。立教本は朝勤行幸の巻を有する「住吉本」系統に属す。「住吉本」朝勤行幸の巻は、本来、臨時客と中宮大饗の後に天皇行幸が続く七段とされるが、現存「住吉本」巻一には、天皇出御、先陣整備、大路渡御、院御所着、舞楽御覧の五段だけが描かれ、臨時客と大饗は巻六に配置されている。「住吉本」系統の模本の中、「陽明文庫Ⅰ本」「芸大Ⅰ本」「仙台博本」などは、「住吉本」の錯簡を直し、朝勤行幸の巻に臨時客と中宮大饗を入れて七段を描いている。これら模本の中でも「芸大Ⅰ本」「仙台博本」は彩色と白描の部分がほぼ一致しており、同じ模本をもとに写した可能性が考えられる。

立教本は現存「住吉本」巻一と同じく五段で構成されている。立教本と同じく臨時客と中宮大饗がない「京大文学本」は朝勤行幸を巻一と巻二に分けて五段に描いている。しかし、「京大文学本」には、所々色が塗られてはいるが、白描の部分が多く、背景の樹木や草などが省略、あるいは簡略化され描かれているなど当本と異なる点が多い。当本は「住吉本」と人物の動きや表情、装束の文様など

の細かい描写は一致していないが、白描の部分が少なく、殆どの場面に彩色が施されている点では、他の模本に比べ「住吉本」に最も近いと考えられる。また、彩色において、背景の雲を青く着色し、鮮明に描いているのも他の模本にはみられない特徴である。

【天皇出御の場面】

【先陣整備の場面】

【大路渡御】

【院御所着】

【舞楽御覧】

Ⅳ　諸本

住吉家本系統模写本

住吉家旧蔵田中親美（十六巻、寛文二年（一六六二）、住吉如慶・具慶写）

京都大学文学部（十三巻、天明九年（一七八九）圓山氏本模写）

京都大学（「朝勤行幸」二巻、高井豊泉写）

東京芸術大学美術館Ⅰ（十五巻、文化八年（一八一〇）、住吉広行写）

東京芸術大学美術館Ⅱ（「朝勤行幸」二巻、土屋秀禾写）

東京国立博物館Ⅰ（四八巻、文化九年（一八一一））

東京国立博物館Ⅱ（四八巻、文化九年（一八一一）、狩野養信写）

陽明文庫Ⅰ（七巻）

陽明文庫Ⅱ（十一巻、天保十一年（一八四〇）、原在明写）

仙台市博物館（十八巻）

松岡家旧蔵宮内庁書陵部（二十五巻）

（以下略）

鷹司家本系統模写本

鷹司家旧蔵宮内庁書陵部（二十巻、原在泉写）

Ⅴ　翻刻

なし。

Ⅵ　参考文献

相馬万里子「書陵部蔵『年中行事絵巻』諸本について」（『書陵部紀要』27、一九七五年）
加藤富一「『年中行事絵巻』の朝勤行幸について」（『解釈』26―11、一九八〇年一一月）
福山敏男「年中行事絵巻について」（『新修日本絵巻物全集』24所収、角川書店、一九八七年）
国賀由美子「『年中行事絵巻』朝勤行幸巻の制作に関する一詩論」（『古代文化』40―1、一九八八年一月）
秋山光和「朝覲行幸之図」解説（『皇室の至宝2　御物　絵画Ⅱ』所収、毎日新聞社、一九九一年）
永井久美子「十二世紀の都市描写『清明上河図』と『年中行事絵巻』を中心に」（『比較文学』46、二〇〇四年三月）
佐藤安弘「都の事件・「年中行事絵巻」「伴大納言絵巻」・「病草子」」（『講座日本美術史』6、二〇〇五年四月）
下原美保「江戸時代初期における王朝文化復興と住吉派興隆との関係について―後水尾院と住吉如慶を中心に―」（『鹿児島大学教育学部研究紀要』人文・社会科学編58、二〇〇七年三月）

（担当・金英順）

16・扇の草紙屏風

Ⅰ　書誌

【作品名】　扇面貼交屏風
【請求記号】　NDC：911.15／O25
【形態・数量】　屏風・六曲一双
【外題】　なし
【内題】　なし
【奥書・識語】　なし
【表紙・横寸法】　なし
【見返し】　なし
【料紙】　斐紙
【寸法】　縦三十七・一×横七十六・二糎
【用字】　漢字平仮名混じり
【絵】　濃彩　全十二図（右隻・六図、左隻・六図）
【備考】　桐箱あり（縦四十・二×横十二・〇×高十五・五糎）。

Ⅱ　概要

本作品は、『扇の草子』と多くの接点を有する資料である。雛飾り用と思しき小型の屏風で、全体に金切箔がまかれた地に、扇の形をした扇絵と丸みを帯びた団扇絵という二種類の《扇絵》が描かれ、その周囲に歌が散らし書きされている。この《扇絵》と歌とが組み合わされた様式は『扇の草子』と共通する。雛壇が普及するのは元

禄期（一六八八～一七〇四）とされ、また絵様や筆致などから見ても、制作年代は元禄期か、それよりあまり下らないと推測される。なお、『扇の草子』については、31・扇の草子断簡を参照されたい。

Ⅲ　特色

本作品は、小型の扇面屏風といった形態を有する。ただし、歌が記された扇面屏風は極めて珍しく、むしろ扇絵と歌からなる『扇の草子』との親和性が高い。屏風に記された歌（以下、仮に収載歌と呼ぶ）にも、『扇の草子』との共通点が見出せる。しかしながら、両者には大きな相違点がある。本作品は、歌の優劣を競う歌合のごとき趣向がとられ、歌題までもが記されているのである。それに伴い、歌題に記された二つの事項を、それぞれ一扇ずつ扇絵に描く。つまり、一扇一首の組み合わせから成る『扇の草子』とは異なり、歌題、それを絵画化した団扇絵と扇絵の二つの《扇絵》、勝歌一首を一組として、それらが六組描かれているのである。

また、この「歌合」は、それ自体特異である。二つの事柄の優劣を問う歌題が記され、そのうち優れていると思われる方を和歌にして答えるという、一種のナゾナゾになっているのである。類似作の書名に「問答」「あらそひ」と冠されたものが多いので、ここでは仮に「歌合」ではなく「歌問答」と呼んでおきたい。

本作品の収載歌数は六首である。その三首ずつを、『四十二の物あらそひ』と『小町業平歌問答』とに見出すことができる。ともに歌問答の作品で、お伽草子に分類されている。前者には、十七世紀前後に制作された多数の諸本が伝存する。また、近世初期にはパロディと言うべき遊女評判記『四十二のみめあらそひ』も作られた。これらにより、十七世紀前後にかなり享受されていたことが窺える。

後者については早く、市古貞次『中世小説の研究』（東京大学出版、一九五五年）に、「「小町業平歌問答」（在原業平小野小町物争ひ三十二首）。（中略）これまた成立年代が明らかでないが、後述「四十二の物あらそひ」などと同じ系列に属する戯作で、やはり中世であろうか」と指摘されている。近年、歌問答という形式上の共通点と、歌題に類似するものが見出せることなどを根拠に、「『四十二の物あらそひ』のパロディとして成立し」たとの指摘もなされている（吉海論文）。

さて、『扇の草子』にも『四十二の物あらそひ』から多数の歌を採録した伝本がある。例えば、日本民芸館本がそれに当たる。その他の伝本にも採られているので、『扇の草子』と歌問答とが近い関係にあったことや、享受者層の近さなどが窺える。近時某家で、『扇の草子』と『四十二の物あらそひ』とが貼られた屏風を拝見した。いまだ精査していないが、これも両者の近さを傍証する資料となるかもしれない。なお、某家蔵本については近々報告する予定である。

今後の課題は、この「近さ」を多角的に検討することであろう。それにより、『扇の草子』と本作品および歌問答の関係性や、十七世紀前後における専門歌人とは別の、いわば素人たちによる歌の享受のありようなどの解明が期待される。

図1

図2

図3

図4

Ⅳ　諸本

17・扇の草子断簡を参照。

Ⅴ　翻刻

【凡例】

一、歌題に頭書したのは、私に付した整理番号である。

二、歌の左に、典拠と思われる歌問答作品の書名を記した。なお『歌品問答』は『小町業平歌問答』の異本である。

1、桜狩と野遊はいづれか
さくらがり心もまよふみ山より　千ぐさの花にまじる野あそび
『歌品問答』

2、薫の香りと琴の音は何れか
空だきは匂ひゆかしきものながら　猶ことのねにひく心かな
『歌品問答』

3、月の夜と雪のあしたはいづれぞや
ふる雪はつもらでかげも有明の　月ぞくまなき冬の山ざと
『四十二の物あらそひ』

4、手書くと哥詠むはいづれぞや
浜千鳥あとだにあらば和哥のうらに　まよはぬ人の心ならばや
『四十二の物あらそひ』

5、手鞠と貝覆はいづれか
くろかみのみだれておつるまりよりも　かいにかゝれる袖ぞなつかし
『四十二の物あらそひ』

6、きぬぎぬの鳥の声と待つ宵の鐘の音はいづれぞや
きぬぎぬの鳥なくこゑもうけれども　なをはかなきは待つよひのかね
『歌品問答』

Ⅵ　参考文献

周防朋子「お伽草子『四十二のものあらそひ』立教大学図書館所蔵「扇の草子屏風」との関わり」（『奈良絵本・絵巻研究』8、二〇一〇年九月）
吉海直人「『小町業平歌問答』続考―新出『歌品問答』の紹介―」（『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』11、二〇一一年三月）
安原眞琴「立教大学図書館蔵扇の草紙屏風」（立教大学図書館二〇〇八年四月展示解説、同図書館ＨＰ）
安原眞琴「『四十二のみめ諍ひ』翻刻・解題」（江戸吉原刊行会編『江戸吉原叢刊　1』八木書店、二〇一〇年）

※『扇の草子』の参考文献については、17・扇の草子断簡を参照。

（担当・安原眞琴）

17・扇の草子断簡／［尾張大納言画］

Ⅰ　書誌

【作品名】　扇の草子断簡

【請求記号】　NDC：911.15／TO36

【形態・数量】　軸装・一軸

【外題】　尾張大納言掾　自画讃（軸装背面の絵巻の外題に相当する箇所に直書・墨書）

【内題】　なし

【奥書・識語】　なし

【表紙・横寸法】　なし

【見返し】　なし

【料紙】　斐紙

【寸法】　縦一一二・五×横三十四・五糎（総丈）

【用字】　漢字平仮名混じり

【絵】　淡彩、一葉の上中下に扇絵三扇を配す。

【備考】　桐箱あり（後補）。伝来を記した料紙と元箱の側面に貼られていたと思われる小紙片付載。

Ⅱ　概要

立教本は、『扇の草子』の断簡一葉を軸装したものである。『扇の草子』は、扇絵と歌の組み合わせからなる絵入り写本や版本などの総称である。成立事情には不明な点も多いが、十六世紀末頃から、実際の扇に描かれた絵を見て歌を当てる、ナゾナゾに似た知的な遊びが盛んに行われるようになり、そこから派生した文芸と推定される。現在までに五十本以上の伝本が確認されており、いまだ巷間などより新出本が発見され続けている。

収載されている歌と扇絵には、次のような特徴がある。創作歌ではなく既存の歌が収載されているようで、『古今集』や『新古今集』といった勅撰集所収歌が多いが、連歌や俳諧、あるいは今のところ謡曲や狂言にしか見出せない出典未詳歌も少なからず含まれている。扇絵には、歌に詠まれた単語を分節化し絵画化することで、その単語をさとらせようとする、いわゆる判じ絵が見られるなど、不可思議なものが多い。例えば、「傘」と「鷺」の絵で「かささぎ」を表し、「三つの山」と「傘」の絵で「三笠山」を表したものなどがある。『扇の草子』には、これらの歌と扇絵が、現段階では規則性の見出せないアトランダムな配列で収められている。

伝本の特徴は、それぞれに書承関係が認めにくいことである。収載された歌（扇絵）の出入りが激しく、配列順も大きく異なるからである。画風も、土佐派や狩野派を思わせる上質なものから、素人めいた極めて稚拙なものまである。奈良絵本の画風と重なる面もあるが、いまだ研究史も乏しく、不明な点も多く、遊びとの関連も想定される『扇の草子』の場合、何らかの文芸ジャンルに当てはめるよりも、まずは一本ずつ丁寧に調査することが重要だろう。

Ⅲ　特色

『扇の草子』は、完本で現存することはむしろ稀で、改装された端本や断簡などとして伝存する。立教本も新出の断簡である。料紙の寸法は、縦三十三・三×横二十三・七糎。料紙下方左右の端に手垢の跡が見られるので、元大型の冊子本であったと推定される。

多数の断簡が残るも、ツレはほとんどない。ただし、立教本には酷似する断簡がある。ノートルダム清心女子大学所蔵断簡がそれである。表装は異なるものの、こちらも軸装されている。原本未調査ながら、扇絵の絵様、配置、彩色、金銀の用い方、筆跡等が酷似するので、ツレの可能性が極めて高い。この断簡については、別の機会にあらためて報告したい。

以下に、特記事項三点を記す。

一、立教本の扇絵は、『扇の草子』のその他の伝本に描かれた、土佐派、狩野派、奈良絵本といった画風とは、趣を異にする。すなわち、対象をあっさりと、しかし丁寧に描き、鳥の子（雁皮紙）の地色を空間として活かしつつ、淡い絵の具がほどこされ、且つすやり霞や絵雲には金と銀とがこれも淡く彩色される。一瞥、文人画を思わせるものがある。また、周囲に散らし書きされた筆跡も、扇絵にふさわしく流麗である。

二、伝来の記された料紙や元箱の側面に貼られていたと思しい紙片が残存し、それらと外題とに、尾張大納言光友公の自画讃とある。伝承筆者を近世の武家とするのも現段階では立教本のみで、その他の極め札を有する伝本の伝承筆者は中世の公家や勾当内侍とされる。なお、尾張大納言光友とは、徳川光友（一六二五～一七〇〇）のことである。名古屋藩六十一万九千五百石徳川家第二代当主である。従二位権大納言を拝したのは元禄三年（一六九〇）五月なので、上記付載資料等の内容を信じれば、立教本は元禄三年以後、同十三年（一七〇〇）の没年以前に制作されたと考えられようか。光友は、武芸のほか、書画、管弦、茶道などに通じていたとされる人物である。

三、『扇の草子』の所載歌は伝本ごとに異なるが、複数の伝本に重複する歌も散見する。しかしながら、立教本所載歌は、管見の伝本に収められた五百首以上の中には見いだせない。もっとも断簡なので、失われた部分に重複歌が含まれている可能性はある。実際にツレと推定されるノートルダム清心女子大学所蔵断簡の所載歌三首のうち一首は重複歌である。また、立教本の歌は三首とも『新編国歌大観』には探しえない。『扇の草子』所載歌には、各伝本の制作期には知られていたと思われるが、現在では典拠さえ探索できない伝承歌が少なくないので、このこと自体は珍しくない。ただ、ツレと推定される断簡も含めて、六首中五首と高い確率で独自歌が見いだせるのは、立教本の特異性を窺わせる。

最後に、伝来を記した料紙と、元箱側面に貼られていたと思しい紙片を、仮にそれぞれA、Bと整理記号を付して翻刻しておく。記載内容の検討は他日を期したい。

A（寸法　縦三十一・〇糎×横四十三・七糎）

附録

夫レ斯ノ一幅ハ者

尾州太守　　大納言尊公　自画

自讃ノ之聖筆ナリ也　画哥之」

躰裁（テイサイ）　唐ノ挫（トリヒシキ）ニ懐素ヲ一　厭（ヨス）（注1）ニ和ノ探幽ヲ一」

誠ニ和哥不シテレ花馥ク　筆端不」

レ龍走ル　不肖辱クモ角氏（カクシ）汲ミニ末流ヲ一」

然メ而継（ツグ）ニ石川他ヲ姓ヲ一　所ルレ謂渓山」

雖トモレ異（コトナリト）雲月是（コレ）同シ　愚親賜（タマフ）ニ此ノ」

一幅一　兢々（キヤウ）トシテ永ク傳ヘ子孫ニ一　頗シテ備ニ」

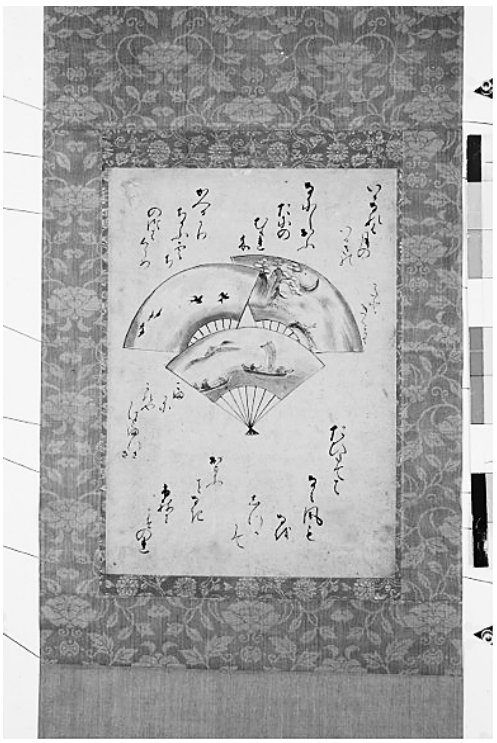
石川ノ之栄楽ニ（注2）一　爾云

B（寸法　縦三・六糎×横五・五糎）

い／尾張大納言／光友公／自画讃／竹田什

（注1）「厭」は、「犬」ではなく「丈」。

（注2）「楽」の異体字か。



Ⅳ　諸本

【凡例】

一、伝本が漸次増加しているため、あらためて伝本を整理する必要はあるが、ここでは旧稿の拙著『『扇の草子』の研究』参照の便も考えて、旧稿を基に列記した。

二、「二〇〇三年以前に管見に入った伝本」は、同年刊行の拙著に掲載した伝本である。頭書整理記号も同書に準じた。ただし、刊行後所蔵者（機関）の変更や所在不明本の所在が明らかになった伝本等があるので情報を更新した。なお、変更等のあった伝本は太字で表記した。

三、「二〇〇三年以後に管見に入った伝本」は、拙著刊行後に巷間より発見されるなどして管見に入った伝本である。整理番号を付して頭書し、当座、所載歌数の多い順に掲載した。

二〇〇三年以前に管見に入った伝本

《版本》

A（イ）東洋文庫岩崎文庫『あふきのそうし』（八〇扇八〇首）

A（ロ）国文学研究資料館『扇の草子』（四〇扇四〇首）

A（ハ）東洋文庫岩崎文庫『あふぎうたづくし』（八〇扇八〇首）

《写本》

A（ニ）ハーバード大学燕京図書館『あふき集』（八〇扇八〇首）

A（ホ）大阪青山歴史文学博物館『扇面集』（四〇扇四〇首）

B　天理大学附属天理図書館『扇流』（四七扇四八首）

C　プラハ国立美術館『奈良絵本（絵本和歌集）』（一二〇扇一二〇首）

D　個人蔵『扇の草紙』（一〇八扇一〇七首）

E　日本民芸館『奈良絵扇面歌画帖』（一〇三扇一〇三首）

F　根津美術館『扇面歌意画巻』（一〇〇扇一〇〇首）

G　慶應義塾大学図書館『扇の草紙　奈良絵本』（九〇扇九〇首）

H（イ）高津古文化会館『扇面草子貼交屏風』（三六扇三六首）

H（ロ）高津古文化会館『扇面草子貼交屏風』（三六扇三六首）

I　サントリー美術館『扇の絵づくし』（三〇扇三〇首）

J　国文学研究資料館『阿不幾集』（三〇扇三〇首）

K　天理大学附属天理図書館『奈良絵和歌』（四八扇四八首）

L　国文学研究資料館『奈良絵豆扇図面』（三〇扇）

《断簡類》

M　浄照坊蔵奈良絵本切（六扇六首）

N　加賀文庫（三扇三首）

O　徳川黎明会（二扇二首）

P　海のみえる杜美術館（一扇一首）

Q　個人蔵（三扇三首）

R　南園文庫（三扇三首）

S　石川透（三扇三首）

T　石川透『仁和寺覚道法親王和歌切』（二扇二首）

U　古筆手鑑『残花帖』所載（二扇二首、「臨川古典籍優品目録」二十八）

V　昭和五年大阪美術倶楽部入札目録掲載『千代女扇歌尽巻』（一二扇一二首、所在不明）

W　ハーバード大学美術館『扇流』絵巻（五一扇五一首）

X　「五六回阪急古書大会目録」掲載（三扇三首、所在不明）

Y　「思文閣墨蹟資料目録」二〇三号掲載『扇面絵入歌賛断簡』（二扇二首、所在不明）

Z　「思文閣古書資料目録」八五号掲載『古歌絵色紙一括』（二扇二首、所在不明）

cf1「柏林社書店　古書目録」一七号『奈良絵百人一首』（一扇一首、所在不明）

cf2「弘文荘待賈古書目録」一七号掲載『扇の草子』（七二扇七二首、所在不明）

補　五島美術館　大手鑑『筆陣毫戦』所載断簡（一扇一首）

二〇〇三年以後に管見に入った伝本

① 某家蔵『書画貼交六曲一双屏風』（一四四扇一四四首）

② 個人蔵絵巻（一〇二扇一〇二首）

③ 徳田和夫蔵一括断簡（六四扇六四首）

④ 家蔵屏風（三六扇三六首）

⑤ 国文学研究資料館蔵屏風（三六扇三六首）

⑥ 学習院女子大学図書館蔵一括断簡（二三扇二三首）

⑦ 立教大学池袋図書館『扇の草紙屏風』（六扇六首）

⑧ 和田琢磨蔵断簡（五扇五首）

⑨ 立教大学池袋図書館『扇の草子断簡［尾張大納言画］』（三扇三首）

⑩ ノートルダム清心女子大学蔵断簡（三扇三首）

⑪ 石川透蔵断簡（三扇三首）

⑫ 個人蔵伝後土御門院勾当内侍断簡（三扇三首）

⑬ 個人蔵「古筆手鑑」所載伝後柏原院卿内侍断簡（三扇二首）

⑭ 所在不明断簡（三扇三首、思文閣二〇一五年五月）

⑮ 個人蔵「古筆手鑑」所載伝後柏原院勾当内侍断簡（二扇二首）

⑯ 古筆手鑑『花月城』（ママ）所載断簡（二扇二首、所在不明）

⑰ 個人蔵伝連歌師心前断簡（一扇一首）

⑱ 石川透蔵断簡（一扇一首）

⑲ 東京国立博物館蔵手鑑『桃花水』所載断簡（一扇一首）

⑳ 和田琢磨蔵断簡（一扇一首）

㉑ 平成十五年ヤフーオークション断簡（一扇一首、所在不明）

Ⅴ　翻刻

【凡例】

一、料紙の右上、左上、下に配された扇絵の順に翻刻し、整理番号を付して頭書した。

1、なにしおふたにのむもれ木いかなれは　月のいるさのかたときくとも

2、かへるかりちかふ雲ちのつはくらめ　こまかにこれやかけるたまつささ（ママ）

3、たひたてはなみ風もなをしつかにて　おもふことなきふねにこそのれ

Ⅵ　参考文献

赤瀬信吾「扇と和歌と」（『国語と国文学』65―5、一九八八年五月）

並木誠士「高津古文化会館蔵『扇面草子』について」（『MUSEUM』

452、一九八八年十一月）
並木誠士「室町後期における絵画制作の場」（『美学』160、一九九〇年三月）
並木誠士「高津古文化会館蔵『扇面草子』・追録」（『MUSEUM』522、一九九四年九月）
岡雅彦「在外文献資料の紹介（三）『あふき集』」（『国文学研究資料館文献資料部調査研究報告』15、一九九四年三月）
徳田和夫「扇の草紙絵巻をめぐって（序説）」（『国語国文論集（学習院女子短期大学）』20、一九九一年）
徳田和夫「新出の『扇の草子』奈良絵本について―紹介と翻刻」（『学習院女子大学紀要』6、二〇〇四年三月）
徳田和夫「扇絵、二種―『扇の草子』『玉虫の草子』のこと（表紙解説に替えて）」（『伝承文学研究』53、二〇〇四年三月）
徳田和夫「〈翻〉女訓と扇絵」（『国語と国文学』86―7、二〇〇九年七月）
徳田和夫・安原眞琴「学習院女子大学図書館蔵　新出『扇の草子』の紹介」（『学習院女子大学紀要』15、二〇一三年三月）
迫村知子「絵／もじ―『扇の草子』をめぐる一考察」（『物語研究』3、二〇〇三年三月）
迫村知子「和歌の絵画性とモノ性―ハーバード燕京図書館蔵『あふき集』をめぐる「扇の草子」についての一試論」（人間文化研究機構国文学研究資料館編『日本文学の創造物』、二〇〇九年）
迫村知子「イメージとテキストの複層的関係―「扇の草子」を例として」（ハルオ・シラネ編『越境する日本文学研究』勉誠出版、二〇〇九年）
大口裕子「室町時代から江戸時代にかけての伊勢物語絵の一面―「扇の草子」を中心として」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要（第3分冊）』46、二〇〇一年二月）
大口裕子・石川透「慶応義塾図書館蔵『扇の草紙』解題・翻刻・影印」（『古典資料研究』3、二〇〇一年六月）
高橋亨「『花鳥風月』における伊勢・源氏」（三田村雅子・河添房江編『描かれた源氏物語』翰林書房、二〇〇六年一月）
伊東友季「個人本《日月武蔵野図屏風》についての一考察―軍扇との関わりにおいて」（『人文論究（北海道教育大学）』82、二〇一三年三月）
安原眞琴「判じ絵の始発―『扇の草子』の雅俗」（『国文学　解釈と教材の研究』41―4、一九九六年三月）
安原眞琴「『扇の草子』諸本と書誌」（『立教大学日本文学』76、一九九六年七月）
安原眞琴「新出資料『扇の草子』について」（『立教大学日本文学』78、一九九七年七月）
安原眞琴『『扇の草子』の研究―遊びの芸文』（ぺりかん社、二〇〇三年）
安原眞琴「扇文化の一断面―扇伝承と平家の女性たち」（小峯和

明編『『平家物語』の転生と再生』笠間書院、二〇〇三年）
安原眞琴「扇の草子―絵と歌がおりなす遊びの文化」（サントリー美術館展示図録『歌を描く絵を詠む―和歌と日本美術』二〇〇四年二月）
安原眞琴「『扇の草子』の新出絵巻―所載歌に見る特質」（『説話文学研究』41、二〇〇六年七月）
安原眞琴「『扇の草子』に見る十七世紀前後の『源氏物語』享受」（小嶋菜穂子・小峯和明・渡辺憲司編『源氏物語と江戸文化―可視化される雅俗』森話社、二〇〇八年）
安原眞琴「出版文化開花前夜における忘れられた媒体「扇」について」（『アジア遊学』109、二〇〇八年四月）
安原眞琴「『扇の草子』進出本一覧―附・家蔵屏風の紹介」（『伝承文学研究』57、二〇〇八年四月）
安原眞琴「文化の水脈としての『扇の草子』―時代と領域を越える絵画・扇・歌」（楠元六男編『江戸文化からの架橋―茶・書・美術・仏教』竹林舎、二〇〇九年）
安原眞琴「『扇の草子』の源氏絵―源氏歌絵享受序説」（高橋亨編『王朝文額と物語絵』竹林舎、二〇一〇年）
安原眞琴「戦国末期の伝承・和歌・御伽衆」（『説話・伝承学』18、二〇一〇年三月）
安原眞琴「『扇の草子』の再検討―文学・文化・絵画の横断」（『文学・語学』199、二〇一一年三月）
安原眞琴「『扇の草子』・「月次風俗図屏風」・要法寺版嵯峨本をめぐる一考察―十七世紀前後のメディア革命の背景」（『文学』13―5、二〇一二年九月）
安原眞琴「絵入り写本をみる・さがす―『扇の草子』を例に」（人間文化研究機構国文学研究資料館編『古典籍研究ガイダンス―王朝文学を学ぶために』笠間書院、二〇一二年）
安原眞琴「扇の草子―人々の遊び心が創り出す世界」（人間文化研究機構国文学研究資料館研究展示図録『江戸の表現―浮世絵・文学・芸能』、二〇一二年）
安原眞琴「ハーバード大学美術館所蔵「扇の草子」―永い眠りから目覚めた稀少な絵巻―」（人間文化研究機構国文学研究資料館編『絵が物語る日本―ニューヨーク　スペンサー・コレクションを訪ねて』三弥井書店、二〇一四年）
安原眞琴「新出・国文学研究資料館蔵『扇の草子』屏風―書誌と翻刻」（『立教大学日本文学』111、二〇一四年一月）

（担当・安原眞琴）

（えまきのかい）